
とある世界にチート転生してしまった件について

てんぷら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある世界にチート転生してしまった件について

【Nコード】

N4456T

【作者名】

てんぷら

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった俺。『とある魔術の禁書目録』とある科学の超電磁砲』に転生させてもらえることになった。過負荷やら機巧魔神やら斬魂刀などのチートを引っさげて、大暴れ!!! 笑いあり、涙あり、ラブコメ(多分)あり、ポロリもあるのかあ!!

ブログ：俺死んじゃったの？（前書き）

はい、初投稿です。

今回はブログ。

稚拙な駄文ですが、これからよろしくお願いします。

ブローグ：俺死んじゃったの？

目が覚めると知らない部屋のベッドの上で寝ていた。

「ここはどこだ……」

「気がつきましたか」

「うおっ！！」

ベッドの隣に、小柄な少女が立っていたので声をあげてしまった。

「あんた誰……？」

「はい、神様です」

ハッキリと答える少女に対し懐疑的な目を向ける俺。どうみても嘘臭いだろうが。

「失礼な。こっに見えても神様ですよ！！」

いやいやいやいやいやいやいやいや。

「むう。それなら証拠を見せてあげますよ」

そう言った途端、俺の頭に映像が流れてきた。具体的に言えば、宇宙の始まりだの原始時代だのロケットの発射だのアカシックレコード的な映像がだ。そして、最後に流れたのは……俺がイカを喉に詰まらせた映像だった。しかも、リアルな感触まで

今回は許すが次からは気をつけるよ……」

というか、ひぐらしも真つ青な謝り方をされたのら逆に謝りたくな
ってくるっつーの。

さて、俺はどうなるのかな。一抹な不安を感じていると、神様が謝
罪会見のような声で怖ず怖ず提案してきた。

「お詫びとして、生き返らせることはできませんが、好きな漫画や
アニメの世界に転生できるのですが」

「まじでエエエエエ!!」

「うわっ!!」

死んでから二回目のサプライズだ。エクステスばりに叫びましたよ。

「え? そんなことできるの!! あんた 救世主メッサーだよ、ゴッドだ
よ、神様だよ!!」

「神様ですよ。その様子だとオーケーぽいので、どこに行くか言っ
てください」

「じゃあ『とある魔術の禁書目録』と『とある科学の超電磁砲』の
世界に連れて行ってよ」

思考に一コンマ、返答に一刹那しか、かからなかった。

上条さんと一緒にそげぶしたり、インデックスちゃんと食事した
り、御坂とビリビリできるなんて夢とキボーにあふれているではな
いか。

「じゃあ、斬魂刀と機巧魔神とボックス兵器と宝具をを全て寄越せ。
アスラムキーナ

あと、アブノーマル 異常と マイナス 過負荷も使える上に、悪魔の実の力や自在法も使えるように……面倒くせえ！！アニメや漫画や小説やゲームの力を反動無しで自由に使えるようにしろ。後、諸々の武器を四次元ポケットにしまっておいてくれ。ついでに身体能力も聖人クラスまで上げといて」

ここまで一気に喋ったので、呼吸が苦しい。てか、ベタなチートにってしまった。

「そんなチートで大丈夫なのか？」

「大丈夫だ、問題ない」

大丈夫だった。神様が言うのなら、某インキュベータの契約とは真逆の評価で信頼してもいいだろう。

「ところで……」

「うん？」

「実は二つほど問題があるのですが」

「今、問題ないってイーノックなりに言ったばかりだよな！！」

前言撤回。インキュベータもいいところの不信感丸出したった。

神様が言うには、どうやら禁書世界では、その世界の能力。主に魔術や超能力は使えないらしい。

相手の能力を強化して使えるようになる『シ・エンド完成』、『ゲットアビリティプログラム』などでもコピー出来ないそうだ。

もう一つは、あつちに行ったときに何かしらの異常がでるかもしれないかもとのこと。

まあ、こっちで何とかすれば大丈夫だろう。

「んじゃ行くけどさ、何か色々ありがとうな」

「いえいえ、そんなことはありませんよ。元はといえば私の責任です」

そう言う神様の顔は、申し訳なさそうだった。

それやあそうだよな。うっかりミスで人を死なせちゃまったんだからな。

「神様」

神様の頭に軽く手を置く。

「あなたは自分の失敗で俺が苦しんでいると考えているみたいだが、それは違つぞ」

「え……?」

「だって、神様がこんなに可愛い子ちゃんだって知ることができて、嬉しいくらいだ。だからさ、そんな悲しい顔すんなよ」

ちよつと臭過ぎたかな。

けど、神様は嬉しそうだったから効果はあったようだ。柄にもないことをしちまったな。

突然俺の身体が白い光に包まれた。どうやら時間のようだ。

「じゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃい。色々大変なこともありますけど頑張ってください。見守っていますから」

「ありがとう」

神様が笑顔で手を振ってくれたので、俺も真似をした。

さあ、旅が始まる。

ブローグ：俺死んじゃったの？（後書き）

次回！！

何だかんだで、禁書世界に來た俺。だが、重大な問題が起きる！

そして、御坂美琴を筆頭とする超電磁砲四人組との出会い。強盗との戦い。

果たして俺はどうなってしまうのか！

第一話：超電磁砲組に早速介入（前書き）

すいません。更新が遅くなりました。超電磁砲一話に早速介入しちやいます。

第一話：超電磁砲組に早速介入

目が覚めると、またまたベッドの上で寝ていた。ベッドから降り、部屋を見渡す。神様によると、俺は上条さんと同じ高校に通っている設定らしい。なので、ここはとある学生寮だと思われる。

ほらだつて隣の部屋からにやーにやー聞こえているし。シスコン軍曹こと土御門元春が隣人ということになるな。

「つまり俺は上条さんの隣の隣に住んでいるってことかあ」

思わず呟いたのだが、何か違和感を感じる。妙に声が高い。これまた思わず胸に手を当てる。

「げげえっ!?!」

柔らかい膨らみがそこにはあった。

「ま・さ・か」

部屋にあった鏡の前に立つと、そこ映っていたのは、先程までの美青年（自称）ではなく、これはこれは可愛い美少女ではないか。

黒髪を肩まで切り揃えている清楚系。背丈は御坂くらい、バストの方は中くらいだ。

ご丁寧にも、とある高校（上条の高校な）の制服を着ているではな

いか。

「これが神様の言っていた弊害ねえ……」

鏡に映った自分を見つめる。

「なるほど、なるほど、なるほど」

にっこりと微笑んだ俺は、

「ふざけやがって。クソツたれが」

右方のフィアンマばりにブチキレた。

どうすんだコレ。これから女として暮らさないといかんのか。いろいろ問題があるだろーが。

というか何で女が男子寮で暮らしているんだよ。

頭を乱暴にかきむしっていると、机の上に一枚の紙が置いてあった。

『やつほー！ みんなのアイドル神様ですよー。』

どうやらアナタは女の子になってしまったようですねー。

名前は衣川晶きぬかわあきら、無能力者の肉体再生でレベル0、置き去りオートリパースということにして
おきました。チャイルドエラー

部屋の都合で特別に男子寮に住んでいる設定なので、安心してくだ
さい。

ちなみに、滞空回線アンダーラインは、この部屋に入らないようにしているので、
こちらから言わない限りアレイスターなどには正体がバレることは
ありませんよ。まあ、いきなり女になって戸惑うこともありますが、
アナタなら大丈夫だと信じてます。

なにか用があつたら携帯にかけてください。それじゃ、オーバー』
やーだー。

「畜生。余裕こいてた俺の責任だろうけど、これはキツいな。まあ、姿なんて変身能力でいくらでも弄くれるけど」

下世話な話だが、風呂入るときとかトイレとか一苦労だな。早乙女乱馬の気持ちがあつた気がする。

まあ、過ぎたことは何たらかんたらだ。取りあえず学校に出かける
としよう。

日付を見ると、どうやら御坂が黒子達とクレープ屋に行く日、つまり超電磁砲一話の日付ではないか。

「上手くいけば、超電磁砲組に介入できるかな」

善は急げとばかりに、俺は準備を始めた。四次元ポケットがベッドの脇にあつたので、そこから斬魂刀やらリングやらライフル等の武器を取り出す。

これ以上出せば部屋が崩れるくらいまで、出てきた。床がミシミシ
いっておるわい。

それを全部、制服の中に収納した。宗像形の異常性である『アブノーマル枯れラストた樹海』のお陰で、有り得ない量の武器が持てるのだ。

「しかし、まあ。ぶつちやけ重い」

俺には聖人クラスの身体能力があるので平気なのだが、いざという
時バテてしまいそうなので、真庭忍法『足軽』で武器の重さを消し

ておいた。

さあ、学校へ行こう！

髪をセットし、鞆を持って玄関の扉を開ける。外側に開いた扉がツンツン頭に命中した。

「朝っぱらから不幸だ……」

ため息をついた少年は、あろうことか主人公・上条当麻本人ではないか。

やっべー！！ 本物の上条さんだ。何かドキドキしてきた。

「うん？ 衣川、お前何か顔が赤いぞ熱でもあるのか」

イヤイヤ。ヒーローを目の当たりにして挙動不審になっているだけですぞ。

さて、俺は女の子な訳だから、女口調で話さないといけないな。

「ううん、大丈夫よ当麻くん。ちょっと寝不足なだけ。それよりさあ、今日は一緒に学校に行きましょ、うふふ」

ねえよ！！ 自分で話して吐き気がしてきたよ。プリッシュ以上に違和感が働きまくりだよ。しかし上条の方はというと、何かしらなかが照れくさそうに頬を赤らめているではないか。やべえ、上条さんにフラグ立てちまうかも。

「まーた、この子は女の子といちゃつきやがって！！ 今度は、爽やか系神聖美少女こと衣川晶に旗を立ててんのかにゃー」

突然、怨念と嫉妬と呪怨をグラス一杯に注ぎこんだような、声が飛

んできた。口癖で解ると思うが、金髪グラスン男の土御門元春君がだ。そっぴやあ隣だったな。

っーか、爽やか系神聖美少女って呼び名は何だ何だよ何ですかの三段活用。

「あら、おはよう元春くん。昨日は舞花ちゃんとラブラブしてたのかな」

「ぎくうー！！　なななななな何のことですか！？　土御門さんは、義妹に手を出したりなんか、し、してないにゃー……」

俺の指摘に土御門があからさまに動揺した。わかりやすい奴。追い討ちをかけるように、上条が気怠そうにつっこむ。

「別に隠さなくてもいいぞー。お前のシスコンっぷりはバレバレだからな」

「違うんだ、違うんです、違うのだからー！！」

シスコン
変態の絶叫が寮中に響き渡った。

何だかんだで、俺と上条と土御門の三人で登校することになった。

女言葉で話すのはマジ疲れレールガンだが、正直言って楽しい。会話の中にも禁書らしさがあって、原作を読んだときのワクワクが溢れている。

途中で話題が御坂美琴の話になった。

「当麻くん、随分と疲れた顔をしているね。昨日何かあったの。これは制理ちゃん健康通販グッズの出番かしらん」

「昨日はビリビリ中学生に勝負だの何だの追いかけて回されて、上条さんはヘトヘトなのですよ」

「ビリビリ中学生って、常盤台中学の御坂美琴さんのこと？」

「そいつは、舞花の友達じゃないかにゃー」

原作通り、上条は御坂に絡まれているようだ。御坂としては上条さんに素直に慣れないだけのようにだが、上条からすれば面倒なものだろう。ご愁傷様。

「もしかして当麻くん、その美琴ちゃんに何かしたのかなー」

御坂の能力を幻想殺しで消した上に、自分は無能力者だとか言っちゃって御坂のプライドを傷つけたのが原因なのは分かっているが、意地悪をしたかったので敢えて知らないふりをした。

「何だとお！！ カミヤん、てめエコラ。お前は女子なら中学生でも手を出すのか、このロリコンヤローめ」

「濡れ衣だー！！ 単に不良に絡まれているところを助けてやったら、意味不明な怒り方をされただけなのであって、上条さんは至極健全PTAに優しい少年ですよおお！」

「さてと、警備員アシチスキルの番号は、と……」

「衣川さーん！！ 誤解だからムシヨ飯生活だけは勘弁して、そして不幸だあああああ！！！」

学校に着くと早速小萌先生に会い、教室では青髪ピアスやら吹寄やら、予想外に原作キャラとの会話ができた。ぶっちゃけ、モブも含めたクラスメイト皆面白い上に良い連中だった。そんなでもってシステムスキャンがあったが、適当に無能力者判定レベルで済ませておいて（邪眼パネエ……）、放課後すぐさま教室から飛び出した。

「早速クレープ屋に行くのでしょうか」

予定としては、適当な理由を付けて御坂達に絡むつもりだ。バタフライ効果が起きるかもしれないが、神様曰わくよっぱどの事をしなければ某運命石の扉のようにはならないらしい。

何かあったとしても、俺が軌道修正すればいい。胸を高鳴らせながら歩いていき目的地に着いた。

小さい子ども達で随分と混雑しているな。結標が見たら喜ぶかもしれない。

後、某炎髪灼眼とその恋敵みたいな人がいたがたぶん気のせいだろう。

列に並ぶと後ろに長髪の女子中学生が並んできた。柵川中学の制服を着ているその子は佐天涙子だ。

更にその後ろには、超電磁砲の主人公御坂美琴が、並んでいた。周りには、ツインテールの白井黒子と花飾りをかぶった初春飾利の姿が見える。

超電磁砲組はちゃんとクレープ屋に着たようだ。クッククック。さて、どう絡んでやろうかなあ。

俺が内心ほくそ笑んでいると、順番が回ってきた。

「チョコバナナクレープを一個ください」

「はい。少々お待ちくださあい」

店員がクレープを作っているので、手持ちぶたさに待っていると、二つ後ろで御坂がイライラしたように腕組みをしていた。どうもゲコ太が欲しくて焦っているらしい。

「お待たせしました」

クレープを受け取ると、店員が「はい、どうぞ」と言って、髭の生えたカエルのストラップを渡してきた。

「最後の一個ですよ」

「どうも」

その瞬間、後ろにいた御坂が地面に腕を着けて落胆していた。原作じゃあ佐天が最後のゲコ太を買っていたが、俺一人分ずれたようだ。

このまま持って帰るのもそれはそれで面白そうだが。ゲコ太を羨ましそうに見つめる御坂が余りにも不憫なので、差し上げることにしよう。

俺は御坂に声をかける。

「あの、コレ要ります?」

「え？ いいんですか!？」

「大丈夫だ、問題無い」

「ありがとう!！」

柄にもなく、御坂は歓喜の声を上げる。こんぐらい素直な反応を上条にも見せればいいのに。

「よかつたら、いっしょにクレープ食べましょう」

さり気なく四人組に交わろうとする俺。まあ、こんな感じで上手く介入することにしよう。

ルンルン気分で鼻歌を歌う御坂といっしょに黒子と初春がいるベンチへ向かう。そして、自己紹介をすることになった。

「私の名前は御坂美琴と言います。それで、隣のツインテールが私の後輩白井黒子で、後ろの二人は左から順に佐天涙子さんに初春飾利さん」

御坂の言葉に、黒子初春佐天が礼をする。

「美琴ちゃんに黒子ちゃん、飾利ちゃんに涙子ちゃんね。わたしは衣川晶。あと、敬語は別に使わなくても良いよ。なんか堅苦しいというか、フランクな方がいいよね」

「うん。そうじゃ、よろしくね衣川」

「……すごくフランクです」

どうにも女口調に慣れてしまった。いまはまだ地の文は男だが、このままだと、新約に入るころには完全に女になっているかも知れない。

その後御坂達と談笑していると、初春が何かに気付く。

「うん？」

「どうしたの？」

初春に声をかけると、

「あそこの銀行なんですけど」と言っつて向こうの銀行を指差す。

「何で昼間っから、防犯シャッターを下ろしているんでしょうか……」

その瞬間、防犯シャッターが外側に膨らみ出し、炎と共に爆発を起こした。

煙と共に悲鳴が上がる。御坂に絡んでいた黒子は、納豆と生クリームがトッピングされた悪趣味クレープを一気に平らげて駆け出した。

さあ、楽しい楽しいショータイムの始まりだ。

第一話：超電磁砲組に早速介入（後書き）

いかがでしたか。

長くなったので、途中で切りました。

第二話：強盗VS俺だと！？（前書き）

今回は強引に晶ちゃんと強盗を戦わせました。

第二話：強盗VS俺だと!?

サイレンが鳴り響く中、黒子は初春に指示を出しながら、ジャッジメントの腕章を身に着ける。

「……黒子!」

手伝おうとする御坂だが、それを黒子がたしなめる。

「いけませんわお姉様。学園都市の治安維持は、わたくし達のお仕事。今度こそ、お行儀よくして下さいな」

御坂の方も黒子に任せることにしたようだ。

煙を吹き出している扉の中から、三人の強盗グループが飛び出す。奪った金を持って逃走する算段だろう。

「お待ちなさい!」

すると、強盗達の前に黒子が立ちはだかった。

「ジャッジメント風紀委員ですの。器物破損及び強盗の現行犯で拘束します」

間近で聞いてみると、随分迫力があるな。上条さんの例の台詞も早く聞いてみたいものだ。

三人組の強盗は少しの間沈黙すると、途端に笑い出した。

「ぶっふあふあっふあー!! 何だあ、こんな小さなガキがジャッジメント風紀委員だとお」

「風紀委員も人手不足かよ」
ジャッジメント

仮にも訓練を受けている風紀委員ジャッジメントに対し、余裕綽々でいられるコイツらの神経が理解できん。大方幻想御手レベルアップを使って、調子に乗っているのだから。

「おらお嬢ちゃん、怪我したくなかったら、さっさとお家に帰りな
!」

三人組のうち、真ん中のデブが黒子に飛びかかってくる。
だが黒子はデブの腕を華麗にかわすと、

「そういう三下の台詞は死亡フラグですわよ」

持ち前の格闘術で地面に叩き伏せた。

「凄い……」

「流石、黒子」

佐天と御坂は各々の感想を口にする。

「この野郎……」

髪ストの逆立った強盗（名前忘れた）の手から炎を放った。発火能力ハイロキネシ者ストのようだが、黒子は意にも介さず突然姿を消すと、強盗の頭上に現れてドロップキックを喰らわせた。

「へえ、黒子ちゃんって、テレポーターだったのね」

怪しまれないように、一応驚いたフリをしておく。すると、御坂は自分のことのように誇らしげになった。「黒子は、常盤台で唯一のテレポーターなのよ。まあ、しょっちゅう変態なことに使いやがるけどね……」

「詳細を求む」

「どうしてアンタはそこで鼻息を荒くするのよ!?!」

「あれ？ 飾利ちゃん」

俺は御坂のツツコミを無視して、初春とバスガイドが揉めているところを指差す。

「危ないですから避難してください!!」

「でも……!?!」

「どうしたんですか!」

俺と御坂、佐天がバスガイドを尋ねる。

「どうやら、子供が一人戻ってこないらしい。」

「なので男の子を捜索することになった。」

「じゃあ初春さんと私はバスの辺りを探すから、佐天さんと衣川は道路側を探して」

「こういうときになると御坂は頼りになるな。流石常盤台のエースだ。原作では、佐天が強盗から子供を庇って怪我をするのだが、そんなの俺が許さない。」

すると、ちょうどよく道路脇に佐天が向かっていた。子供を連れて行くこうとする強盗に掴みかかり、佐天は止めようとする。

「ああ！？ 何だためエ、放せよ……！！！」

「だめえ！！！」

とっさに俺は、ハンバーガーを懐から取り出しパクリと食べる。すると、俺は超高速で佐天と強盗の間に移動した。

「き、衣川さん！？」

「な、何だ……！！？」突然現れた俺の姿を見て、激しく狼狽する二人。

今のは、代償行為としてハンバーガーを食べることで高速移動ができる契約者の能力なのだ。ちなみに俺は、ハンバーガーが大好きなのさランランルー。

「くそっ！！！！！」

しばらく硬直していた強盗は気を取り直すと、足を上げそのまま俺の顔を蹴り飛ばした。

激痛が顔面に響く。そのまま地面に叩きつけられ、体にも衝撃が走った。

「衣川さんッ！！！」

佐天と初春が悲鳴に近い声をあげる。

黒子は金属の矢を指に挟んだまま駆けつけようとしたが、

「黒子っ！！！！！」

御坂の怒声がそれを遮った。どうやらマジ切れモードになっちゃったらしい。まあ、佐天じゃなくて俺でも怒ってくれるのは嬉しいが。

「ココからは私の個人的なケンカだから……」

そして、体中に紫電を撒き散らして宣言する。

「悪いけど、手出さ……」

「痛エエエだろお！！ 糞野郎がアアアアあ！！」

俺は外面もなく、凄惨な怒号を放った。その場にいた俺以外の全員が口を開けたままになる。

優しいお姉さんキャラが突然切れたからな、そうなるだろうよ。

理由だと？ 要は痛いんだよ！！ ぶつちゃけ聖人クラスの身体能力があつたところで、顔面を蹴られたら痛いだろうが！！ 例え防御力や体力があつても、1ダメージも同じダメージ何だよ！！

俺を蹴り飛ばしたクソ強盗は、白い車に乗り込みエンジンをふかす。砂埃を立てながらUターンをすると、そのまま猛ダッシュで向かってきた。

俺は道路の真ん中に立ち、みんなをまとめて吹き飛ばそうとする車と相對する。さあて、転生生活最初の大暴れだ。

「吹っ飛べ、ゴラア！！」

ヴェントちゃんよろしく叫びながら、車に向かって拳を放った。

「17連釘パンチ!!」

凄まじい連撃を浴びた車は、機体の至るところを凹ませながら宙を二、三回転してアスファルトに落下した。

砂埃が舞う。

クラクションが、響き渡る中俺は思った。

やべえ、どう説明すればいいんだよコレ……。

夕方。警備員《アンチスキル》が、強盗の送検や現場の整備をしている。黄泉川先生もいたじゃん。忙しそうだったから声をかけなかったけど。明日学校で会えるからOKじゃん。

黒子と初春は、警備員《アンチスキル》への報告をしていた。そんな中、俺と佐天はというと。

「本当に、ありがとうございました」

先ほどの少年の母親からお礼の言葉をいただいていた。

「なんと、お礼を言って良いか……。ほら、あなたも」

「おねえちゃん達、ありがとー」

結標なら卒倒しかねない笑顔を向けてくれたので、俺と佐天は笑顔で返した。

嗚呼、神様。俺はこの世界で上手くやっていけそうです。
親子とバスガイドが帰ったところで、御坂達が戻ってきた。

「お手柄だったね、二人とも。凄くかつこよかったよ」

いやあ。御坂に褒められると、何か照れるなあ。出番を喰っちゃったけど。

「『そんなことないよ。』 『美琴ちゃんだってわたし達のために、クソご……じゃなくて強盗に立ち向かってくれたじゃない』」

俺は、かつこつけて返事をした。御坂は黒子に抱きついていて、初春は佐天と俺をを心配そうに見つめている。

「お姉えさまあ〜」

「だーかーらー。アンタはいい加減離れなさいってばー」

「佐天さん、どこか怪我していませんか」

「大丈夫大丈夫。衣川さんが守ってくれたからさー」

うんうん。平和が一番だよ、やっぱ。

俺はそのまま帰ろうときびすを返し……。

「……で」「」「」

四人娘の声が、それを許さなかった。

「な、なに……かしら？」

「アンタのことについて、説明してもらおうよ」

「そうですね。いくら何でも、車を素手で吹っ飛ばすなんて、並みの能力者には出来ないことですわよ」

やばいな。御坂と黒子は尋問モードに入っているし、初春と佐天はヤジウマモードに入っているし。俺は咄嗟の言い訳をする。

「いやあ、わたしは無能力者一《レベル0》なんで、今のは鍛えただけというか……」

「《レベル0お！？》」

また一斉に叫ばれた。こんなのおかしいよ。

その後、四人をなだめるために嘘説明をした。

黒子は半信半疑だったものの、その他は納得してくれたようだ。ただ、無能力者の佐天はショックを受けたのか、やけに静かだった。マイナスな話ではないから、大丈夫だ問題無いだろう。

それはともかく、よほど釘パンチが凄かったのか、御坂から「勝負しなさい」と絡まれた。

「何で、美琴ちゃんとケンカしなきゃいけないのよ」

「だって、車をぶっ飛ばすような奴に負けてなんていられないでしょ……！」

イヤイヤおかしいだろ。御坂が上条に絡むのは解るけど、コイツっ

てこんなキャラだったけ？

「お姉様」いきり立つ御坂に黒子が横やりを入れてくれた。

「衣川さんの運動能力は人間的にはあり得ないものですが、それも常盤台のエースの超電磁砲《レールガン》であるお姉様の方が優位なはずですよ。第一、例のあのバカさん以外にもケンカをふっかけるつもりですか」

『あのバカ』という、単語が出てきたおかげか、御坂は黙然とする。

「ごめんね。私ちょっと興奮しちゃって」

「いいのよ。あなたのことは、愛しのツンツン頭上条君に色々聞かせてもらっているし」

御坂の顔が一瞬で沸騰し、真っ赤になった。流石、ツンデレ。

「え、ちょ、アンタあのバカの知り合いなの！？ ていうか、愛しのなんて、そんなにやことにゃい……」
「なんかブツブツ言い出したよこの娘。」

「んじゃあねえ、また会いましょう四人ともー」

俺は隙を付いて猛ダッシュすると、その場から逃げ出した。後ろでビリビリになっていたが気にしないことにしよう。

第二話：強盗VS俺だと！？（後書き）

御坂が空気にならないようにしたら、初春が空気になってしまった。
介入って難しい……。

第三話：ステルス対策は万全な件（前書き）

今回は眉毛事件に介入させちゃいます。

ちなみに、衣川ちゃん以外にもオリキャラを出そうか考え中です。

第三話：ステルス対策は万全な件

ある日、俺は四次元ポケットをまさぐっていた。

「ええと、あつたあつた」

俺はポケットから『着せ替えカメラ』を取り出した。そして、常盤台中学の制服に着替える。

別にコスプレ趣味に目覚めたわけではなく、ちゃんとした目的があるのだ。

名付けて『学舎の園ヘレッツスニーキング作戦』だ！！

今日の日付は、アニメ超電磁砲三話『ねらわれた常盤台』にあたる。眉毛女が佐天を襲った事件と言えばわかるだろう。何とかして学舎の園に潜入して、眉毛事件に介入しようという話だ。

ここ数日は、介入するチャンスに恵まれず、デルタフォーアスと馬鹿をやる日々が続いていた。俺の女らしさにも不本意ながら磨きがかかってしまい、最近では自分で違和感を感じなくなってしまった。最初はドキドキしていたお風呂も普通に入れるようになったり、肌や体重を気にするようになってしまった。

このままでは、新約どころか一方通行戦まで男でいられるか怪しい。山月記の虎になったような気分だ。

「ぶっちゃけ可愛いけどな」

自画自賛ここに極まり。

取りあえず外に出て、学舎の園のゲートの前に立つ。

一応、常盤台の制服を着ているので通れるとは思うが、念には念を

入れてオクトカムを使って姿を消す。
それで、中に堂々と侵入した。

「んじゃあ御坂達と合流するか……」

俺は常盤台中学の校門前に向かった。そこに御坂、黒子、佐天、初春がいた。佐天は制服が水溜まりでびちゃびちゃになっている。

「あらー、御坂さん達。奇遇ね」

図々しく合流する俺。偶然も甚だしいわ。

「あ、アンタなんで、こんな所に。そして、何で常盤台の制服を着てんのよ!？」

「制服マニアの友達に貸してもらったの。わたしココのケーキを食べるのが夢だったのー」

ムギちゃんよろしく笑顔で言う俺に、御坂は呆れ顔になりながらも同行を許可してくれた。

常盤台中学の共用シャワールームで、初春は不機嫌そうにむくれていた。

「佐天さんだけずるいです……」

「常盤台の制服が着たかったのね……」

「そつだ!」

急に初春のテンションが一変する。俺の言葉に何か思いついたようだ。

「私の制服と交換しましょう！ そうしましょう、それがいい！」

「ちょ、急に抱きついてこないで！ あと、サイズ合わないからー
！！！」

初春の制服脱がし攻撃から耐えきった後、俺達はケーキ屋に着いた。

予定通り、初春と黒子は風紀委員ジャッジメントの仕事でいなくなり、佐天は御手洗いに行ったので、御坂と二人きりになった。

「んで、こうなるわけと……」

今現在俺は御坂から、前回有耶無耶にした件について、質問（という名の尋問）を受けていた。

御坂はテーブルに腕を組んで座り、俺は小ぢんまりと座っていた。

「まずは、あのバカについて教えてもらおうわよ」

やっぱ、その話題か。よし、話をそらすか。

「わたしが頼んだから別にいいんだけど、他の年上の高校生にはちゃんと敬語を使おうね……。いつか怒られるわよ」

一ヶ月後にギョロ目の女にな。

「話をそらさないで！！」

テーブルに拳を叩きつけて怒鳴られた。あまり上条の話をするると本人に迷惑がかりそうだしな。

俺は愛想笑いをする。

「え……と、ツンツン頭の彼とは同級生なだけよ……。美琴ちゃんが興味を持つようなことは余り知らないよ」

だから、そんな剣幕で睨まないでください御坂大明神様。

「少しでもいいのよ!! アイツの能力とか、住所とかその他諸々!!」

「ていうか、美琴ちゃんは当麻くんと何がしたいの」

「今度こそ、あの馬鹿をとっちめる!!」

おお、凄い気迫だ。

よっばど、上条に負けっぱなしなのが悔しいと見る。
少し意地悪をしたくなってきたな。

「でもさあー、当麻くんは結構女の子にモテモテ（限りなく答えに近い）だからさー、美琴ちゃんに構っている暇がないんじゃないかなー」

「え……」

「『一種のハーレム王ってヤツ?』『当麻くんの部屋に案外女の子がいたりして』『銀髪シスターやら巨乳サムライガールやらDS幼女やらかまचीの嫁やら一万人近くのクローン少女やらアルビノ百合子ちゃんやらを、落としちゃっているんじゃないのかしら』」

後半かつこつけて危ないネタをふってしまったが、御坂には効果覿

面だったらしく、顔を赤らめてブツブツ言い出した。端から見るとキの字に見えるからやめた方がいいぞ。

「まさかあんな冴えない馬鹿に限ってそんないやでも不良に説教入れるようなヤツだし意外とモテモテなんじゃ……」

「あら？　そういえば涙子ちゃん遅くないかしら」

そろそろ介入する時間なので、御坂の思考ただ漏れ状態を中断させた。

御坂の方も異常に気がついたらしく、

「言われてみると、かれこれ十分間いないまよね。大の方をしているわけじゃないし」

「女の子が大とか言わないの……」

御坂を連れて高級チックなトイレに入るとそこには、

「佐天さん!？」

「涙子ちゃん!」

ぐったりと意識を失っている、佐天涙子の姿があった……。

意識不明の佐天を連れてジャッジメント風紀委員第一七七支部に俺はいる。

今は常盤台狩りの犯人を探しているところだ。俺は犯人を知っているがな。面倒だから、ちゃっちゃと誘導してしまおう。

「ねえ、飾利ちゃん。認識を阻害するような能力者を探してみて」

「あ、はい」

初春はキーボードを少し叩くと、それらしきデータを発見した。

「ありました。能力名は認識阻害^{ダミーチェック}。該当する能力者は一名、関所中学校二年重福省帆^{じゅうふくのみほ}」

「そいつですわー!!」

黒子がいきり立って、声をあげる。落ち着けて。

「でも……この人異能力者^{レベル2}です。自分の存在を完全に消せるほどではないです……」

もしかすると姫神はダミーチェックの能力を持っているんじゃないか。あの空気度は異常すぎる。

「良い線いってると思ったけど……」

「結局、犯人はそうそう見つからないって訳よ」

御坂がため息をつく。それと同時に佐天が目覚めた。この世界はフラグで動いてるのかよ……。

佐天は頭を抱えてソファーから起き上がる。

「「ぶふっ……!!」」

佐天を除く俺達四人さ急に吹き出す。

「ちよ、涙子ちゃん鏡見て」

俺は笑いを堪えながら、佐天に懐から出した手鏡を渡す。

刹那、少女・佐天は驚愕する。

「な、ななな何これええええ!!」

彼女の眉は、両さんみたいな感じのふと眉に落書きされていた。

「佐天さん気を確かに……ぶっふ!!」

「涙子ちゃんドンマイ………、発ッ」

「二人とも笑うなー!!」

「火ッ！ 火アーツ火ッ火アツ!!」

「何ですか!? その笑い方は」

おやおや。灯台フロスエルクレスの旦那を知らないとは、佐天には照時間ショウタイムが必要かな。初春の場合はふわふわ時間タイムだがな。今回は見逃すとして、俺は佐天にモニターを見せる。

「涙子ちゃんを襲ったのってこの人かしら?」

「こ、コイツだあ!!」

「ええ!?!」

佐天の叫びに御坂は驚愕する。黒子も同じ様子で佐天に問いかけた。

「あなた……犯人を見たんですの？」

「はい……。あの時、鏡の中に確かに」

ダメージ
認識障害はあくまでも、人の脳を誤魔化すだけに過ぎないので、カメラや鏡にはちゃんと映ってしまうのだ。そういう点では、冒頭に使ったオクトカムとは違うわけだ。

「ふっふっふ……」

見ると、佐天は忍び笑いを不気味かつ不敵に漏らしていた。ご立腹のようだ。

「この眉毛の恨み……晴らさないでおくべきか!!」

常盤台狩り犯人捕獲大作戦が始まった。

その後事前に打ち合わせしたとおりの位置に、俺は立っている。学舎の園の路地裏にいるのだが、人が全然いないではないか。

「さて……。眉毛ちゃんはどこかな」

十分ぐらい粘っていると、スタンガンを持った女子中学生を発見した。獲物を襲うチャンスを伺っているようだ。

「ハアあゝい。元気にやゝ？ 常盤台狩りの犯人ちゃん」

「くっ!？」

途端、重福は能力を使って姿を消し、その場から逃げ去った。お前はオオナズチか。無線機で初春に指示を仰ぐ。

「飾利ちゃん、犯人はどっちに？」

『路地を出て左、三番街に入ってください』

「了解した」

初春の指示通りに進むと、それらしき気配を感じた。

「オオナズチにはコレかな」

アーチャーの投影で、煙玉を取り出し犯人の居そうな方へ投げつける。

白い煙が路地裏を漂い、犯人の姿を浮かび上がらせた。

「しまっ……」

犯人は可愛らしいゆかりんボイスで息を漏らす。

またまた投影で雛見沢製の巨大な鉈を取り出すと、近くの壁に叩きつけた。犯人は萎縮する（多分）が、構わず狂ったような笑い声を上げる。

「アハハハハ！！ 早く逃げないと、怒った私に殺されちゃうよお！！」

この場合「おいで、鉈女」と返答して貰いたかったが、相手にとっちゃそんな事情は知らんこっちゃで、一目散に逃げ出された。このまま犯人を追うのは面倒くさい。

俺は懐からスカウターを取り出し、スイッチを入れた。

「戦闘力たったの5……。ゴミが」

侮蔑の声をだし、俺はスカウターを頼りに犯人との追いかけっこを始めた。

人を騙す認識阻害も機械は騙せないようで、犯人は見事追いつめられ公園まで逃げていった。

そうして、俺と御坂、黒子、佐天の四人で犯人を取り囲んでいる。

「どうして……」

重福の口から、疑問が溢れ出す。

「どうして、私の認識阻害ダメーチェックが聞かないの!？」

お前な、自分の能力のスペックぐらい把握しておけよ。俺だって、色んな能力を数日間チェックしていたんだぜ。

「もう一度、自分を見直すことね」

俺の言葉に、重福は鋭い敵意を向ける。

「これだから、常盤台の連中は……」

そのまま、手にしたスタンガンを持って俺に向かって突進した。って俺かよ!!

そういや俺って、常盤台の制服を着てたんだよな。

しかし、そこは流石俺。『最強の目』で、眉毛の攻撃を華麗に回避した。

「えっ……」

「ちえりおー！」

動揺する重福の背中に、肘鉄を食らわせた。

そのまま、彼女は地面に倒れて気絶した。

その間、ベンチに寝かせた重福を前にして、佐天は不敵な笑みを浮かべていた。

「さあさあ、どんな眉毛にしてあげましょうかな……って、え……」

マジックを手にしながら、犯人のアイシールドみたいな前髪をかきあげた佐天は絶句する。

そこには、流石の両さんも同情するレベルの、オモシロ眉毛があるではないか。

そこでまたまた都合よく犯人が目を覚ます。そして、ほぼ反射的に眉毛を隠しながら、短い悲鳴をあげる。

佐天が、非常に気まずそうに声をかけた。

「ええと……」

「……おかしいでしょ」

「「はい？」」

「笑いなさいよ！ 笑えばいいんだわ！！ あの人のために」

御坂らが首を傾げるのにも構わず、眉毛は勝手に変な過去を語り出した。

要約すると、彼氏が常盤台の女子と浮気をしていたので問い詰めたところ、眉毛が変だからという理由で振られたという、俺的にはどうでもええ話である。

そして、

「この世の眉毛、全てが憎い！！ だから、みんな面白い眉毛にしてやるうと思っただのよ！！」

「うわっ……」

思わず、『炎刀・銃』で撃ち殺しそうになったが、色んな意味でヤバいので我慢した。

（呆れて）押し黙る俺達を見て、重福は眉毛見せつけるような仕草をした。

「……どうしたの。さあ早く笑いなさいよ！！」

「変じゃない思うよ、その眉毛……」

優しく声をかけた佐天に、いきり立っていた重い福が動揺する。続けざまに佐天が、一步引いた風ながらも言葉を紡ぐ。

「何ていうかチャームポイントみたいで、あたしは好きだなあー」

言い方が、まずい料理を無理矢理誉めたような感じだぞ、佐天よ。

しかし、重福の気に障った様子ではなく、むしろ嬉しそうだ。その証拠に、彼女の頬が赤くなっていた。

再び啞然とする佐天に対し、俺は優しく語りかける。

「二人ともお幸せに」

「ええっ！？ いきなり何言ってるんですか」

「え？ 涙子ちゃんって百合じゃないの。PANTSUラブじゃないの」

「……はあ？ 何であたしが」

あれ？ この娘初春のパンツをいつも覗いているよね。

というか、何で御坂も黒子も、俺をそんな冷たい目で見ているの。

これじゃあ、まるで俺がHENTAIみたいじゃないか。

「そ、そんなことよりさあ、涙子ちゃんの眉毛って消せるかな」

余りにも気まずいので、眉毛女に話題を振った。

「そのお、第十学区の大学で開発されていた特殊なインクを使っていたので……。一週間は消せないんです、ゴメンナサイ!!」

重福は非常に申し訳なさそうな表情を浮かべ、頭を下げた。ほぼ同時に佐天も頭を下げる。

「佐天さん……。帽子を用意してあげますから、落ち込まないでく

「ださいな」

佐天の肩に優しくてを置く黒子。佐天はやケになったような笑いを漏らしている。

余りにも可哀相なので、ポケットから液体の入った瓶と白いガーゼを取り出し、佐天に呼びかける。

「ちょっと、顔貸して」

ガーゼに液体を一滴かけ、佐天の眉毛を拭いた。すると、あら不思議。落書きが一瞬で消えたではないか。

その光景に、俺以外の全員が驚愕していた。

「な、アンター一体何をしたのよ……」

「ガーゼで拭いただけですが、何か」

というのは嘘八百で、実は全てを無かったことにするマイナス過負荷大嘘憑オイルフイグきを使って、落書きを無かったことにしたのだ。無論、いきなり眉毛が消えると怪しまれるので、ガーゼで偽造しておいた。

佐天は大喜びしたようで、仕切りに俺の手を握っている。対して御坂は、訝しげに自分の手に持った瓶を睨んでいた。

不味いな、何か怪しまれている。まあ、所詮はただの水なので、問題は無いだろう。

「ところで、衣川さん」

黒子が俺に声をかけてきた。もしかして、バレたか。

「その液体を貸して貰えませんか」

「はい？」

「ほら、落書きの被害者は大勢いますし、その方々のアフターケアしてあげませんと……って、顔色が悪いですわよ？」

予想斜め上でピンチだ。だって、ただの水だもん。

俺はとつさに、懐から携帯を取り出し耳に当てる。

「俺だ。ああ、『ドラゴン』の秘密を探ろうとする、鼠がいた。直ぐに、記憶操作を……」

「電源の入っていない携帯で、何やってんのよアンタは……」

そついや御坂って電気を視認出来るんだったよな。

「というか、その液体を貸してほしいと……」

「……さらばだ」

俺を引き留めようとする黒子を見無視して、再び全力でその場から逃げ出した。

次からは墓穴を掘らないようにしよう。俺はそう誓ったんだ。

重福が警備員アンチスキルに輸送されたのを見届けた後、上機嫌でスキップをし
ながら、佐天は帰った。

謎の高校生・衣川はというと、三十分前に突然どこかへ逃げ出した
のだ。黒子は少し追ってみたが、見事に巻かれていた。

美琴はふと、白井に声をかける。

「彼女、どう見ても完璧に消えていたよね」

「そういえば、異能力者レベル2という話でしたのに」

「それとさ……」

美琴は手に持っていた瓶を、白井にみせる。どう考えても、ポケッ
トに納まらない大きさだ。

それを衣川は、ポケットから取り出していたのだ。

「これ、ただの水よ」

「本当ですよ！？ それでは、佐天さんの落書きを消したのは一体
……」

衣川が佐天の額を拭いたら、まるで無かったことにされたように、
落書きが綺麗にとれたのだ。

更に数日前、車を吹き飛ばすほどの怪力を見せていた。

「アイツ、無能力者^{レベル0}だつて言つてたよね」

「ええ、書庫^{バンク}にもそう書かれていました。後、彼女は置き去り^{チャイルドエラー}だつたことくらいしか……」

「もしかして書庫^{バンク}が間違つていたとか」

白井は少し沈黙したが、すぐさま「まさか」と一蹴した。もちろん、美琴も本気で言つた訳ではない。

ただ、美琴は衣川から得体の知れない何かを感じていた。それが善なのか悪なのかは分からない。

ただ。

美琴には気になることがあつた。

(衣川はあのバカと一体……)

どうでもいいことなのに。その疑問が、彼女の頭からしばらく離れなかつた。

学園都市に点在する『窓のないビル』。内部には巨大なビーカーがある。その中で、男にも女にも大人にも子どもにも聖人にも囚人にも見える『人間』が佇んでいた。

学園都市・統括理事長アレイスター「クロウリーは一人呟いた。

「衣川晶か……」

アンダーライン
停滞回線を駆使して、学園都市を監視していたアレイスターは、一人の人物に着目した。とある少女が、常軌を逸した身体能力で車を破壊したのだ。

彼女は無能力者レベロと称していたが、アレは常識で起こせる現象ではない。

だが、それだけでアレイスターの興味を引いたわけではない。己の能力を隠している能力者など、それなりには存在するのだ。

理由は二つ。一つは、衣川晶からAIM拡散力場を感知することが出来なかった。それは彼女が能力者、もとい科学サイドではないことを示していた。

もう一つは、衣川の所有していた有り得ない量の装備から、未知の力を感知したからだ。それは超能力や魔術ではない何か。

アレイスターの情報網には、置き去りチャイルドエラーとして学園都市に来た、普通の学生としか示されていない。

土御門元春のような魔術サイドからのスパイではないということになる。

（干渉してみるのも悪くないが、今は幻想殺しイマジンブレイカーと同じく様子見といったところか……）

そして、『人間』アレイスター「クロウリーは口元を歪め呟く。

「さて、君はこの世界をどう傾けるのかな、衣川晶」

第三話：ステルス対策は万全な件（後書き）

最近テストやらで忙しく、更新が遅れ気味です。頑張っ
て執筆をします。のでご容赦ください。

第四話：虚空爆破事件……だと……！？（前書き）

今回は、衣川ちゃんがデパートでお買い物します。

深夜のテンションで書いたのでご了承下さい。

テストあるのに、何やってんだらうか（苦笑）。

第四話：虚空爆破事件……だと……！？

七月一八日。

俺は、ただ今セブンスミストで買い物中だ。

何を買うのかというと、洋服を探しているのだ。

転生した当初、クローゼットの中には制服とパジャマが二、三着あるくらいだった。

これではいかん、と思い、服を調達することにした。

実を言うと、服くらいなら俺の能力でピッコロのように出すことができる。しかし、学園都市の服というものを見たいから、あえてしなかった。

忘れているかもしれないので確認しておくが、今の俺は美少女です。美少女です。美少女です。

大事なことなので三回言いました。

こういつちゃあ何だが、地味（非常に失礼）な制服じゃあ俺の可愛らしさは半減するし、そこいらのモブと同程度に見えてしまう。

ここは俺を引き立てるような、オサレなファッションにしてやろうじゃないかね。

「ウエへへ。さあて、何を買いますよっかなあ」

至極気味の悪い笑みを垂れ流しながら、目についた服を片っ端から試着し始める。

数十分後。俺の両手は買い物袋でふさがっている。
いやあ、いい買い物をしたね。

目的を果たした俺は、そのまま自宅でファッションショーを開催しようとする。帰路に着こうとした。
そついや何か忘れてる気がするが、はて？

思案気味に足を運んでいると、向こうに見覚えのあるツンツン頭がいた。

「おーい、当麻くん」

俺の呼びかけに気づいた上条は、こちらへ向かう。

ふと見ると、小学校低学年ぐらいの小さい女の子を連れていては
ないか。アクセラレータ一方通行が喜びそうな、可愛い幼女だ。

「あら、当麻くんって、やっぱりロリコン？」

「ちげーよ。やっぱりって何だ。この子に、洋服屋に連れていけて頼まれたんだよ」

見知らぬ幼女に、買い物付き添いを頼まれている時点で、異端審問確定なのだが、今はやる気持ちを抑えることにしよう。

俺は女の子に笑顔で話しかける。

「お姉ちゃんも、一緒について行っていいかな？」

「いいよー。あたしね、いーっぱい、おめかしするんだよ」

可愛いな。やっぱ、子どもは純粹でいいな。

「ねえ、お嬢さん。『にゃーん』って言うってみて」

「うん？ にゃーん」

「カ・ワ・イ・イ！！」

「何やってんだよ、お前……」

中の人ネタで遊んでいる俺を上条は呆れ気味に見つめていた。幼女は正義。異論は認めぬ。

おふざけはコレくらいにして、上条を連れて洋服売り場に戻っていると、またまた見覚えのある茶髪がいた。

彼女は鏡の前で、子供チックなパジャマを持っていた。恥ずかしさから、周りに見られる前に急いで合わせているようだ。

「なにやってんだビリビリ」

「ずいぶん、ラブリーなパジャマね（笑）」

上条と俺に突然声をかけられた、御坂は壊れた鳩時計のような驚き方をした。

とっさに、パジャマを後ろに隠しているが、丸見えや。

「な、なんでアンタ達がココにいんのよお……」

「いちゃ悪いかよ」

動揺中の御坂さんが、結構失礼なことを言ったので、上条さんがツツむ。

「おにいちゃん！ おねえちゃん！」

すると女の子がこっちにやって来る。好奇心旺盛な年頃らしくアチコチ見て回るので、少し目を放すと何処かへ行ってしまっただ。

「あ！」

うなり声をあげて威嚇している御坂に、ふと女の子が声を出した。

「このまえの、常盤台のおねえちゃんだあ」

御坂も女の子のことを思い出したようで、

「ああ！ カバンの……。って、まさかアンタ達の兄弟!？」

「違う違う。俺はこの子が洋服店探してもらったから、案内してたんだ。それと、衣川。お前ビリビリと知り合いだったのか」

「この前、会ってね。お友達になったんだ」

銀行強盗や通り魔と一緒に捕まえた仲だ。御坂の方はどう思っているか知らんが、俺は友達だと思っているぞ。

「そっちこそ、アンタと衣川はどんな関係なの!!！」

何故か喧嘩腰の御坂さんに、上条は面倒くさそうに答える。

「どんなって……。ただのクラスメートで馬鹿やってる仲間な」

「え〜。『ただの』じゃないでしょ」

そう言うと、俺は上条の腕にしがみつく。俺が元男と考えれば、吐き気を催すことこの上ないが、いまの俺は美少女である。瞬間的に上条と御坂の顔が赤くなった。

「と・う・ま・く・ん、とは〜。あんなことや、こんなことをやった仲でしょう」

あんなこと⇨ゲーセンで遊んだ。

こんなこと⇨宿題を教えた。

代名詞って、ほんと便利。

「き、きききキ又カワサン！ 一体何をしているのでございありませんるか……！？」

未知の現象を前にして、日本語がおかしくなってる上条さん。御坂も、体中から電気が漏れている。面白いから、胸をこすりつけてやれ。

「わたしは、当麻くんのが、だーいすきだよ」

バカキャラ完全解放中の俺に、上条はライフゼロ寸前だ。

そして、御坂の堪忍袋の緒が切れた。

「アンタ達……！！ 公衆の面前でイチヤイチャしてんじゃないわよッ！！！！」

上条と俺に向かって、電撃をぶちまけてきた。

上条は幻想殺しで電撃を打ち消し、俺は喰らったダメージを不慮の事故で床に押し付けた。

よって、どっちもノーダメージでした、はい残念。

「ハアハア……。アンタ達って、ほんと何者よ」

御坂が愚痴るように呟く。

「何者って、ただの無能力者だよな」

「だよな」

俺と上条の夫婦漫才に、御坂は突っ込もうとしたが、そんな気力はもうなかったようだ。

会話もこれくらいにして、洋服店へ再三向かうことにした。

途中、女の子が、

「おにいちゃんとおねえちゃんってラブラブなの？」

こんなことを言って、上条がフリーズしてしまった。可愛いな。だ

が男だ。

女の子が向こうに行ってもオブジェクト状態の上条の、目の前で手を降っても、ツンツン頭を引っ張っても、全く反応しなかった。そんなにシヨックだったかね。

どうしたものかと思案していると、突然アナウンスが鳴りだした。

『お客様にご案内申し上げます。店内で電気系統の故障が発生したため、まことに勝手ながら、本日の営業を終了させていただきます』
思い出した。

今日はクラヒトン虚空爆破事件の日だ。
確か、ジャツジメント風紀委員を狙っていたんだよな。

「当麻くん！ 避難するよ」

「おう！」

デパートの外に出ると、人混みが出来ていた。人混みの中には、御坂と佐天がいる。しかし……。

「衣川、あの女の子は!？」

「外にいると思うんだけど……。美琴ちゃんに訊いてみましょう」
一刻を争う事態なので、すぐさま御坂に声をかける。

「美琴ちゃん!! あの女の子を見なかった!？」

「ええ！？ 一緒にいたんじゃないの」

「それが、途中ではぐれちまって……」

「何やってんのよー!!」

上条の返事を聞き終わらないうちに、御坂はデパートの中へ向かった。

俺と上条も後を追う。

手分けをして捜していると、腕章を腕に付けた初春と女の子を発見した。

女の子は、不細工なカエルモドキのぬいぐるみを抱えている。つて、爆弾じゃねえか!!

俺はわき目もふらず叫んだ。

「初春!! そいつは爆弾だ!!」

俺の声に仰天した初春は、即座にぬいぐるみ爆弾を放り投げる。しかし、ぬいぐるみは量子変速シンクロトロンにより、いびつに圧縮され爆発寸前だ。

「クッ!!」

御坂と上条も俺の叫び気づいたが、距離が遠くて間に合いそうにな
い。

ええい！！ 仕方ない。

「来い、黒鐵！」
クロガネ

俺の声に応じて、四メートル前後の黒いロボットが、召還される。

「行っけえええ！！！」

俺は黒鐵クロガネを操り、爆弾に向かって、重力波ともなった拳をぶち込
んだ。

凄絶な爆音が、響き渡る。

爆発により、床は削り焦げ、壁は壮大に吹き飛ばれる。

だが、初春と女の子は無事だった。

何が起きたのか分からない様子で、キョトンとしている。

「初春！！！」

俺は初春の元へ駆けつける。

「どこか怪我はないか！？」

「え……ええ、大丈夫です」

「良かったあ……」

胸をなで下ろすと、俺は突然の爆発に怯えている女の子を優しく抱きしめる。

「もう大丈夫だからね、心配しなくていいよ。ちゃんと、お姉ちゃんを守るからね……」

女の子は安心のあまり、俺の胸の中で泣き出してしまった。

……危なかった。

もしも、誰も間に合わなかったら、初春と女の子は最悪死んでいたかもしれない。

そうだったとしても、俺の能力（鋼やら大嘘憑きやら）で蘇生することはできるが、命をそんな風には考えられない。蘇生使う必要になるのなんて、元死人の自分だけで十分だし、どうせ生き返るからと、他者の命を粗末にする真似など言語道断だ。

一度死んで転生している身の俺だからこそ、命の尊さは身を持って知っている。

俺は怒りに震えていた。

介旅初矢……。

この落とし前はつけてもらっぞ。

人氣が全くない路地裏。

眼鏡をかけた学生、介旅初矢は恍惚の笑みが止まらなかった。

「もうすくだ……」

自然と言葉が漏れ出す。

負の感情から来る、優越感に満ちた言葉だ。

ついさつきセブンスミストで、彼曰く、無能な風紀委員ジャッジメントに能力を試したばかりだが、成果は目を見張るものだった。

結果、ビルの壁が吹き飛び、爆炎が燃え盛っていた。

しかも、予想以上の重力波を観測出来たのだ。

無敵のチカラを手に入れた気分だ。

「もう少し数をこなせば、みんなまとめて吹き飛ばせる……!!」

彼は喜びの絶頂にいた。

が、すぐさまそこから叩き落とされた。

突然、介旅の身体が吹き飛んだ。

理由は簡単。

後ろから忍び寄っていた、少女に蹴り飛ばされたからだ。

そのまま、壁と地面に衝突する。そこら辺のゴミ箱が倒れた。

「一体何が……」

介旅は訳がわからず、呆然とする。

「よお。爆弾魔」

顔を上げると、そこには少女が立っていた。

黒髪を肩で切りそろえていて、セーラー服を着ている。

「な、なんのことかな……。僕にはサッパリ……」

介旅は動揺しつつも、とぼけていた。

しかし、少女はわざとらしく顔に似合わぬ乱暴な口調で追い討ちをかける。

「死傷者ゼロどころか、けが人はだれもいなかったぜえ。いやはや、たいしたものだな、お前のクソ能力量子変速シンクロトロン（笑）は」

自分のチカラを侮辱され、介旅は思わず言い返す。

「そ、そんなバカな！？ 僕の最大出力だぞ……あつ」

「サイズハンゲかまかけ成功」

うっかりボロを出してしまった介旅は、取り繕うような言い訳をしだす。

カバンに手をやりながら。

「いやあ、外から見ても凄い爆発だったから……」

そのまま、カバンから取り出した、スプーンを少女に向かって投げ

出した。

「助からないじゃないんかってエ!!」

能力により圧縮されたスプーンが大爆発を起こす。

少女はそのまま爆発に飲み込まれた。

「……はは。ざ、ざまあみろッ!」

勝利の雄叫びが響く。

煙が晴れば、少女の死体があるはずだ。

介旅は満足気に目を凝らす。

そこには、張り付けたような笑みをしたまま、少女が立っていた。

見ると、破けたセーラー服や火傷がだんだんと消失していたではないか。

まるで、全てを無かったことにされたかの如く。

「なっ、何だ……!!?」

なめ回すような不気味な肌で感じた介旅は、他のスプーンを最大出力で爆発させる。だが、

「縛道の八十一・断空」

少女が謎の言葉を唱えると、少女の目の前に巨大な長方形の光の壁が現出し、爆発を防いだ。

続けて何回撃つても、壁にふさがれ続ける。

「グラビレイ!!!」

少女が叫ぶと、介旅の身体は重力により地面に押し付けられた。

介旅に抵抗するチカラはもう無かった。

「ハハ、いつも、こうだ。何をやってもチカラにねじ伏せられる…」

介旅は独りよがりな言葉をもらす。
続けて憎しみに満ちた戯れ言を放ち続ける。

「お前みたいなのが、いるから悪いんだ!! チカラのあるヤツなんて、みんなそうだろうがアア!!!!!!」

少女は介旅の胸ぐらを掴み、思いつきり殴った。

彼女の腕力は凄まじく、介旅の細い身体はボールのように転がる。

歯が一本抜け落ちた。

「な、何をする……」

「うるせえっ!!!」

引き裂くような怒号に、介旅の身体が強張る。
鬼神の怒りでも、もう少し温和なくらいだ。

「お前のせいで……。あの子が死ぬところだったんだぞ！」

しかし、少女の憤怒の根元には悲哀があった。

「結局、お前は自分のチカラで人を叩きつけてんじゃないか……」

介旅は、少女の言葉に自分の所業を思い返す。

己の憎む行為を己自身が行っていた、この矛盾。

「だったら……」

介旅は嚙み締めるような言葉を紡ぐ。

「だったら僕はどうすればよかったんだ。ただ、僕はチカラに屈し
たくなかったただけなんだ……」

文面だけなら、自分勝手な言葉だろう。

しかし、不思議とその言葉は彼の言葉の中で唯一共感し得る言葉だ
った。

「……じゃあ、俺が守るよ」

少女の発言に再び、介旅は驚愕する。

それは、思いつきでいえる言葉じゃない。

「もしも、チカラを振りかざして他人を食い潰すような奴がいたら、
俺が守るから、味方になるから」

介旅初矢の目から一筋の涙があふれた。

そんな、彼の頭を少女のか細い指で撫でる。

ふと、少女はなにかを思いつく。

「ケータイ貸して」

言われるがままに携帯を取り出すと、なにやらアドレスが送られてきた。

「これは……」

「これで、キミに困ったことがあったときは、わたしにメールをしてね」

先ほどとは打って変わった、少女らしい口調で明るく返答した。それは、敵に向ける感情ではなく、友人に向ける感情だった。

「そんじゃね〜」

そう言うと、少女はどこかへ行ってしまった。

「嵐のような子だったな……」

残された介旅は呟く。

「だけど、こんなに嬉しいのは久しぶりだ……」

携帯の画面には、少女の名前が表示されていた。

『衣川 晶』

第四話・虚空爆破事件……だと……！？（後書き）

ギャグで済ますはずが、シリアスになってしまった……。

次回からようやく、インデックスが出てくる予定です。

一つ言わせてもらおう。インデックスは聖母であると。

第五話・ようやく禁書目録がスタートしたぜ（前書き）

PV10000を超えました！やったね！

これも、皆様のおかげです。ありがとうございます！！

さあ、今回は予告通りインデックスさんが登場します。

第五話：ようやく禁書目録がスタートしたぜ

「夏休みだああああ!!」

七月二十日 早朝

俺は布団の中で、声高に夏休み宣言をしていた。

ほら、目が覚めたときに「あ、そっいや今日休みだな」と気付いたとき、何か勝ったような気分になるのが分からないかな。

別段、補修があるわけではないので、学校はない。

という事で今日は夕方まで眠ることにしよう。
今回の話はこれでお終いだ。

.....。
.....。わかったよ。

ちゃんと、ストーリーを進めますから。
帰らないで。ね、ね。

今日は、インデックスと上条が出会う、運命の日だ。そして、夕方

には我が寮の廊下で、炎の魔術師ステイル「マグヌスとの闘いがある。

もちろん、俺も参戦するつもりだ。

そのためには色々下準備をしないとイケない。

早速取りかかるうとしたが、ふと異変に気付いた。

部屋が馬鹿に蒸し暑い。

基本的俺は、節電？ 何それ、おいしいの？ と考えている人間なので、クーラーは全力でつけまくっている。

どうやら、停電でクーラーが止まってしまったようだ。

原因は、御坂が上条に向かって全力の落雷を出したからだろう。迷惑極まりない話である。

今度会ったら、腹パンでもしてやろうか。

「じゃあ、部屋を冷やしますかね」

ディーブ・フリーズ

氷碧眼で冷気を操り、部屋の中をキンキンに涼しくした。

これで避暑は万全。

さて……次は。

俺は玄関を出ると、寮の外廊下を見渡した。

この後、イノケンティウスに焼き尽くされるんだよね……。

懐から携帯を取り出し、とある番号に電話をかける。

すると、舌足らずな甘い

声が返ってきた。

『は〜い。みんなの神様ですよー』

「よお。仕事ミスってるか」

『その声は昴さんじゃないですか。てか、あれ以来まだ間違えて人を死なせたことはありませんよ!』

「まだだと!? オイ、ちょ……おま。ミスる予定でもあるのかよ!?」

二人目がこの世界に来るとか、マジでやめるよな。

まあいい。本題に移るとしようか。

「こつちに持ってきて欲しいモノがあるんだけど」

『何でしょうか。私のプロマイドでしょうか』

「ハガレンの『賢者の石』を百個よこせ」

『えええ!?!? 多すぎ、てか何に使うんですか!?!?!?』

「つべこべ言わずにさっさとよこせ。お前なら、国土錬成しなくても造れるだろ」

『まあ、出来ますけど。……チートのくせにうるさいやい。』

俺だってやりたいことがあるんだよ。

というか、神に対して上から目線の俺って何様よ。

『はいはい。玄関の前に置いておきましたよ』

指定の場所にはダンボールが置いてあり、中には赤い宝石みたいな

『賢者の石』があった。サンクス神様。

『じゃあ、もう切っていいですか』

「どうぞ」

『……引き留めてくださいよ』

面倒臭い神様だな、おい。まあ、仕事とかで忙しそうだし結構寂しいのかな。

「わかったわかった。暇なときは電話してやるし、この世界が終わったら、しばらく手伝ってやるからさ」

俺の台詞の後、数秒の沈黙が返ってきた。

『約束ですよ……』

「大丈夫だ。問題ない」

お決まりの台詞を言って、俺は電源を切る。

一応俺は約束を守る元男なので安心しろ。

用件は済んだので、俺は早速作業に取りかかる。

「さて、錬金錬金」

スタイルと闘う際に、どう立ち回るかは、その場のノリだが、一つ

懸念していることがある。

この前の虚空爆破事件クラフトンのときに、俺はついつい『黒鐵クロガネ』をぶっ放した。それで、その後被害状況をググってみたところ、デパートの天井や床が半壊して、修繕の最中らしい。

つまるところ、多分次は調子に乗って、寮を瓦礫の山に変えてしま
いそうなのだ。

だから、錬金術で寮を要塞化することにした。

俺はクレインゲームにコインを入れる間隔で、次々と賢者の石を消費する。

錬金術師が見たら血の涙を流すかもしれんな。

念には念を入れて、作戦名『いいぞお、その賢者の石で学生寮もろとも要塞にしまえー』を行っていると部屋から人が出てきた。その少女は、金色の刺繍が施された純白の修道服を着ているが、帽子をかぶっておらず、長い銀髪が露わになっている。ヒロイン・インデックスさんだ。

バタフライ効果を危惧していた俺だったが、ちゃんと上条に会ったようだな。

どれ、挨拶をしてやろう。

「やあ、禁書目録インデックスちゃん。いやこう言うべきかな、イギリス清教ネ必セ要サ悪リの協会所属の、一〇万三〇〇〇冊の魔導書を持つシスター『Index - Librorum - Prohibitorum』」

途端にインデックスが警戒態勢をとる。

いやあ、愉快愉快。

「……あなた、魔術師？」
インデックスは顔に似合わぬ声で俺に問う。
追われている身だから当然だ。

「違うよ。俺はチートなだけの人間だ。魔術でも科学でもない」

俺の返答を信用仕切れず、警戒を解かないインデックスに対して、
更に言う。

「脳内汚染される魔導書なんて要らないし、そもそも『お前らの言う魔術』は使えない。というか、君に手を出したら二つ以上の意味で俺の身が危ないぜ」

一応真実を告げた俺を、思案気に見つめていたが、インデックスの表情が緩んだ。

「うん。あなたからは魔術師っぽい感じがしないし、いい人そうだから信用できるかも」

良かった、ひとまず警戒を解いてくれたようだ。

「ところで、あなたの名前を教えてくださいかな」

「衣川晶だ」

「あきらだね。早速会ったばかりなんだけど、私教会に行かなきゃいけないんだ。だから、お別れなんだよ」

このとき、魔術を知っている俺に保護を頼むこともできただろうが、

インデックスは敢えてそうしない。やはり、自分の地獄に他人を巻き込むのはイヤなのだろう。

そんな彼女を前にして俺は思う。まさしく聖女ヒロインなのだ。

大丈夫。これから俺と上条が守るからな。

俺の心の中の決意に気づかず、インデックスは何処かへ行ってしまった。

なので、作戦名『いい（ry）』を続けることにしよう。

ところで閑話休題のだが、この前妹達シスターズを一人見かけた。ストーキングして実験を妨害しようかなと考えたが、止めにした。

一方通行を倒すのは、上条が行うべきだろうし、今現在学園都市上層部は俺をどう扱っているか解らアクセラレータないので、一方通行を倒しても、実験はストップしないかもしれない。

なので、上条が関わるまでこの案件をスルーすることにした。

聴きようによつては、妹達を見殺しシスターズにすると公言しているようだが、本来の世界で死ぬ運命の者を余りねじ曲げたくない。

スタンスとしては、物語に干渉はすれど大筋は変えない。

ただし、死ななくていい奴が死になつたら全力で守るし、その命を奪つたりはしない。

転生者として、一応のマナーのつもりだ。

と、まあ、ほぼ自己陶醉クラスのモノローグに浸っていると、携帯

が鳴りだした。
着信音はまどマギの『コネクト』だ。

「はい、もしもし」

『衣川さんですか？ 黒子ですの』

「何だ、ホワイト・アンド・ブラック白と黒を兼ねし者か」

『変な渾名で呼ばないでくださいな。問題が発生しましたの』

「変なとは失礼ね。神から送られし転生者であるわたしの……」

『ああ、もう！ 話の腰を折らないでください！ この前の事件の犯人である、介旅初矢が意識不明になりました……。詳しくは分からないのですが、警備員の取り調べ中に突然』

『初矢くんが！？』

そういやあ、忘れていた。俺のメル友（無理矢理）の介旅は、レベル幻想御手の弊害で意識不明になるんだったな。

ステイルをどうボコるか、考えていて忘れていたよ。

俺はアリバイブロック腑罪証明で、水穂機構病院に瞬間移動した。

しばらく待っていると黒子と御坂がやってきた。

なので、御坂に腹パンしといた。

御坂は腹を抑えて床にうずくまる。いやあ、気分がスカっとした。

「ぐへえ！？ な、何すんのよ」

「わたしのクーラー生活を妨げた仕返しよ。同じく熱帯夜で苦しんだ、学生達の恨みと思え」

「また、お姉様は無闇に停電を起こしましたのね。全く人様の迷惑を考えなさいな」

黒子が呆れたように呟いた。御坂に心酔しているとはいえ、そうと
ころでは厳しいんだよな。

「うっさいわね！！ だって、あの馬鹿が……」

「次はアバラを折ってやろうか」

「は、はい。ごめんなさい！」

俺の殺気に、御坂は小鹿のように震えだした。

まあ、本人に悪気は無いようなので許してやろう。

医者から詳細を訊くと、原作通り今まで関わった事件の、アゴ髭や眉毛も意識不明になっているらしい。

まあ、自業自得とはいえ、^レ愁傷様だ。

ふと、向こうから、白衣を着た女がやって来た。目の下にはクマが
できている。
女は名乗る。

「水穂機構病院院長から招聘を受けました　　木山春生です」

第五話・ようやく禁書目録がスタートしたぜ（後書き）

美琴ファンの皆さん、ごめんなさい。

みんなも、電気は大切にね（どの口が言う……）

第六話：教えて木山センセイ（前書き）

今回は超短いです。

ステイル戦も続けて書いていたのですが、ややこくなるので分割しました。

第六話：教えて木山センセイ

俺と御坂、黒子、そして木山先生はファミレスの一席を陣取っていた。

「先ほどの話の続きだが……」

木山先生は開口一番、

「何故、同程度の露出で水着はいいのに下着は駄目なのか……」

「いや、そっちではなく……」

御坂と黒子が、ほぼ同じタイミングでツッコミを入れた。息が合すぎて、逆に怖い。

「ぶつちやけ、薄着の方が涼しいツスよ。ほら、すきま風的な感じ
で。あ、サーロインステーキくださいーい」

「アンタは全力で黙れ」

御坂に恐ろしい顔でツッコまれちゃった。

いや、でも薄着ってよくない？ 着る方も見る方も癒され
しよう。 自重

おバカトークはこれくらいにしておいて、俺と黒子で幻想御手レベルアップについて木山先生に説明をする。

「君達は、それが昏睡した学生達に関係しているのではないか、と」
木山先生は、それらしい反応をするが、ぶっちゃけネタバレると製作者兼流布者は木山先生なんだよな。

動機が動機なので、別段不快ではない。むしろ、協力してしまいそうなくらいだ。

「能力を向上させるということは、脳に干渉していると思われまレベルアップすの。なので、幻想御手が見つかったら、専門家である木山先生にと」

「むしろ私から協力したいくらいだよ。大脳生理学者として興味がある。……ところで、さつきから気になっていたんだが、あの子達は知り合いかね？」

外を見ると、初春と佐天が外ガラスに張り付いていた。

「へえ、大脳生理学者の先生なんですかあ。まさかっ！ 白井さんの脳に異常が……！」

「違いますの」

早速、黒春全開な初春が話に交わる。佐天はプリンを注文して食べていた。俺もステーキを食い終わったところだ。

「ああ、それなら……」

佐天は懐からモノを取りだそうとしたが、

「黒子が言うには、レベルアップ幻想御手の所有者を保護するんだって」

タイミングの悪すぎる、御坂の言葉に、佐天は音楽プレイヤーを咄嗟に隠した。

別に大丈夫だとは思うけど、レベルアップ幻想御手を手に入れたなんて言えないしな。

「えー。別にレベルを上げること自体は悪いことじゃない？」

俺の言葉に白井が、

「不正とはいえ、噂に過ぎないレベルアップ幻想御手の使用は犯罪ではないのですが、あなたもご存知の通り使用者には副作用が出る可能性がありますの」

「まあ、脳に障害が起きて言語や歩行に障害ができるかもしれないし、下手すれば一生意識不明になるかもしれないしね。ていうか、レベル私無能力者だけど超能力なんて、そこまでして手に入れる価値ないし」

当てこすりかと思うくらいに、レベルアップ幻想御手を使いたくなくなるようなことを言う俺。

それもこれも、佐天のコンプレックスを緩和して、軽拳な行動に走らせないためだ。

現に佐天はさっきからうつむいたままである。

そのせいだろうか。佐天が飲み物を零して、木山先生のストリップショー！なんてことにはならなかった。くそ。痛恨のミスだ……。

「じゃあ、私はこれで。教鞭を執っていた頃を思い出して楽しかったよ」

そう言つて木山先生が帰ると、俺達も解散することにした。

佐天はいつの間にかどこかに消えて、御坂も佐天を探しにいらなくなつたのだが、完全にスルー！。

俺にはやるべきことが、あるからな。

第七話：魔女狩りの王VS チート人間であります（前書き）

暇なので本日二回目の投稿をしました。
タイトル通り、ステイルと闘います。

第七話：魔女狩りの王VS チート人間であります

木山先生と話したあと、のんびりと歩いて学生寮に帰宅すると、廊下には見覚えのある影があった。

一人は上条で、大柄で赤髪なもう一人は魔術師ステイル^{II}マグヌスだ。

ステイルの背後には、血まみれのインデックスが倒れていた。

いくらミスったとは言え、親友にそんなことすんじゃねえよ神裂さんよー。

どうせ陰で自虐モードに入っているのだろう。

「さて、楽しい楽しいショウタイムといきますかな」

階段を上っていると上条のとステイルの話し声が聞こえてきた。

「何だよ……。何をビビってたんだ。超能力を消せるなら魔術だった消せるに決まっているじゃねえか」

「なるほどね。不思議には思っていたんだ。どうして『歩く教会』が破壊されていたのか……」

どうやら、ステイルの炎剣を幻想殺^{イマジンプレイカー}して消したところらしい。タイミング的に都合だ。

そのまま俺は廊下に着いたが、まだ二人は気づかない。

「おっはー。当麻くん喧嘩してんの」

微塵も空気を読まずに、俺は声をかけた。

上条とステイルは驚いたように、こちらを振り向く。いやあ、照れるって。

「衣川　　っ！？　馬鹿野郎！　危ないからここから今すぐ離れろ
！！」

上条が鬼気迫る表情で常識的な反応をする。

それに対して、俺は相も変わらぬ明るい調子で、

「その人魔術師でしょ。見りゃあ分かるもん」

「「なっ！？」」

再び驚愕する上条とステイル。

そりゃあそりゃ。片や同級生、片やただの一般人がいきなり出てきて、関係者だったら誰でも驚くわ。

「……………衣川、お前、魔術師……………なのか？」

「正確には違うけど、まあそんな認識でいいよ」

そう言つと、インデックスの身体と俺の目の前に空間を作り。

「データウンロー」

トリック・ルームでインデックスをこちらに瞬間移動させた。

口が開いたままの二人を尻目に、インデックスを担ぎ上条にパスをする。

「当麻くん。インデックスを連れて、そこいらの公園にでも隠れていて」

「お前はどつするんだよ……」

「ソイツと闘うよ」

当然上条は、仲間を置いて自分だけ逃げるのが許せないらしく、反論する。

「そんなこと、できるかよ！ お前が闘うなら俺も……」

「今はインデックスを助ける方が先でしょう」

俺の言葉に上条は何も言い返せなかった。

そのまま俺は励ますような調子で、

「大丈夫、大丈夫。こいつは雑魚だからさ、五分で倒せるよ。ここは俺に任せて先に行け」

「死ぬなよ……」

「当たり前」

互いに約束をして、上条はインデックスを背負って階段を駆け降りた。

「クツ、逃がすと思うかい!！」

ステイルは上条を追おうと、階段へ向かう。

俺はステイルの目の前に手をやり、それを制した。

「何の真似だ……」

「こっから先は、通行止めよ」

某夢喰いの台詞をパクりながら、ステイルに拳を向ける。

ステイルは呆れたように、そして忌々しそうに呟く。

「どこの魔術師か知らないが、僕の邪魔をするなら容赦なんてしないよ」

「ハン！ ネセサリウス必要悪の教会の犬ごときが、この俺に勝てると思っているのか」

ハッキリ言って、ネセサリウス魔術師が必要悪の教会を雑魚と言うのは、軍隊相手に一人で挑むくらい馬鹿馬鹿しい暴挙らしい。

その証拠に、ステイルはスプーキーを見るような目で、嘲りに満ちた苦笑いを浮かべていた。

煙草の煙を口から吐き出すと、

「やれやれ。腕に相当自信があるらしいが、必要悪ほくたちの教会をなめない方がいい」

まるで俺が小者みたいな状況だが、こちらとしては闘いたくてウズウズしているのだ。

俺はステイルを挑発するようにわざとらしく、

「なんで同僚の命を狙うのか俺には理解できないね。あれか、イギリス清教にとつちや頭の魔導書さえ無事なら良いのかい？」

悪役度マックスな俺のセリフを受け、ステイルの顔が憤怒に染まる。そして吼える。

「君には、関係の無い話だっ!!」

ステイルは煙草を宙に投げ捨て、魔術を発動させた。ステイルの周囲が熱を帯びた紅蓮の炎に包まれる。そして、身体に纏われた炎が俺に向かって、突き殺すような勢いで飛んできた。

「ほれ」

それを『カガミムシ』で反射した。

「なっ！」

軌道を変えて自分に跳ね返ってきた炎を、手で風払い打ち消す。

ステイルは息を整えて、言つべき感想を漏らした。

「どうやら口だけではないらしいね。僕には、あの少年同様恐ろしい奴に見えるよ」

それに対し、俺は謙遜とは呼べない謙遜をした。

「まだ奥の手を隠しているよなステイル」マグヌス。出して見るよ、イノケンティウス魔女狩りの王を」

「やれやれ……。どうやら僕の手札は見透かしているようだね。じやあ、お望み通り……」

ルーンの魔術師が真価を発揮するときが来た。

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ

それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える

不幸なり

その名は炎、その役は剣

顕現せよ、我が身を喰らいて力と為せ」

マントの下から、さながら暴風雨のごとくルーンのカードが展開され、周囲に配置される。

そして!!

「イノケンティウス魔女狩りの王！」

かけ声に応じ、ルーンの中央から泥のように溶け出した細長い炎の巨人が召喚される。

俺は笑みを抑えきれない。多分、端から見れば邪悪極まりない顔を
していると思う。

「そうこなくちゃ、鬨りがいけないぜ」

俺は懐から刀を取り出し、身体中から炎を展開する。

これは、血液を高温の業火に変える悪魔の力だ。

自分の血液を使う、諸刃の剣な能力だが、再生能力を持つ俺には関
係ないし、酷使による『非在化』の心配もない。

「消えろ！」

イノケンティウスにを刀で斬りつけ、爆炎で吹き飛ばす。

膨大な魔力を持つ俺の攻撃に押し負け、イノケンティウスが消える。

しかし、

イノケンティウスは俺の背後で何事も無かったかのように、瞬間的
に再生された。

『イノケンティウス魔女狩りの王』の特性として、ルーンがある限り何度でも爆発と
再生を繰り返す。ルーンを取り除かない限り、イマジンプレイカー幻想殺してもかなわ
ない。

後、ドヤ顔でこっちを見ているスタイルが正直イラっとくる。

三増しで、ぼこることにした。

俺は刀を構え、イノケンティウスを見据える。

「心月流抜刀術 壺式 破岩 菊一文字！」

刀を振り抜くとともに、イノケンティウスを居合い斬りした。再びイノケンティウスが、真つ二つに割れる。

「はっ」

しかし、ステイルは何やっているんだと言わんばかりに嘲嗤う。

「何度やっても無駄さ。イノケンティウス 魔女狩りの王は不死身だ。さあ、そろそろ終わりにしようか」

ルーンの魔術師ステイルイノケンティウスは、魔女狩りの王に命ずる。

「 殺せ」

命令と共に、イノケンティウス 魔女狩りの王は再生し、俺を灰に焼き尽くす

ハズだった

「イノケンティウス……！？」

だが、イノケンティウスは復活することなく消えたままだった。

「イノケンティウス！？ イノケンティウス！！ おい、出てくるんだ……！！」

ステイルの叫びは虚しく、イノケンティウスは、もう復活しない。

ステイルは脂汗を浮かべ、掴みかからん勢いで、俺に問う。

「一体なにをした……！？まさか、君の術か……」

「万物には全て綻びがある。俺の『直死の魔眼』は、モノの死を視ることが出来るんだよ。だから」

俺は冷淡にステイルを見つめて言い放つ。

「生きているのなら、神さまだって殺してみせる」

廊下を駆け抜ける。

ステイルは炎剣を放つが、全て焼き斬った。

俺は目の前の、ステイルの顔に手を当てて呟く。

「^{アルト}制止」

途端にステイルの動きが止まった。

「な、身体が……！？」

「万象一切灰燼と為せ『流刃若火』」

解号に応じて刀身が燃えだし、天を焦がすほどの火が更に発生する。さすが総隊長の斬魂刀。

「さて、と」

俺はデモ―ニツシユな笑みを浮かべる。

同時に刀から焰の竜巻が発生し、一閃。そのまま刀を振り抜く。

「火産靈神！！」
かくつち

渦に吞まれたステイルの身体が業火に包まれる。天井まで伸びた火柱が焼き尽くす。

そして炎が収まった跡には、気絶したステイルが倒れていた。

ルーンの魔術師ステイル＝マグヌスの敗北が決定した瞬間である。

「一応、死なない程度にはやっておいたぜ」

オーバーキルすぎる気もしたが、命に関わりそうな傷だけ大嘘憑きオールフィクションしておいたので、大丈夫だろう。

服が燃えて、ほぼ全裸だが気にしない。しかし、あんだけ派手に燃やしたのに寮は全く壊れていない。

流石、賢者の石製要塞男子寮。

どうせ、神裂が回収するだろうからステイル（ほぼ全裸）は放置して、上条のところへ向かうことにした。

上条の携帯に連絡してみると、原作通り小萌先生の家にいるらしい。

お馴染みの腑罪証明^{アリバイブロック}で、小萌先生のアパートの前に移動した。

一室の扉を開けると、上条とインデックス、そしてウサちゃんパジヤマの小萌先生がいた。

乱入してきた俺に小萌先生が驚く。

「衣川ちゃん！？ 一体どうしたんですか」

「衣川っ！！ 大丈夫なのか！！！！」

二人一斉に大声を出すな、近所迷惑になる。

「大丈夫って言ったでしょ。それより、インデックスは？」

「ああ、今から小萌先生に協力して貰って傷を癒すことに……」

「その必要はないわ」

某魔法少女のように、上条を制すると、インデックスの周囲を盾で包み込んだ。

「一体なにを……」

「双天帰盾。私は拒絶する」

インデックスの傷が見る間に癒されていき、治療が終了する。

三人とも仰天で目を丸くした。

傷の治ったインデックスが言う。

「今の術式は、私の魔導書でもそれらしい記述がないんだよ。こんな滅茶苦茶な術式は初めてかも……」

当たり前だ。事象の拒絶なんて解るはずがないもん。

明日も幻想御手の調査する予定なので、そうそうに立ち去ろうとした。
レベルアップ

すると、上条が「待てよ」と呼び止めた。マズい、また尋問されるのか。

しかし、上条が言ったことは違うことで当たり前のことだった。

「ありがとな。お前が守ってくれなかったら、インデックスを助けられなかったかもしれない」

「……………うん」

なんか上条を直視できなくなった俺は、そっぽを向く。

「あらら」

苦笑いで頭をかく上条に、言いたいことだけ言って帰ることにした。

「また、助けるから。覚悟してよ……」

「覚悟するぜ」

わざと小声で呟いたが、上条に聞こえてしまったので、ついつい扉を乱暴に閉めて、すぐさま外に出て行く。

今日は無性に走って帰りたくなった。

第七話：魔女狩りの王VS チート人間であります（後書き）

果たして衣川ちゃんは誰ルートに行くのでしょうか。
周りの希望に添って決めようかと思えます。

- ・ 上条ルート
- ・ 一方通行ルート
- ・ 浜面ルート
- ・ インデックスルート
- ・ 美琴ルート
- ・ 黒子ルート

みたいな。

第八話：いいから幻想御手だ！（前書き）

文化祭やらで更新が遅れちゃいました。
今回は衣川ちゃんがトリックと闘います。

第八話：いいから幻想御手だ！

夏の日差しが肌を否応なしに照りつける、七月二十一日。

俺は風紀委員ジャツジメン一七七支部で、のんきに椅子に座ってくつろいでいた。

初春や黒子は幻想御手レベルアップの件で忙しいらしく、あたふたと支部内を駆け回っているが、俺はそんなこと気にせずにゲームをやっている。

「黒子ちゃん、お茶くんでー」

図々しく飲み物を要求する俺に、黒子はため息を吐く。

「あのですね。ここは風紀委員ジャツジメンの支部であって、喫茶店じゃありませんの。暇なら他へ行ってくださいな」

「え〜いいじゃん。昨日はゴタゴタがあって疲れていたんだよ」

口ではそう言いながらも、俺は内心ほくそ笑んでいた。昨日のステイル（裸）を思い出すと……ぷぷっ。

写メ撮っておけばよかったな。

「そういえば、昨日あなたの学生寮で火事がありましたよね。もしかして、そのことですか？」

「そうそうソレソレ。やっぱり外からみてもスゴかったかしら」

愛想良く笑う俺だったが、黒子はどうと。

「……外から？ まさか……」

訝しげに思案を始め、険しい表情で俺を睨んでいた。

俺はまたドジを踏んだらしい。

俺って、ほんとバカ。

「よし、用事を思い出したし帰るとする……」

「衣川さん」

ゲームの電源を切り逃走を決行したが、黒子の声に止められ失敗。また、このパターンかよ。

錆びた歯車のように首を回転させると、視界には悪鬼のような笑顔の黒子が写っていた。

そうして一言。

「少々お喋りいたしませんか？」

「ひゃ……はい」

俺には拒否権のきよの字もなかった。

今現在、俺はソファに座って黒子からザ・尋問を受けていた。

「単刀直入に言いますと、あなたは昨日のボヤ騒ぎに関与していませんわね」

「……ぴゅーぴゅー」

ごまかそうと、口笛を吹く。

「マジメに聞いてくださいな……」

が、黒子に半目で睨まれたので自重した。目が人を殺るレベルになっ
つていて怖いわ。

「で、何でわたしが疑われているわけ……?」

「怪しいすぎるからですの」

即答しおった。

そして失礼だ。

前々から思っていたが、御坂と黒子は俺に謎の不信感を抱いている
っぽいな。

車に釘パンチをぶち込んで吹っ飛ばしたり、落書きを魔法の聖水
オールフィクション
実は大嘘憑きで消したり、爆弾を鐵の重力波で止めたりしただけ
クロガネ
で、別段疑念をもたれるようなことをした覚えはないけどなあ。

「それと、もう一つ」

そう言うと、黒子はテーブルの上に数枚の写真を置いた。
写真には、見慣れた男子学生寮が写っている。

昨日の火事現場らしい。

「先程あなたは凄い火事だと言いましたよね」

黒子は一旦呼吸をおき、

「で・す・が」

写真の何点かを指でなぞり強調する。そこには別段変わったところ
はない。だが。

「どこも壊れておらず、あまつさえ燃え跡すら残っておりませんの
よ。不思議だとは思いませんか？」

どこか挑戦的に妖艶スマイルを俺に向ける黒子。

「あと、監視カメラも全て壊れていたそうでした、それについても
意見を、お伺いしたいですわね」

つまり黒子が言いたいのは お前がやったんだろ

黒子は俺の邪推に、ハッキリ肯定を示した。
下手に隠そうとしないところには、好感が持てるな。
構わず俺は続ける。

「別にいいわよ。自分の潔白ぐらい証明できるわ」

あ、要塞化の件は別な。

「ヒントは三つ」

俺は某探偵Qよろしく、三本指をたてる。
自分が犯人なのに探偵気取りの衣川さんだ。

「わたしは事件があった時間は外にいたわ。つまり、私は犯行不可
能!」

「さっき中にいるって言いましたよね」

「二つ目!」

「ちょっと……。スルーしないでくださいな」

「更に言えば、そのときは友達と電話をしていたわ!」

「電話をしながらやったという可能性は、あなたの頭に無いんです
の?」

黒子がうだうだウルサイが無視無視。

「そしてニイイイイイつつ目エエエえ!!!!!!」

力を込めて雄叫び、髪をクールに払う。あらカッコいい。

濡れ衣を払うべく、最後の推理を華麗に愉快に綺麗に豪快に盛大に偉大に宣言した（形容詞過多）。

「だって、犯人知っているんだもん」

そのとき、世界が凍結した。

「あの……衣川さん」

黒子がおずおずと口を開ける。

「今とんでもない爆弾発言をしましたよね……」
推理もクソも無かった。

ことあるごとに、御坂や黒子の追究を避けているが、正直いって面倒になったのだ。

だったら、ある程度のことを言っただけで黙らせようではないか。

「ちなみに放火犯ボコったのは、わたしよ」

「だったらどうして風紀委員ジャッジメントに通報しませんの!? 第一、一般人の暴力の行使は犯罪ですわ!!!」

黒子は声を荒げ、両手で激しく机を叩く。その振動が、空気を通して俺の肌伝わる。

おう怖い怖い。

「でもさー。通報しようが、わたしを逮捕しようが直ぐに無かったことにされちゃうんだよね」

「なっ！ それはどういう……」

黒子は予想外のことには絶句する。さっきの迫力は何処へいったのか、俺に対し押され気味だ。

「放火魔は外部からのVIPで、わたしはVIPの対応役ってこと。アンダスタン？」

対応役もなにも俺が勝手に決めただけだがな。

黒子はまだ納得がいかないようで、尋問の刃を納めないで、

「ノットアンダスタンですの。あなたの言っていることは支離滅裂ですし、たとえ本当のことだとしても、どうして一介の学生であるあなたが外部の人間と接触できますの……？」

「えー。学園都市って学生に、結構真っ黒なことをさせているんだぜ。いわゆる暗部ってやつね」

「……そんな」

ちよつと刺激が強すぎたかな。この文面だと俺が暗部に属しているみたいだし。

俺は席を立ち上がり、ドアの方へと向かう。

ある程度の闇をちらつかせておけば、俺の正体に首を突っ込む真似は控えてくれるだろう。

「じゃあね黒子ちゃん。わたし、ダイジなダイジな用事があるから帰るわね」

軽く言い放ち、俺はドアノブを捻った。

しかし、廊下に出た途端、空間移動した黒子に前を遮られた。

「だ・か・ら。まだお話は終わっていないと申しておりますわよ」

「やれやれ。思った以上にしつこいやつだ」

俺は呆れたように肩をすくめた。

適当なことを言っつて、追い払おうとしたのは失礼だったかな。

「あなたがおっしゃる黒を、暴いて正すのが風紀委員ジャッジメントの仕事ですの。そうそう簡単に諦めたりはしませんわ」

黒子の目は、獲物を狙う矢のように鋭く輝いている。ちょっとした闇では隠せそうにもない輝きだ。

「わかったわ。降参する」

俺はおずおずと両手をあげる。

多少ばかり方針を変えることにした。

「レベルアップ幻想御手の取引場所。教えてあげる」

人通りの少ない道端で、俺と黒子は仲良く？歩いていた。

「本当に取引現場を知っているんですの？」

若干の疑いを込め、黒子が問いかけた。
対して俺はにこりと微笑んでいる。

「飾利ちゃんリークの情報とも一致しているでしょ。信頼出来る筋の情報だから、信頼しなつて」

信頼もなにも、これから起こる予定のことだけど。

「わたくしとしては、その筋とやらを、大いに問い詰めたいところ
ですの」

何だかんだお喋りをしていると目的地に到達した。

そこで一人の少女が、不良に三人がかりで囲まれていた。

佐天涙子は壁際に追い詰められて震えている。

不良からバナナマン日村みたいな少年（盾なんたらさん）を庇った
のだろう。

「佐天さん!？」

佐天に気づいた黒子が駆けつける。俺も後に続いた。

不良のリーダーらしき歯抜けが、力の無い佐天を罵倒している。
マジでうぜえな。

なので空き缶を拾って、取り巻きの一人にメジャーリーガーもビツクリな速度で投げつけた。

「がはっ」

そのまま頭に直撃し不良が地面に倒れ込む。
頭から血が出ているが、軽い怪我だろう。

「んだ、てめえ！」

さっきのを不良Aとすると、不良Bが念動力で瓦礫を飛ばしてきた。
それを黒子は空間移動テレポルトで回避し、俺は響転ソニートでよけた。

そのまま不良Bの目の前に転移した黒子が、顔面にカバンを叩きつけ不良Bを撃破する。

「面白え能力だな」

リーダーの歯抜けが不敵に笑う。いかにもな極悪面だ。

「空間移動テレポルトに、よくわからんが肉体強化系の能力者か。初めて見たぜ」

「他人事のように仰いますけど、次はあなたの番ですよ」

余裕を崩さない黒子に歯抜けは忌々しそうに呟く。

「俺達はよお……。幻想御手レベルアップを手に入れる前は、お前ら風紀委員ジャッジメントにビクビクしていたんだ。だからデカい力が手に入ったら、お前らをギタンギタンに……」

「うるさい黙れ」

長いので歯抜けの顔面に向かってアッパーを放った。だが、

「消えたっ!?!」

黒子が声を上げる。アッパーは歯抜けに届くことはなく、歯抜けは煙のように姿を消した。

「一体どこに……」

「黒子ちゃん後ろ!?!」

歯抜けは黒子の後ろに回り込んで、今まさに黒子に飛びかかろうとしていた。

「ちいっ」

仕方がないので俺が盾になる形で黒子を庇う。歯抜けのキックを喰らい、俺の身体が吹っ飛ぶ。

「衣川さんっ!」

「いい感触だったぜ。あばらの二、三本も折れたかな」
折れてねえよ。

ジエツト機と衝突しても死なないことに定評のある衣川さんが、そんな歯抜けキックにやられるわけねえだろ。

俺は心配する黒子と佐天をよそに起きあがると、歯抜けの顔面をぶん殴った。

今度は外さずに。

「がはっ……。な、なんで」

突然の激痛に歯抜けは態度を一変させ狼狽する。

それに俺は飄々と答えた。

「どうも光を逸らして目くらましをしているようだけど。視覚がダメなら他の感覚に頼ればいいじゃない」

歯抜けの能力、トリックうんたらは視覚を誤魔化している。なので五感をリンクさせた、『共感覚』で歯抜けの正確な位置を特定したのだ。

いやあ実に便利だ。

ただ殴るだけじゃつまらないので、能力自体を封じることにした。

「食らえ！ 鼻毛真拳奥義……」

「一体何をする気ですの……？」

「スーパーフラッシュュー！！」

「いや、これただの電気スタンドを出しただけじゃないですか!？」
佐天が声高らかにつつこむが無視。
俺の放った光に歯抜けの能力が打ち消された。

「くっ」

「あなたも、そんな技をまともに受けなくてくださいな!？」

歯抜けにつつこみを入れつつ、黒子は空間移動テレポートで確保した。

黒子が歯抜けを問い詰めたところ、レベルアップ幻想御手は音楽ソフトであると判明した。

ふと、佐天がぺこりと頭を下げてきた。先程の礼らしい。

「あの、衣川さん。また助けに来てくれてありがとうございます」

「いいのいいの。パンツ一枚くれるだけで十分よ」

「自重してくださいよ!」

「ハッハッハッハ」

そう言いながら俺は佐天の頭を撫でた。

佐天の方が背高いけど。

何はともあれ、インデックス禁書目録レベルアップに幻想御手と面白くなってきたな。

第八話：いいから幻想御手だ！（後書き）

文章を読めば分かると思いますが、今シユタゲにはまっています。
夏だなー（あんま関係ない）。

主人公設定（前書き）

主人公設定です。

特にネタバレはありません。

主人公設定

名前

きぬかわ あきり

衣川晶

性別*女(元男)

年齢*15歳

身長*160

体重*46

スリーサイズ

B84 W58 H90

容姿

黒髪のショートヘア

虚空爆破事件以降は、赤いマフラーを首に巻いている。理由はカッ
コイいから。

性格

元男だが、普段は猫かぶっている。特に男の前では。
ただし、敵の前やキレたときは簡単に素に戻る。

基本的にドS。ワザと手加減をしながら、相手より一つ上の力で痛
ぶりたがるフリーザ様思考。

一度死んだせいか、人を殺すことは嫌う。
でも、半殺しや精神破壊はOKな人だから凄く微妙。

若干チキンなので、変なところで用意周到。けど、変なところでミスを犯す。
要はバカ。

アニメやドラマの影響を受けやすいため、セリフや地の文で顕著に表れる。

最近では、某狂気のマッドサイエンティストの影響で、厨二行動が目立つ。

あと、セクハラ発言も多い。

能力

あらゆる作品の技や能力、武器を自在に使うことができる。

あまりにも多すぎるので、能力自体は省略するが、マイナス過負荷やアスラ・マキ機巧魔神、リナ斬魂刀を使うことが（多分）多い。

身体能力は聖人並み。あくまでも『普通の聖人』クラスなので、実は神裂やアツクアより膂力は劣る。とはいえ超サイヤ人のような変身や、後述の再生能力があるため余り意味がない。

Fateの十二の試練コトトハナやいつ天の毒まじゆにより、命のストックを大量に持つ。

更に、ハガレンの賢者の石を体内に入れているので、ミンチになるのが、愉快的死体オブジェになるのが、人肉プラネタリウムになるのが、五臓六腑をシエイクオールイクシオンされようが、何度でも再生する。

例え死んでも、大嘘憑きで復活するから、神様でない限り衣川を殺すことはできない。

身の上

上条と同じ高校の同級生。女だが、男子学生寮で暮らしている。

一応は無能力者の肉体再生で、置き去りとされている。
レベル。オートリパース チャイルドエラー

上条やインデックスのような魔術関係者には、学園都市に潜入したフリーの魔術師を自称する。

ただし、（禁書世界での）魔力やAIM拡散力場がないので、一部の人にバレバレ。いざという時は、幻術や『鏡花水月』で誤魔化している。

御坂とも交友関係を持ち、しょっちゅう（衣川が）絡む。基本的にお姉さんキャラとして関係は良好だが、不可解な行動（ほぼ衣川のミス）が多いので、御坂や黒子に怪しまれている。

特に上条絡みで、御坂に敵視されることもしばしば。

アレイスターに目を付けられているものの、現在（幻想御手事件辺り）は保留ということにされている。。

衣川的には今は、原作ブレイクしない範囲での原作介入を心掛けている。ただし、『神の右席』『暗部』系統は知らんとのこと。

第九話：不良掃除とオリキャラ登場（前書き）

更新が遅くなりました……。

その割には余り本編に関わっていません。

第九話：不良掃除とオリキャラ登場

歯抜けから、レベルアップバー幻想御手について善意（？）の情報を受け取った、黒子とプラス（俺と佐天）は、ジャックジメント風紀委員の支部にいた。
今は初春が、レベルアップバーネット上から幻想御手のファイルを探している。

その間、俺・佐天・黒子はテケトーに談話をしていた。

「まさか、レベルアップバー幻想御手が音楽ファイルで、ネット上で普通に一回っていたとは……。正直、無駄な骨を折った気がしますの」

黒子は椅子にもたれながら、肩を落としていた。

「H A H A H A！ 情報が入っただけで一步前進だよ。まあ、欲を言えば、もうちょい早く誰かが見つけてくれて、あまつさえ教えられれば良かったんだけどね」

「そこまで都合のいい話があるなら、誰も苦労はしませんの」
無駄にテンションが高い俺に対して、黒子はジト目を向けていた。
対して、佐天は妙に気まずそうな感じで拳動不審だ。

佐天がレベルアップバー幻想御手を持っていることを隠しているのを、俺は知ってる。
ちよっと意地悪をしたら、すぐに反応しおった。
クククク。罪悪感が、温泉のように湧いてくるだろう、ええ。

ことが進むまでに、貴様の口から吐かせてやる。

「完了しましたー！」

下劣な思惑を張り巡らしていると、初春が作業を終えました宣言をした。

「フウーハツハツハツ！ よくやったぞ。流石、スーパーハカーだな」

俺は偉ぶった態度で、初春を讃える。黒子は汚物を見るような目で睨みやがった。おのれ、生意気なやつめ。

「スーパーハカーじゃなくて、スーパーハッカーと言ってくださいよ」

初春はどうでもいい点にツッコミを入れる。
あ、意味が分かるんですね。

さて、早速話を反らそう。

「あ、でも飾利ちゃんが、コレを使えば……」

「ハッ！ 白井さんに今までの仕返し、あんなことや……」

「思考がだだ漏れですよ」

にまにま笑いながら、黒子は初春の耳にイヤホンを差し込もうとする。

「わたくしに恨みを晴らしたいのでしたら、ぜひ」

「う、嘘です。うそですよー!!」

初春が必死で抵抗していると、携帯の着信音が鳴った。初春は助かったとばかりに、

「け、ケータイが鳴ってますよー」

まだお仕置きしたそうだった黒子だが、仕方なく携帯に耳を当てる。どうやら仕事のようだ。

レベルアップ 幻想御手を使った学生が、暴れているらしい。

「初春は木山先生に連絡を。衣川さんは、わたくしといっしょに」

「ほいほい」

初春と佐天を置いて、二人で現場へと向かった。

ちなみに俺は黒子をの手伝いということで、ジャッジメント 風紀委員の権限は黒子を通して使えるらしい。

渋々ながらも俺の実力を認めている、黒子としては俺を放置するよりは、近くに置いて監視をしていた方が良いと判断したのだろう。

つまりは、レベルアップ 幻想御手使用者を公的にボコれるということだ。

素敵な展開に、心音が乱れに乱れている。

どんだけ溜まってんだ、俺。

「ハハッ！ どうだ、パワーアップしたオレの能力は！」

現場にいたスキンヘッドの不良に、黒子は早速吹き飛ばされた。

胴体をアスファルトに打ちつけてしまい、黒子の表情が苦痛に歪む。

「くっ……」

忌々しげに不良を睨みつけ、鋭利な鉄針を取り出した。しかし、俺は黒子の眼前に手のひらを置いて、反撃を遮る。

「ここは衣川さんに任せなさいって」

「ちょっと！ ここは、わたくしの仕事……」

黒子の制止に耳を傾けず、不良の正面に立つ俺。

ちなみに俺の顔は、『あんた絶対悪いこと企んでるでしょ』的な感じで、気持ち悪いくらいに

「そいやっ」

「ひでぶー！」

かけ声とともに、不良の顎を勢いよく蹴りつけた。

足を思いっきり上げたので、俺のスカートがめくれていたが気にしない。

不良は吹き矢のように、軽々と宙を舞う。

「はい終了。じゃあ次行こっか」

地面と不良が衝突する音を背景に、俺は黒子を促した。

次の現場の公園に向かうと、三人くらいの少年が能力を乱発して暴れていた。

発火能力が二人と、念動力が一人だ。

能力のせいで周りが滅茶苦茶になっており、野次馬が遠巻きに集まっている。

ガキ三匹は気味の悪い高笑いを上げていて、まともな状態じゃない。どんだけ、調子に乗ってんだよ……。

俺は黒子から、シャッジメント風紀委員の腕章を奪い取り、腕に装着した。

「おい、その三匹のDQN」

人混みをかき分けて、バカどもに声をかける。

「ああん？ 今ボクらスゲえ、忙しいんですけどお」

「シャッジメント風紀委員が何のようかなー」

「ゲフェフェエ。こんなお嬢ちゃんにシャッジメント風紀委員なんて、務まんの

「かあ」

「勝手の腕章を取らないでくださいな!!」

うぜえ。超うぜえ。テラうぜえ。

馬鹿みたいに笑うDQNの一人の顔面に、右ストレートをぶちまかす。

「が……はっ……!!」

そのまま近くにあった木に、ノーバウンドで吹っ飛んだ。

「この野郎!!」

二人目が怒りながら、念動力でベンチを投げつける。

避けようと思えば避けれたのだが、敢えて避けてベンチにぶつかつた。

「ざまあみやがれ!!　これが幻想御手でパワーアップした俺の力だああああ!!!!」

勝利の雄叫びをあげているところ申し訳ないが、今受けたダメージエンカウンターを不慮の事故で少年に押し付けた。

「げふっ!?!」

少年の身体は突然ボロボロになり、頭から僅かに血が流れ出した。そのまま地に倒れ込む。

「おい!　いきなり……。な、なんだよコレ!!」

最後の一人が、半狂乱で叫んだ。先程のような狂喜ではなく、畏れに塗りつぶされた狂気だ。

そんな彼を隙ありと、足で蹴り飛ばした。

「紛い物ごときが、このチートを潰せるとでも思ったか」

俺は倒れた少年×3を木に縄で縛りつけた。

野次馬からは、驚嘆と賞賛の音が飛び交う。

あれ？ 意外と気分が良い。人から褒められるのも、悪くないかな、かな。

悦に入っている俺に向かって、黒子から怒鳴り声が飛んできた。

「勝手に人の腕章を取るんじゃないやありませんの！！」

「別にいいじゃん。アレが無いと、暴行罪になるし」

「前提からして補導ものですわよ……」

「キャンキャンうるさいなー。もう帰る！」

「あなたは子供ですよ！？」

見た目は女子高生、精神は小学生レベルだ。白井がグチグチ言うので、俺の小学生ハートが傷ついたじゃねえか。

「だっ！」と言いながら、俺は向こうに駆けていったが、

「お待ちくださいな」

「グエエエー!!」

白井に襟を掴まれて、俺は盛大に転んだ。顔に傷が付いたらどうするんだ!

「腕章をさり気なく持ち帰らないでくれませんか」

「バレたか!」

くそお!! どさくさに紛れて、腕章をパクろうとしたのに。そんなで風紀委員権限を使って、不良無双を始めようとしたのに!!

「魂胆が見え見えでしたわよ……。わたくしは取り締まりを続けますので、衣川さんは大人しく待機してくださいな。くれぐれも、腕章も無しの暴行罪は働かないで欲しいですわ」

黒子は「それでは、ご機嫌よう」と言っテレポって空間移動しやがった……。

あらかじめ釘を刺しておけば、監視せずとも俺が不用意な行動に走らないだろうと踏んだのだろう。逮捕されても、すぐ出られるって脅したのになあ。

「まあ、こつそり腕章を複製したんだけどな」

俺は片手にある風紀委員の腕章を弄ぶ。

「ククク、手ぬるいぞ白と黒を兼ねし者（ホワイト・アンド・ブラック）よ……。公的に暴力をふるわせて貰うぞ。風紀委員の権限を使っジャッジメントてなあ!!」

気味の悪い高笑いをあげながら、俺は腕章を腕に装着した。

何とか黒子から離れられたところで、俺は事件現場に向かった。いかにも不良がホイホイたむろしそうな、怪しさ満点の路地裏だ。散乱したゴミや落書きが、整備の至らなさを物語っている。

「どんなところでも汚れはあるってか。悲しいことだねー」

俺が心底どうでもいい感慨に耽っていると、不良どもが集まってきた。

二十人くらいで俺を包囲している。黒子から離れた途端、偉く増えたな。

まあ、雑魚は雑魚だが。

先手必勝とばかりに、不良が三人能力を放ってきた。全員、炎を操っている。

「ステイルの炎剣の方が、遥かに強いかな」

錬金術で、足下のアスファルトを錬成し、壁を造る。俺の周囲を壁が取り囲み、炎をガードする。

すると残りの不良どもが一斉に俺に向かって能力を放ち、一部身体

強化系らしき連中は俺に飛びかかった。

「あー鬱陶しいわ……」

適当に『絶界』を張った。

一応威力を弱めていたので、俺に近づいたバカ数名は壁に体を打ち付けたぐらいで済んだ。接近要員はくたばったが、遠距離勢はまだ諦めた様子ではない。

「格の違いつてのを見せてやるよ三流」

俺は喉を適当に鳴らすと、軽く呟いた。

「跪け」

「ぐおっ……!?!」

『言葉の重み』が発動され、不良共が全員土下座の体勢で地面に螺子伏せられた。ちよろいちよろい。

俺が悦に入っていると突然、

「へえ、面白い能力ね、ジャッジメント風紀委員さん」

聞き慣れない声が聞こえた。見ると一人の少女が立っている。小柄な体格で、髪は金髪のショートだ。原作に、こんなキャラはいなかったはず。

「自己紹介しよっか。わたしの名前は……」

「あ。モブの名前は別に聞きたくないですから」

「なっ！？ ひ、人をモブ扱いするなあ！！」

イヤイヤ。別に俺はオリキャラと変な因縁を持つ趣味ないし。名乗られたら、再登場フラグ立っちゃうじゃん。

モブはモブらしく、『不良A』とか『不良のリーダー』みたいに表記されていればいいんだ。

「と、とにかく！ わたしの子分をボコった代価を、払ってもらうんだからね！！ この兎黒未鉈とくろみなたのスーパー必殺奥義を喰らいなさい」

「名乗んなつたろ。てか、絡んできたのはお前の部下だからさ……」

もしかして風紀委員ジャッジメントの腕章のせいで絡まれたのかな。どうでもいいけど。

兎黒とやらが、なんか両手を上げて「ハアアア」とか念じ始めた。何かする前に、巨大な螺子を数本取り出して兎黒を壁に磔にした。

「な、何よこれえ！？」

「兎黒さあーん！！！！」

地面に跪いている部下の一人が叫んだので、そいつの頭を足で踏みつけた。

兎黒は必死で、巨大螺子を外そうともがいている。

「あ、無理に剥がそうとすれば服破けるからね」

「この変態女あああ！！」

「じゃあね」

片手をひらひら降りながら、俺は次の現場へ向かうことにした。

「覚えてろー！！」とか、三下丸出しな泣き言を叫んでいたが無視無視。

生憎モブの名前を記憶する脳細胞はない。いい思い出程度に思っておこう。

しかし俺は近いうちに、意外な形で再び兎黒未鉈の名前を聞くことになる。

とかなりませんように。

第九話：不良掃除とオリキャラ登場（後書き）

オリキャラが登場しました。彼女は多分再登場する予定です。
そして相変わらずの衣川さん。

第十話：取りあえず犯人が判明しました（前書き）

今回は短いですね。

原作介入って難しい……。

第十話：取りあえず犯人が判明しました

とぐ何トカさんを磔にした後、オリキャラ二号と出くわしそうな気がしたので不良無双を中止した。

そして今は、とある病院を訪れていた。

病院には幻想御手レベルアップで昏睡した人達が眠っており、俺のメル友（一方的）である介旅も入院している。俺が病院を訪れた目的は、介旅のお見舞いだ。

虚空爆破事件クラヒートンの時に、『俺が守るから』とか黒歴史確定なことを言った手前があるので、一度も見舞いに来ないのもどうかと思ひ来たのだ。

実はもう一つ目的がある。それは。

「どうにかして、木山の正体を気づかせないとなあ……」

佐天が幻想御手レベルアップを使用しなかったため、御坂達に木山が犯人であることを突き止められるように誘導する必要が出てきたのだ。下手に答えを言ってしまうば怪しまれるだろうし、俺が単体で木山をボコボコにしても意味がない。

ていうか下手すれば、統括理事会が何かしてくるかもしれない。今のところは、ある程度の行動に目を瞑ってもらえているが、不用意な行動は慎まない。

『ドラゴン』が来たら余裕で死ぬるし。勝つビジョンが思い浮かばない。
エイワス怖い子……。

……そういえば、いつぞやかノリで『ドラゴン』って呟いたことがあるかも。

いざという時は銀河の果てまで逃亡しよう、うん。比喻ではなく本気で。

こんな感じで、目に見えない恐怖に怯えていると、廊下から声が飛んできた。

「ちよつといいかい？」

「いえっ!?! あれはドラクエの話をしていただけですわけでありましてので、別段お秘密をおりークしたわけでは……」

「うん？ ちよつと見せたい物があるだけだが、どうしたんだい。顔が真っ青だよ」

カエル顔の医者が怪訝な顔で俺を見ていた。

何だ、^{ハンキヤンセラ}冥土返しかよ。統括理事会かと思っただぜ……。

ついでにと言って、俺は御坂達を呼んだ。最初は原作通り、御坂と黒子だけにしようかと思っただが、仲間外れにしているような気分に

なったので、佐天も呼んでいる。

ラッキーなことに、初春は樹系図ツリーダイアグラムの設計者が見たいからと木山先生の所へ行っているそうだ。

何とか必要なフラグは用意できたな。

後は俺がどう介入するかだ。

「これは幻想御手被害者の能波パターンだ」
レベルアップバー

カエル医者カエルは、パソコンの画面に幾つかの波形を表示させる。それを見て俺は質問した。

「うんにゃ？ 所々同じ部分がありますけど、何か意味があるんですか」

「そうだね。能波は個人個人で違うから、同じ波形なんて有り得ないんだよ」

「どういうことですか？」

「おそらく、特定の能波に無理やり合わせられているんだろっね」

「つまり、強引に能波を弄くられたから人体に影響が出たということですか。そしてベースとなった能波を持つ人物が、幻想御手レベルアップバーを作ったと……」

俺がそう言うと、カエル医者は別のウィンドウを表示した。

様々な人物の名前が乗っている。

「察しがいいね。君の言うとおり、能波パターンのベースとなった人物を検索した結果……」

パソコンの画面上に、とある人物の名前と写真が出てきた。それは。

「「「木山先生!?!?!」」」

俺と冥土返しを除く三人が驚愕する。
ヘブンキヤンセラ

「そっいえば初春って、木山先生のところに行ってるんじゃない……」

「「初春さんが危ない!?!?!」」

黒子が初春の携帯に連絡したが、繋がらなかった。
一同の間で緊張と焦燥が走る。

「黒子ちゃんは警備員アンチスキルに木山先生の身柄確保を要請して。飾利ちゃんアンチスキルの保護も忘れずにね」

「わかりましたわ!」

「二人は一旦風紀委員ジャッジメントの支部に戻ってて!」

テキパキと指示を出した後、患者の様子を確認したいと言って御坂と佐天と別れた。

その後、周囲に人がいないことを確認してから、アリバイブロック腑罪証明で木山先生の研究室へワープした。

目的は幻想御手のデータを手に入れるためだ。理由は何か面白そうだったから。ヘルファッバー

いつか役に立つかもしれないし。

木山先生のパソコンは、決められたら動作で起動しないとデータが消える仕組みになっている。しかし、アンサーターカーを持っている俺は、わけなくパソコンを起動させられた。

手持ちのメモカにデータを転送し終えたところで、アンチスキル警備員の足音が廊下から聞こえてきた。ジャツシメント

俺は電源を消し、ジャツシメント風紀委員の支部へ再びワープする。

支部には黒子、佐天、固法の三人がいた。

御坂の姿が見えないので、既に木山先生のもとへ向かったらしい。

「美琴ちゃんは？」

「木山と警備員が交戦している現場へ駆けつけましたわ。わたくし達は、ここで待機……って衣川さん!？」

俺は黒子の制止を無視して、猛ダッシュで外へ出た。

屋外へ出ると、デュラララの首無しライダーが乗っている、影でできた黒バイクを呼び出す。

頭に真っ黒なヘルメットを装着すると、黒バイクにまたがり発車した。

ヘルメットの下に隠された俺の可愛らしい顔は、凶暴かつ好戦的な
笑みで彩られていることだろう。

さあ、木山春生。

楽しい楽しいシヨウタイムといこつじゃないか。

第十話：取りあえず犯人が判明しました（後書き）

次回は木山先生と衣川さんが激闘を繰り広げます。

というか晶ちゃん、チートのくせにアレイスターにビビりすぎなよ
うな……。

友達に言われて気づきましたが、衣川晶はめだかボックスの安心院
さんの一京のスキルを全部持っていることになるんですねww

第十一話：木山戦が開始しましたぞ（前書き）

今回はバトルをします。いやあ戦闘描写って相変わらず難しいですよね。あと全身筋肉痛で痛い……。

第十一話：木山戦が開始しましたぞ

黒バイクを超高速で走らせたので、わずか数分で現場にたどり着けた。

いやあー。バイクに乗るのもイイモンだね。

無免許だけどな（笑）

見上げると、橋からは煙が炎々と立ちこめている。

恐らくは木山先生が警備員アンチスキルと交戦していたのだろう。

今は、木山先生と御坂が相対中だ。

じゃ、早速原作介入しますかね。

ハンドルを握りしめ、橋の上までバイクで大跳躍した。物理的には有り得ぬレベルで宙を浮いている。

数十メートルは標高差がありましたね、はい。

そのまま木山先生と御坂の間を裂くように、黒バイクごと着地した。

「衣川！？ アンタツ……………」

「君はこの前の……………」

突然乱入してきた俺に、木山先生と御坂が驚嘆する。あるえ？ なんかデジャヴが……………。

「ちわー。衣川屋ですー」

「ちわー、じゃないわよ!!! アンタねえ、状況が分かってんの」
ちよつと空気読まなかっただけなのに、うつせーな。骨粗しょう症
だろ、お前（要はカルシウムが足りてないと言いたいのだ）

さすがに口にしたら超電磁砲地獄の憂き目に会いそうなので自重し
よう。

「お久しぶりですね、木山先生」

「ああ……。喫茶店るとき以来だな」

「む、無視すんなーッ!!」

後ろの茶髪がビリビリウルサイが全力でシカトだ。俺は不敵にニヤ
つきながら、木山先生と『会話』する。

「凄いですね。この人数と武器を意にも介さず始末できるなんて。
さすが、多重能力者さん」

「お褒めに与り光栄だよ、とでも言えば良いのかね。厳密には多彩
能力者と呼ぶべきだがな」

木山先生は、愉しげに笑う俺の顔を、まるで覗くかのように見つめ
る。つばを飲み込むような緊張がほとばしる。

「成る程。君は、警備員やその超能力者とは何か違う。ただ、私
を捕まえに来ただけではないらしい」

「察しがいいですね。わたしとしては、理由によっちゃあ木山先生を見逃しても良いのですけどね」

「私としても、そう済ませたいのだが……」

木山先生は俺の背後を眺めて、肩を落とし呟く。

「その子が許さないようだ」

見ると、御坂が身体中に紫電を走らせて木山先生を睨みつけていた。それは幻想御手レベルアップによる事件を起こし、能力者の幻想ゆめを利用した木山春生に対する怒りだ。

ククク、俺は自業自得だと思いがな。

ただし介旅（メル友だから）と眉毛（中の人が好きだから）には同情するね。

「……当たり前でしょ」

御坂は感情を隠さずに言い放つ。

「散々、人の気持ちを弄んだ……。アンタを見過ごせるわけないでしょうがっ!!」

「……だそうだ」

高ぶる御坂とは対照的に、木山先生は陰鬱とした調子で俺に語りかける。

うん。御坂が浮いてますね。

「まあ美琴ちゃんの正義の血がお盛んなようなので、年上のわたしが手伝うしかないっしょ。ちゅーわけで参戦してよろし?」

「……色々気に食わないけど、アンタが戦力になることだけは認める」

「はいはい、ツンデレールガン乙」

「誰がツンデレよ!」

「上条当麻は御坂美琴のことが好き」

「え、ふえっ!?!」

「『ウ・ソ』」

ハツとなって顔を赤らめる御坂を、下品な笑みで見つめる俺。いやはや、コレだからツンデレは。

「うっ……、ニヤニヤすんなっ!!」

電撃を俺に向けて飛ばしてきたので、後ろにステップして回避する。それを見て御坂は忌々しげに舌打ちをした。

お嬢様らしさが欠片もないわー。

「と、とにかく! マルチスキル 多彩能力者だか何だか知らないけど、こっちがやることには変わらないんだから!」

言いながら御坂は木山先生に向けて電撃を放つ。

しかし、何だかバリアだかドリームオーラの的なものを出して木山先生は電撃をガードした。それを見て俺は感想を漏らした。

「へー。一度に複数の能力を使用して、避雷針を創ったんですね」俺を賞賛するかのように、木山先生は薄く笑う。

「その通り。私は謂わば巨大な脳を操っているようなものだ。だから、こんな芸当もできるのだよ」

その瞬間、木山先生は衝撃波を片手で放ちつつ、巨大な氷の塊をいくつか掃射した。

御坂は後ろに向かって走ること、それを回避する。俺の場合は空中にジャンプして避けた。

「……………アンタどういう身体してんのよ」

御坂が呆然としたように呟く。

え？ どうしてかって。それはね、俺が30メートルくらいジャンプしたからだよ。

ちなみに御坂の呟きが聞こえている時点で、俺の聴覚がヤバい領域に達していることもお忘れなく。

俺は橋の上に華麗に着地すると、そのまま木山先生に向かって駆け出す。

「くっ……………」

何らかの能力を使い足場を歪めるが、俺はいちいち華麗によけている。

「ちえりおー!!」

俺は木山先生の顔面に目掛けて渾身の右ストレートを放つ。当たると判断したのか、木山先生は空間移動テレポートで俺から距離をとった位置へ移動した。

御坂はすかさず、ワープしてきた木山先生へ再び電撃を食らわせようとした。だが、その前に木山先生の足元から衝撃波が発生し、橋が破壊された。

そのまま下の河川敷へ全員落下していく。

まあ、木山先生と俺は普通に着地したけどな。御坂は地場を発生させて、辛うじて残っていた柱に張り付いた。

「…………拍子抜けだな」

至極残念そうに木山先生は感慨を漏らす。

「超能力者レベル5とはこの程度のものなのか。私としては、衣川とかいう少女の方が楽しめそうだ」

いやいや。そんなに誉められると照れちゃいますって。

反面、御坂はあからさまに不機嫌そうな様子で木山先生を睨み付ける。

「電撃を攻略したくらいで勝ったと思うな!」

吼えながら、コンクリートをブロック状に切りとり木山先生にブン

投げる御坂。それを木山先生はビームソードで粉碎した。

「ありゃ？」

御坂は思わず間の抜けた声を出してしまふ。

対応する間もなく、御坂の足下が円柱状にえぐり取られた。

「しまっ……!?!？」

「あらよつと」

あまりにも御坂が可哀想なので、墜落する彼女をお姫様抱っこでキヤッチしてやった。

「あ、ありがと……」

抱きかかえられた御坂が照れた表情で呟く。

……何この可愛い子。

こんぐらい素直になれば、さすがの上条も落ちるんじゃない。

と、そんな感じで空気を読まない思考をしていると、木山先生が語りかけてきた。

「私の目的は、ある事柄について調べることだけだ。誰も犠牲にはしない。全てが終わったら全員解放する」

それは譲歩というよりは宣言と言ったところだな。確かに、木山先生は今も苦しんでいる子ども達を救いた^{レベルアップ}いただけだ。幻想御手を使用

した被害者連中も相応の罰を受けただけに過ぎない。ともすれば、木山先生が『悪』だと言えるだろうか。あくまでも真実を知っている俺はそう思わないね。

だが。

「ふざけんじやないわよっ！！！！！」

木山先生の言葉に御坂は怒る。良く言えば純粹な、悪く言えば子供じみた怒りだ。

「あれだけの人を巻き込んでおいて犠牲を出さないですって……。こんな口くでもないことをしてまで研究したいコトなんて、認められるわけないでしょ！！！」

「やれやれ」

そんな御坂を見て、木山先生は心底呆れたように言う。

「超能力者^{レベル}とはいえ、所詮は世間知らずのお嬢様か……」

「確かに。美琴ちゃんほど空気の読めない人間なんて知らないし」

「アンタ等だけには言われたくないわ！　そして衣川っ、アンタはどっちの味方よ！！！」

相変わらずのKYぶりを発揮する俺だが、木山先生のスルースキルは相当なようど話を続行する。

「君達が受けている能力開発。あれが人道的なものだと思っている

のか」

まあ、脳みそに電極を差したり薬物を使っている時点でロクなもんではないだろうよ。禁書はアニメから入ったんだけど、原作で超能力開発の説明を読んだときは若干ひいたよ……。

禁書ってホント黒いよね……。

「学生の脳を弄くり、日々『開発』する。それがどんなに危険なことか解っているだろう……」

「……まあね。学園都市がトンデモナイ街なのは最初から気づいていたしね」

俺は訳知り顔で軽く呟いた。御坂は怪訝な顔をしたが、構わず臨戦態勢を続行する。

そんな御坂の姿を見て木山先生は、

「残念だ」

近くにあったゴミ箱をテレキネシス念動力で操作し、中に入っていた空き缶が空中にバラまかれる。

介旅初矢のグラビトン虚空爆破だ。

この数で大爆発などを起こされたら、ひとたまりもないだろう。俺には効かないけどね。

「全部ぶっ飛ばす！」

御坂は身体中から電撃を放ち、空き缶を破壊していく。

「落ちろおー!!」

懐にしまっておいた何十本ものナイフを空き缶に投げつけていく俺。御坂は呆れを通り越して何も言わなかった。

「……凄いな。だが」

木山先生は御坂に感づかれないように、手元の空き缶をワープさせる。

それに気づかない御坂はしたり顔で、

「ざっとこんなモンよ! もうお終いな……」

そう言い終わらないうちに、御坂の背後に移動した空き缶が大爆発を起こした。周囲の地面が比喻でなく根こそぎ吹き飛ぶ。

「うわー。アブナイ」

棒読みで台詞を言いながら、俺は爆発地点から横っ飛びで離れた。残ったのは地面に倒れ尽くす御坂だけだ。

「もっと手こずるかと思ったが……。恨んでもらって構わんよ」

用は済んだとばかりに、御坂から興味をそらす。そして、木山先生は俺の方を向いてきた。

「さて、衣川といったか。君はどうするんだ。邪魔者はいなくなつたし、君なら少しは物分かりが良いだろう」

「火火ツ。随分と過大評価してくれますね。わたしは善悪でなく快

か不快、ルールではなく感情論で判断しますからね。事情が事情なら、さつきも言ったように見逃してやりますよ。ただし」

少し間を置いて、

「その子が許さないようだ」

先ほどの木山先生と同じ台詞を言った。

木山先生が言葉の意味を理解する前に、御坂に身体を掴まれる。

さつきの爆発の瞬間、御坂は即席の盾を創ったのだ。

なので俺は爆発から御坂を助けなかった。

まあ、木山先生をボコるのは呼吸をするくらい簡単なのだが、御坂が密着状態で電撃を放たないといけない。でなければ、御坂が木山先生の過去を知ることもなく、AIMバースト幻想猛獣が発生しない。

156

「あのバカや衣川には効かなかったけど。さすがにあんなにトンデモ能力は持っていないわよねっ!!」

「くっ……」

周囲のアスファルトを操作して虚しい最後の抵抗をするが、御坂は止まらない。

「遅い!!」

「ガアアアアア!!」

御坂の電撃を食らい、木山先生は叫び声をあげる。

次は幻想猛兽AIMバーストだな。

全てが予定調和に進んでいく……。

第十一話：木山戦が開始しましたぞ（後書き）

どうでもいいけど小学生って最高ですよね。

夏はロウきゅーぶ、楽しいです。

冬はシーキューブ、楽しみです。

第十二話：幻想猛獣とか恐いわ（前書き）

相変わらず不安定な更新ですね（苦笑）

今回はA I Mバーストの前半戦ですね。

思ったより長くなったああああああ！！

第十二話：幻想猛獣とか恐いわ

ゼロ距離からの電撃を浴びた木山先生の身体が、ドミノのように倒れていく。

それを御坂が何とか両手で支えた。

「一応、手加減はしておいたか……えっ!？」

唐突に御坂は驚愕を見せた。どうやら、木山先生の過去を電気信号を介して覗いているようだ。行橋の受信感応みたいなモンだろう。

ついなので、その『狭き門』リミテッドアクセスによる受信感応で俺も覗いてみることにした。

……。
……。
……。
……。

うん。

伴里ちゃん、マジでどこのぞの軽音部のりっちゃんだったね。

あと木原幻生もげろ。

やっぱ木原一族って遺伝子レベルでいかれてるって。あんなキヤわいいシヨタやロリをこんな目に逢わせるなんて。

もし、あの老害と出逢うことがあったなら、スカーレット致死武器や万華鏡写輪

眼で精神ズタボロにした拳げ句、有らん限りの手段で拷問し尽くしてやる。ああ、そうしよう。小学生を虐めた罪は重いのだ。

俺がサデイス度満点な構想を練っていると木山先生が意識を取り戻したようだ。

木山先生は茫然とする御坂を振り払いながら呻く。

「……………くっ。見られたか」

「どうしてあんなことが……………」

あまりにも衝撃的な惨事を見た御坂の声は震えていた。まあ、学園都市の闇を目の当たりにすれば当然か。俺は小学生つていいよなつて考えていたけど。

「あれはA I M拡散力場の制御実験とされていた……………。が、実際には『暴走能力の法則解析用誘爆実験』だった」

真実としては、それすらフェイクなだけだな。それを言ったら、色んな人に睨まれそうなので言わぬが花だ。第一、記憶を弄くんの面倒だし。

「意図的に暴走を仕組んで、A I M拡散力場の暴走条件を知るのが本当の目的だったのさ。もっとも気づいたのは後になってからだがね……………」

「……………人体実験」

超能力者^{レベル5}でありながら、そのような『闇』を知らなかった御坂。別

に悪いとは言わん。

学園都市としても、第三位の超電磁砲レールガンは内外に対する広告塔的なものとして利用していたいのだろう。

木山の悲痛にも似た独白が続く。

「あの子どもたちは今も眠り続けている。私達はあの子どもたちを使い捨てる実験動物にしたんだ!!」
モルモット

「でも、そんなことがあつたなら警備員アンチスキルに連絡して……!!」

「学園都市がグルなら意味がないんじゃないの」

「……衣川!？」

いい加減空気になりそうなので、俺も話に交ざることにした。

「木山先生は何度も足掻いたけれど、学園都市という巨大な力に叩き潰された……。違いますか?」

突然の俺の介入に、木山先生は目を見開きつつも言葉を紡ぐ。

「ああ……。子どもたちを救う方法と事件の真相を解明するために、ツリーダイアグラムツリーダイアグラムの設計者の使用を二十三回も申請した。だが全て却下された!!」

「え……?」

え? じゃねえよ御坂。

正義と悪なんて巨大な力によっていくらでも螺子曲げられてしまう。

中二のときにそんなことを考えていました（笑）。

俺は区切りを付けにかかろうと、核心をつく。

「つまり木山先生は子ども達を救うために、レベルアップ幻想御手によるネットワークを構築し、それをツリーダイアグラム樹系図の設計者の代替品にしようとした、かな」

「……なっ!?!」

御坂は本日何回目だか解らない、びっくりリアクションをする。それでも木山先生のこと認められない御坂は反論を続ける。

「……だからって、こんなやり方!」

「君に何が分かるっ!?!?!?!?!?!」

だが、木山先生の怒声がそれを遮った。

「あの子たちを救うためなら何だってする……。この街を敵に回しても、止めるわけにはいかないんだ!?!?!?!」

この世の全てを焼き殺すかのような絶叫が響き渡った。それは木山春生が背負った、限りなく絶望に近い運命の重さなのだろう。

だが。

それは一つの発火元となった。

「……ぐうっっ!?!」

突如、木山は何かに苦しみだした。頭痛を抑えるかのように、頭を抱えてもがいている。

「ちよつと……!?!?」

「木山先生!?!」

御坂と俺の声も耳に届いていないようで、木山は謔言のように呟いた。

「ネットワークの暴走……!?!? ……虚数学区、五行……機関」

最後にごめん、と口にして木山は地に倒れ伏した。

俺達が駆けつける間も無く、事態は加速する。

木山の身体から、白くて透明な布だかトレットペーパーだかそうめんだかよく解らないものが出てきた。

やがてソレは異形の赤子のような形状へと収束する。頭部に天使の輪を冠した怪物。

AEMバースト
幻想猛獣が産み堕とされた。

「何……あれ? 胎児……!?!?」

御坂は驚嘆と恐怖から、張り裂けそうなくらい眼を見開いている。

というか若干顔芸気味になってますぜ美琴さん。

ぎりぎりヒロインがしちやいけない顔だ。

下手すりゃトラウマものだね。

奇声と共に、^{AEMバースト}幻想猛獣の周囲から衝撃波が放たれた。

「うわっ！」

御坂は咄嗟に磁力で鉄の盾を創り、俺は両腕をクロスしてガードした。

^{AEMバースト}幻想猛獣が、続けざまに巨大な氷塊を乱射してきた。

なので、俺は両手に握った日本刀で氷を全部砕き、そのまま^{AEMバースト}幻想猛獣の背中を切り裂いた。

「よっど……」

着地すると、御坂が驚きというより呆れの表情で俺を見つめていた。やべ。ちよっと調子に乗りすぎた……。

「御坂さん、衣川さん!!」

ちよつどいいタイミングで、^{マイエンジェル}聖天使・初春が駆けつけてきた。両手の手錠は木山先生が外してくれたようだ。

「初春さん! だめじゃない、こんなトコ来ちゃ!!」

「……だけど」

少し揉めている二人を尻目に、俺は^{AEMバースト}幻想猛獣を見る。

俺達を追ってくる様子はなく、ただ夢遊病患者のように辺りをさま

よっているだけだ。

何だか、ぬら孫の魔王・山本五郎左衛門を思い出すな。インパクトでは幻想猛獣AIMバーストに匹敵すると思う。

まさか萌えキャラ（？）の山本さんがあんなのになるなんて……。

つて、また話が脱線しそーや……。

ネットワークを断絶しない限り再生し続ける幻想猛獣AIMバーストは俺にとって、絶好のサンドバックだ。

さあて、どう料理してやるのかな。

幻想御手の製作者・木山春生は鉄柱に寄りかかって呆然としていた。レベルアップ

「凄いな……。あんな化物が生まれてしまつとは。学会に発表すれば表彰ものかな……」

異形の怪物・幻想猛獣AIMバーストを見据えて、木山は自嘲的に笑う。

結果としてネットワークは木山春生の手を離れ、彼女が救おうとした子どもたちの回復手段を失った。

「フフフフフフフフ」

木山は嗤う。破滅的に嗤い続ける。己の非道に、己の至らなさに、愚かさだ。

やがて声が止むと、木山はポケットから黒い物体を取り出した。そして、それを自分のこめかみに当てる。

「……………お終いだな」

木山が手にしていたのは拳銃だ。当然、弾がこめられている。

トリガーを引き、弾丸が自らの頭蓋を穿つ。

それだけで、木山春生の人生は幕を閉じられる。木山には、この先の未来に夢も希望も感じられなかった。

早く楽になりたい。

その一心で指に力をこめようとするが。

「ちえりおおおおお！……！！！！」

突然駆けつけてきた少女に跳び蹴りを喰らわせられた。木山の身体がギャグマンガ風に、思い切り転がっていく。

「……………？」

木山が困惑していると、黒髪ショートの高校生・衣川晶が立ちはだかっていた。

「自殺とか、アンタバカなの？ 死ぬの？」

指をビシイっと木山に向けて仁王立ちをしている。

腕の辺りを擦りむいたせいか、木山は若干苛立ち気味な眼で衣川を見た。

そんなことは気にもしない様子で、衣川は鬱陶しそうに幻想猛獣AIMバーストを見上げる。

「……とりあえずルイズの物真似はさておき、木山先生にはまだやる必要があるでしょう」

「そうですよ！ まだ諦めちゃいけません！！」

その声に木山が振り向くと、頭に花飾りを乗せた初春飾利と御坂美琴がいた。

「どうすれば、アレを止めることができるの？」

木山先生が幻想猛獣AIMバーストの説明をし終えたところで、御坂が単刀直入に質問する。それに木山先生が答える。

うんテンプレですな。

「AIMバースト レベルアップ
幻想猛獣は幻想御手が産み出した怪物だ。ネットワークを破壊できれば恐らく……」

「消滅するって訳ね」

何としてでも、話に交わりたい俺は無理やり会話に割り込んでいる。いちいちタイミングに困ってしまふ。

初春は思い出したように、ポケットから小さな記録媒体を出した。
レベルアップ
幻想御手の治療プログラムだ。

んで、さっそく初春が治療プログラムをインストールしに駆けていった。

御坂は幻想猛獣AEMバーストと闘うようだ。

はてさて俺はどうしたものか……。

すると、御坂がいつになく真剣なおもむきで俺に声をかけてきた。

「衣川……。アンタが妙なチカラを持っていることは、さすがにみんな気づいているわ」

「ぎくう！！！！　な、なななななな何のことかな……」

「いや。反応からしてバレバレだからアンタ」

うわっ辛辣すぎる……！

俺の能力について、どう説明すりゃあいんだよ……！
科学サイド相手に、『これは魔術ですか？　はい、魔術です』作戦じゃ済まされないし……。

俺は幻想猛獣を眺めながら、不気味というか気味悪く嗤い続けた。

「ちよ、あのお衣川さん……」

「じゃあ早急に血祭りショータイムだぜ、幻想猛獣オオオオオオ！」

「おい。危ない薬をやった人みたいになってるわよアンタ……」

第十二話：幻想猛獣とか恐いわ（後書き）

今回、晶ちゃんが随分とキチっていましたが、多分転生の苦労とかで色々溜まっていたのでしょう……。
生暖かい目で見守ってあげてくださいな（笑）

第十三話：幻想猛獣をフルボツコの巻（前書き）

約1ヶ月ぶりの更新になります。いざチートにしようと思ったら、手付かずでこの様です。

いい加減、自虐ばかりの前書きにならないようにしたい（涙）

第十三話：幻想猛獣をフルボッコの巻

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラッー！！！！」

どうも、毎度おなじみの衣川晶です。

凄まじいハイテンションで幻想猛獣をフルボッコ中のところだ。

あ、警備員アシスキルは邪魔なのでギアスを使って一部（黄泉川とか）を除いて避難させといたから。

現在、王の財宝で、AEMバースト幻想猛獣に向けて大量の宝具を乱射している。宝具の他に紙くずや飲みかけのペットボトルがあるのは、俺が王の財宝をゴミ箱代わりにしたからだ。

チートってホント便利だな。

「どう見ても、超能力者レベル5を越えてるでしょ……」

呆然と呟くのは、さつきから俺の虐殺劇ショータイムを眺めていた御坂だ。能力を使っても大丈夫かと思っただが、流石にやりすぎたかな……。けどやめない

「白銀、抜刀！！」

俺は駄目押しとばかりに、アスラ・マキナー機巧魔神の『白銀』を召還した。影から数メートル大の白い機械の巨人が現れる。

『闇より深き深淵より出でし 其は、科学の幻影かげを裁く剣！』

白銀から聞こえる、金属をこすりあわせたような声。その重低音は、

等感を抱いた能力者の思念の塊なら負け犬根性くらい持っているはずだ。

仕切り直しとばかりに、収納していた長刀を手にする。FF7のセフィロスが使っていた正宗だ。

俺は両手で長刀を握りしめて、構えの姿勢をとる。

AEMバースト幻想猛獣が再度触手で襲ってきたので、正宗を振り抜く。

「八刀一閃！」

「aJg速cTW強g!!!!!!」

そのまま八連続で斬撃を浴びせてやった。また再生されるから、あまり意味がないけどな。

でも、気分はセフィロスだ。あのBGMが脳内再生されている。

塩酸 しめじゝ ひらめゝデメキン

初春がそろそろ治療プログラムをダウンロードしている姿が確認できる。遊びもそろそろ終わりだな。

「クククク。貴様を約束の地へ誘おうか」

「アンタって、ほんとキャラが安定しないわね……」

AEMバースト御坂が幻想猛獣を相手取りながら、そんなことをほざきやがった。

猫被りモードは即席で作ったからな、言動やテンションが狂いがちなのは認めるが。さっきまで、バーサーカー状態だったし。

と、^{AEM}幻想猛獣が俺の方へ巨体を押し込むように突撃してきた。なので、^{IM}ノーモーションで足元の地面を巨大な数本の杭に錬成した。幻想猛獣が小さく見えるほどの土杭が、一切の丸みを感じさせない先端を尖らせて、貫く。

「de j k a 刺 s n 裂 k s ! ! ! ! !」

「ちんたらしてんじゃねえぞ雑魚の団子野郎がああああああ!!」

叫びながら日輪・天墜をぶちかました。集約された太陽の光に^{AEM}幻想猛獣の身体は焼き尽くされたが、やはり再生する。

多少は怯んだような態度を見せたものの、そのまま建物へ向かって進撃を続けやがった。

うん。

^{AEM}幻想猛獣と闘ってて、何か既視感を感じていた。

コレ、モンハンのラ シャンロンだわ。

「ふーん。こりゃあとんだ長丁場が期待できそうだな。御坂はどう思う」

「ほんと。どいつもこいつも人を苛々させるわね……」

よっぽど鬱陶しいのだろう。エンドレスエイトチックな作業に御坂は苛立ちを露わにし、怒気を混ぜた声で愚痴を漏らす。

「チツ。いくらやってもキリが無いわ……」

「そーですねー」

「怪獣映画かっつてのー!!」

「そーですねー」

「再生とか反則技だろーがッ!!」

「そーで……」

「返事くらいマジメにしろオオオオオ!!!!」

俺のそーですね攻撃に御坂の堪忍袋の緒が切れてしまった。俺が三発目を言い終わらないうちに電撃を飛ばしてきた。どう見ても人を殺すレベルの電撃だ。お巡りさん、殺人未遂現場はここですよ。

サンダガ撃って相殺したけど。

ほんとカルシウムが足りてない奴だよなー。そんなだから胸も貧相というか虚しいんだよ。この、バスト飢餓地帯女」

「後半、丸聞こえよ!!　そして何だとコラ!」

「まあまあ。カルシウム不足も立派な個性だよ」

「貧乳じゃなくて!?!」

ちなみに俺の胸囲はそれなりにある。尻が若干でかいものの、ベストボディだ。

ホントなら長身で細マッチョなイケメンにして欲しかったが、チートの反動で今は女だ。おのれ、神様。

『（それって八つ当たりですよね……）』

今、天の声が聞こえた気がするが空耳だろう。

と、御坂と夫婦漫才をやっていたら、隙を見た幻想猛獣^{AEMバースト}が触手で御坂を捕まえた。そのまま宙につるし上げられた。

仕方ないので、ゲキニガスプレー^{AEMバースト}で幻想猛獣の動きを止めておく。

御坂の足も固まったがキニシナイキニシナイ。

しばらくは攻撃が出来ないはずだ、どっちもな。

「ほらー、美琴ちゃんが無駄話をするからー」

「どの口が言っつー!」

「宙ぶらりんで突っ込まれてもな……」

抵抗できずに為すがままにされている御坂なんてレアだな。なかなかエロい。

「やーい、ビリビリーミサカン」

「び、ビリビリ言っな……」

「貧乳 貧乳 ペタ娘」

「だーまーれー!!!」

「当麻『俺も好きだぜ、衣川……。今すぐにでも食べちゃいたいな』。昨日、わたしが当麻さんとBの上でした会話です」

「え……。び、びー？」

そう話すと御坂は顔を赤く染めて、ソワソワし始めた。心なしか目に涙をためているように見える。

詳細な説明をすると、騒がしい昼休み。俺はベンチ（B）に座りながら上条と二人きりで食事をとっていた。

俺も上条も自分で作った弁当を食べている。俺って意外と料理が得意なんだよ。

ちなみに俺の弁当箱は、女子が使うような愛らしいミニ弁当だ。ご飯には羊さんが描いてある。

いやー、いつのまにこんな趣味ができてたんだろ？ 前までは『マスコット？ ハッ』みたいな風だったのに。人の趣味も変わりゆくものなのだろう。

上条とは世話を焼きつつ焼かれるという関係なので、『今度、晶とくせー当麻くん用おべんとを作ってあげるよ』と提案したら、何故か上条がドギマギしていた。俺のブリっ娘演技が気持ち悪かったからかな。

その後妙に視線を反らされるし、話しかけたら変な奇声をあげられるし。

それはさておき、具にはタコさんウィンナー、ハート型ハンバーグ、にんじんを星形に切ったポテトサラダ、ミニ苺を入っている。

……あとホビロン。

そこで、グロ料理とかトラウマとか花咲くいろはとか言っな。意外とイケるんだって、コレ。

ほんとだもん！ 美味しいんだもん！

『ホビロンっておいしーよね。食い物じゃねえとか言ってる奴はマジでホビロン』

『ハハハ。意味わかんねえよ。でもさ 俺も好きだぜ、衣川。今すぐにでも食べちゃいたいな』

って当麻くんも話してたし。好き嫌いはよくないよねー。わたしのイチオシだもん。

最後の部分だけを抽出すれば見事、『いやーん』な会話になるわけであって。

キヤッ、あきらエツチなこ

すいません。キモイです。ごめんなさい。

以上のことをチェリーガール美琴に告げたら、自らの勘違いに気づき違う意味で顔を赤くした。ざまあ（笑）。

「あ、あ、ああああ……あ、あ……あ、アンタがへ、変な言い方を
するからてつきり……」

「当麻くんが、わたしの■■■■を■■■■したり、セクシーな■■■
■■■を■■■だいたりしたと……。さすがHENTAI、妄想力
旺盛でなによりです」

「へ、へんたいは、アンタよ！！でも、なんでアンタがアイツに
弁当をやるのよ！おかしいわよ！」

御坂が指を突き出して、妙な言いがかりをつけてきた。あるえ、こ
いつってこの頃から当麻く……。上条に気があったっけ？まあ、黒
子ちゃんがそれっぽいことを言っていた気がするけど。

ただし、俺が上条に弁当を作ろうとしていることを糾弾される謂わ
れはない。微妙に御坂に対して苛立ちを覚えたので反論しとく。

「え？わたしが当麻くんの親友だからでしょ。お弁当の作りっこ
ぐらい当然じゃん」

「ぐぬぬぬ……」

原作でも姫神と具を取り替えていたし、シャナの吉田さんだっつや
っているから、ノープロブレムであろう。

それでも御坂は納得できないようで、食い下がる徴候もなく文句を
つけようとする。

なんなの、この娘……。

「だ、だからってねえ……！付き合ってもいない男女が……」

「議論は後でな。来るぞ」

「へ？」

御坂が反応するか否かのうちに、^{AEMバースト}幻想猛獣が触手を振り回して彼女を地面に投げつけた。近くにあった原子炉の壁に磁力で張り付いて、事なきを得たが。

ゲキニガスプレーの効力が切れ、^{AEMバースト}幻想猛獣の暴虐が再開された。

……だが、

「治療プログラムの転送完了かな」

「この音楽……。初春さんがやってくれたのね」

どこか幻想的で、けれども夢から覚めるような、不思議で奇妙な音が流れている。^{レベルアップ}幻想御手を媒介にして生み出された力場の塊が、積み木のように崩れていくような気がした。

そして、これにより^{AEMバースト}幻想猛獣が再生することは最早ない。

その事実を認識した御坂は、^{AEMバースト}獰猛かつ好戦的な笑みを^{AEMバースト}幻想猛獣へ向けた。

「悪いけど、これで。ゲームオーバーよっ!!」

放たれる電撃。穿つは、雷の槍。赤ん坊が泣き叫ぶような悲鳴が響く。

^{AEMバースト}青い光が^{AEMバースト}幻想猛獣を焼き尽くした。結果、^{AEMバースト}幻想猛獣は力尽きたように地面に倒れ伏した。

御坂は幻想猛獣^{AIMバースト}が撃退されたのを確認し、ほっと安堵の息を漏らす。全てが終わったのだと安心してしているのだろう。

「気を抜くな！！ まだ、終わっていない！！！！！」

突然の木山先生の怒声に御坂が驚く。

同時に、焼き炭同然となっていた幻想猛獣^{AIMバースト}が、まるで未練を抱いた怨霊のように復活する。幻想御手使用者の呪いがそうさせるのだろう。

「あれはAIM拡散力場が産んだものだ。普通の生物の常識が通用しない！！！」

「だったらどうしろっていうのよ！」

「核だ。力場を固定する、『核』を破壊すれば……」
あまりの事態に半ば恐慌状態でもめる二人だが、

『あk a あn………』

幻想猛獣^{AIMバースト}から聞こえる声に、全員が凍ったように動きを止めた。それはさつきまでの意味不明な叫びとは違う、意味と意思のこもった声だ。

『おれk 達はu 出g 来損ない』

『だと、思z 1 ってs a やがる』

『 r r r r 毎日がe惨cめ』

『カkのt u m iあるh奴に見下さe g j p n』

『見p返iしたm d i』

『 l a e もう諦rめyつかな』

『 みるm h dな僕jをみg』

『ピラフ食いてーw w w w』

『認めj j j fて欲しいのよ』

『 H e g r l b n n リートがk g g a m w t p g g j m m 儲い』

『 j . j g g k g g あjのp p g v u w に追いつh k k k g o n i』

『 無m t p 能j m g tと超能力者g g j g g c i h u x j』

『 世界k m j aがi k u q m 違h j j』 『c u a』

『 あなたには理解できないm a v』 『j g g』

『 a m i 格n k u e 下u m e』 『e』
『 g g g j i a m t 下j z k e g g i i かな』

『 見下t t h a j m n a i だよ』

『 お前n i 何がw c b a かるM t q b i q u w』 『i r v』 『』

AEMバースト
幻想猛獣から溢れ出した、使用者達の恨みや願いを聞き終えて、俺は一度深呼吸をした。そして頭を掻きながら、俯いている御坂の方を振り向く。

「なあ。眠っているガキを叩き起こすにはさ、なにが効果テキメンかな……」

「そりゃあ決まってるでしょ……」

そこで御坂は顔を上げ、決意を決めたような笑顔で、

「ドデカい電撃よ!!!」

叫びとともに雷電が指先から弾け飛んだ。そのまま、AEMバースト幻想猛獣の身体を磁場が覆い尽くす。しかし、これでは致命打にはならない。

木山先生が苦汁を飲み干すように呻く。

「あれではAEMバースト幻想猛獣を止めることが……」

「よく見る木山先生。あれが負ける奴の顔か」

「な……!? あれは」

俺の言葉に木山先生は気づいたようだ。AEMバースト幻想猛獣の身体が表面から削れ諦めを見せない御坂の表情の先で、AEMバースト幻想猛獣の身体が表面から削れていた。ゴテゴテに塗り固められたメッキを剥がすかのように、皮

膚が消し飛んでいる。

「多分、電気抵抗をねじ込んでいるんだろうよ。御坂もよく考えたよな」

「私と闘ったときは本気じゃなかったのか……」

大ダメージを負った幻想猛獣^{AEMバースト}は、虚しい抵抗を続ける。

氷塊の乱射。光弾による砲撃。触手を振り回した打撃。吹き散らす炎。大爆発。まるで自らの劣等感に押しつぶされた能力者の足掻きのように抗う。

対比するかののように、ずっと前を見続けた御坂美琴は、その程度の壁など取り払ってしまふ。

周囲を舞う黒い砂鉄の波が、迫り来る攻撃から御坂を護る。

結果は一目瞭然だった。

「

!!!!!!!」

!!!!!!!

手段を断たれた幻想猛獣^{AEMバースト}が、力任せに突進して最後の抵抗を行う。

御坂は逃げずに立ち向かった。その指には一つのコインが握られている。

「悪いけど、自分^{パーソナルリアリティ}だけの現実を他人に委ねている人たちに負ける気がしないわ」

思念の塊へ語りかけような、御坂の声。俺は勝手に続けることにした。

「努力は必ず叶うつてのは妄言だと俺も思う。勝ちたくても勝てない、頑張りたくても頑張れない。そんなものだろうよ……」

なんの努力もせず神様からチート能力をもらった俺。そんなやつが、言う台詞じゃないと思う。

それこそ、上から目線の説教と変わらないし、心のどこかでコイツらを見下しているのかもしれない。

「ただな、すんげー子どもみたいな先生が言っていたんだ。『努力しても伸びるとは限らないけど、何もしない人は成功しない』って」

確かに俺がイ力を喉に詰まらせなかったら神様に出逢うこともなかっただろう。そう意味では無駄なことなんて無いはずだ。

「今まで頑張ってきたことも、これから苦労することも全部、なかったことにはならないんだよ」

素養格付？ 個体差？ 魔術？ そんな括りで話しているんじゃないかね。超能力に縛られない人間そのもので語っているんだ。

「だからさ、諦めてもいいから一回だけ俺を信じてくれよ」

少なくとも、あの優しい優しい神様が創ったすべての世界が、人の努力を嘲笑うはずがない。たとえどんなに離れていても、必ずどこかでいつか繋がるはずだ。

ちよっとくさい自分の台詞に照れだしてきた。でも、悪い気分では

ない。

そして、虚空を舞うコインが落下を始めたところで締めくくる。

「こんな卑怯者チートの妄言でも、気に入ったんなら心に留めてくれや」

言い終わって、どこともなく神様のいそうな遙か空を見上げる。

同時に、幻想猛獣AEMバーストの核を貫いた、超電磁砲レールガンの眩しい軌跡が青空を横切った。

超電磁砲レールガンで撃ち抜かれ、自らを支える核を失った幻想猛獣AEMバーストは、その名の通り幻想ゆめであつたかのように脆く儂く消滅していく。

それは幻想御手事件レベルアップが終了した時間であつた。

第十三話：幻想猛獣をフルボツコの巻（後書き）

晶ちゃん女の子化計画は水面下で進行中。

第十四話：後日談は後付けとアフターケアなり（前書き）

タイトル通り後日談なのですが、時系列的には前話の直後でちょっと長めです。

第十四話：後日談は後付けとアフターケアなり

一連の騒動が終わった夕方。俺と御坂、初春は警備員アンチスキルに連行される木山先生を見送っていたところだ。

手錠をかけられ護送車に入らされている割には、穏やかな表情だが、主に隣で沈んでいるビリビリ中学生のおかげだろうな。

ちなみに御坂は、ついさつき電池切れ〜とか言ってぶっ倒れていたのだ。

今は紳士な俺が支えている。ちなみに俺は服以外はピンピンしているよ。

ふと、メランコリック状態の御坂が木山先生に声をかけた。

「あのさ……。アンタが助けたかった子ども達はどう……するの？」

自分の意思でやったこととはいえ、木山先生が子ども達を救う手段を邪魔してしまったことに罪悪感を覚えだしたのだろう。

それが御坂の良いところなんだと、俺は思っけどな。

木山先生も同じ感想を抱いたのか、どこか優しげに微笑んだ。

「なあに。刑務所だろうと世界の果てだろうと、私の頭脳はどんな手段でも探し続けるよ。気に入らなければ、私の邪魔をしにきたまえ」

「ワオ。スタイリッシュな犯行予告。隣に警備員アンチスキルがいますよ」

木山の宣言に俺を含めた全員が苦笑する。
恐るべし、脱ぎ女。

話題を変えようと、御坂はほんの軽い気持ちでとあることを口にす
る。

「人間の脳波を繋げるだなんてよく思いついたわね。普通は考えな
いでしょ、そんな無茶苦茶な方法」

「……ちよつとね。複数の脳波ネットワークによる演算機能の同期
と向上。それは、君を参考にさせてもらったのさ」

「は？ 私、そんな論文を書いたっけ……？」

中学生なのに論文を書いているとかスゲエな！？

俺、初めて御坂のことを尊敬したわ、今。

御坂の疑問に答える代わりに、背後を向いて護送車へ足を運ぶ。

そして最後に。あまり聞き取りにくい、内緒話をするような小声で
一つの現実を示した。

「君も私と同じ 限りなく絶望に近い運命を、背負っているとい
うことだ」

言い切ったかも怪しいぐらいで扉が閉ざされた。悲劇の筋書きへの
伏線を残して。

それをまともに聞けたのは俺と御坂だけだろう。
ただし、俺は知らんぷりをし続ける。

あの事件は上条当麻が打ち破る以外に、真の意味で解決する方法がないだろう。

アクセラレータ
俺が一方通行や統括理事会をギタギタにして計画を無理やり凍結させることはできるが、それでは御坂も妹達もシスターズ一方通行も救われない。アクセラレータ

そんな風に何度も自分に言い訳しないと、やってられない。

「はあ……。鬱々のうつうつだよ」

と、空気を読んだのやら読んでないのやら、一台のタクシーが飛んできた。

ここで停車するとドアが開き、

「お・ね・え・さ・まああああああああああああああああああああああああ
あああ」

変態淑女が現れた。

黒子はすぐさまテレポート空間移動して、御坂に抱きつく。

「ああああああああああああああああお姉さま。お姉さま・ああお姉さま・お姉さま（五・七・五）。はあー、いいよー。今日もお姉さまですよ。クンカクンカスーハースーハー。いい匂い。いい匂い。終始綺麗な茶髪様が心地よいフローラルな香りをまとっていますわよ。いいですね、いいですよ！、いいですよ！！　あまりにも甘美な微香に、黒子は、黒子はあああああ！！」

変態だ！　怖いよお母さん、変態がいるよ。怖いよ！！

「相変わらずだなー白井さんは」

黒子に続いて、佐天がのんきそうな声で降りてきた。そういや、いましたね佐天さん。

なんか前に幻想御手のことレベルアップと告白させてやるぜケケケケと、極悪なことを考えていたわけだが、そんな機会なかったな（笑）。

「初春！」

と、佐天がボロボロの初春を見るや娘を心配する母親のように駆けつけて初春を抱きしめた。その眼に涙を溜めて。

「初春……。怪我したり、怖い目に遭ったりしなかった？ 途中で監視カメラが切れて、あたし心配だったんだよ……」

「佐天さん……」

佐天の言葉に初春まで泣きそうになったが、何とかこらえて笑顔をつくった。優しい輝きを放った顔を。

「大丈夫ですっ！！ 衣川さんと御坂さんが守ってくれましたし、木山先生もそんなに悪い人じゃなかったから……。それに佐天さんが私のことを心配してくれたのが嬉しくて、イヤなことなんて吹っ飛んじゃいました」

「ふふふっ。そっか」

佐天は涙をセーラー服の袖で拭って、初春に負けなくらいの笑顔を見せた。

多分、無能力者だとかそんなコンプレックスからは少しだけ救われたことが窺える笑顔だ。
俺の原作ブレイクにより、佐天は自分の能力についてケジメをつける機会を失ってしまった。
そのことが心残りだったが、時が解決してくれるだろう。初春がいるからな。

清々しい気持ちで御坂と黒子を見ると、

「電撃を出せない今。わたくしがお姉さまの身体にタッチし放題なのは自明の理ですわ！ レッツマツサージ、イツツ・ア・マツサージ！！ さぁお姉さゲフォオ！？ ガハッ！ ゴツパア！！」

「なんでかしらね黒子。アンタの変態ぶりを見てたら腕だけ元気になってきたわ！！」

うん。最高だな、あの変態。イイハナダナーゾーンを見事打ち砕きおったわい。

口直しならぬ目直しとして初春と佐天を見て和もつかない……って、

「きゃああああああ！！ さ、佐天さんがスカートをめくりましたああ！！」

「はっはー。あたしを心配させた罰として、その可愛い白パンツを見せるのじゃー」

全く相変わらずだなこいつらは。見ているこっちまで笑顔になるじゃないか……ってか白パンツだとうー！

俺はすかさず、初春の背後へと飛び移った。
今の俺を光と形容しても、過言ではないだろう。

そしてカメラを構えて、

「富竹FLASH!」

「人のパンツを撮らないでください!」

「フウーハツハツハツハー。貴様の姿は我がカメラに収めたぞ、白^ヒ色の聖衣よ!!」

「わーん！ 通報してやるっー!」

初春がいつになく乱暴なことを言っているが気にしない。なぜなら俺のカメラには、おパンツ様が刻まれているのだからな。

カメラを現像すると、見事パンツ神が写っているではないか。なんか、御坂にばこられ中の黒子も写っちゃったが。

「ひどいですよ！ 人権侵害ですよ!!」

「あゝ……。さすがにこりゃあマズいですよ」

気まずそうな面もちで佐天が俺を諭す。信号無視をした子供にやりわりと注意するみたいない方だ。

それを聞いて初春が「さ、佐天さん……」と感極まったような表情をした。今度は違った意味で目が若干涙ぐんでいる。

「機械のレンズで写すなんて無粋な真似を……。初春のパンツは肉眼に収めてこそ意味があるんですよ」

「さ、佐天さあん〜!?」

初春飾利の心が折れた瞬間であった。

原因・友人の裏切りとマニアックな嗜好の発露。

なる程……。佐天涙子。君のことはただの百合だと認識していたが、評価を改める必要がある。

「涙子ちゃん。あなたはPANTSUラブではなく、PANTSU Masterルイコだよ!!」

「いやいや! 公園の呼び方から全然ランクアップした気がしないよ、セクハラマスターアキラさん」

「セクハラ!? 誰がやねん!!」

「自分の胸に聞いてくださいよ……」

そんなことあるわけない、俺が佐天を始めとする美少女四人組にセクハラなどと……。はい、思いつきしてましたね。いっそ清々しい域に。

気持ちはまだまだ男の子なんですよ……。

「大事な聖槍を失ってもな……」

「何かいいましたー?」

「いやなんでも。涙子ちゃんのおっぱいでけーなって感じてただけ」

「やっぱりセクハラマスター略してセクマスだー!!」

このように、女の胸襟に興味があるのだ。でも、最近は男の胸筋が……て、待て待て!! これじゃあ完全にホモじゃねえか!!
いかん、いかん。肉体の性別に引っ張られるな!! 男としての性を保てよ!

自己の尊厳という課題に頭を抱え込んでいる俺を見て、佐天がぶふっと吹き出した。失礼な。

「はは、スミマセン。けど衣川さんと初めて会ったときの第一印象が頼れるお姉さんの感じだったから、ギャップがスゴくて」

「わたしも同感ですね」

笑顔の佐天と初春に、俺は苦笑いを浮かべるしかなかった。地に近づいてきているとはいえ、女としての衣川晶はあくまでも偽りの人物像だからな。見事にぶれてしまうのも仕方ないだろう。

「確かに、色々問題の多すぎる御方ですしね」

「空気読めないし」

黒子と御坂、常盤台コンビが辛辣な発言をしおる。
お前ら俺になんか恨みでもあんの。

「けど、色々助けてもらったし頼りになるやつだったことは……ま

あ、認めてあげなくもないわよ」

腕を組みながらそっぽを向く御坂の声は、どこかうわずっていた。御坂は俺と視線を合わせようとしない。

どんな上から目線の褒め方だ。てか、褒めてんのかよコレ。少なくとも悪い奴だとは思われてないようで、何よりだが。

「そうですかあ？ わたくしの目には面白半分^レに場をかき乱すトラブルメーカーにしか映りませんの」

「おい、白井。後で屋上^レに来いや」

ドスの利いた声を出す俺。脇で佐天が「たまに乱暴になるところもな〜」とかつぶやいているのが耳に痛い。

「わたしと佐天さんが、衣川さんや御坂さんたちと出会ってから色々ありましたね」

「まだ半月くらいしか経ってないのにな〜」

「そうね。強盗事件や眉毛騒動に虚空爆破^{ゲニヒトケン}、そして今回の幻想御手^{レベルアップ}」

佐天や御坂が語るように、ほんのわずかな期間でも様々な事件があった。そしてこれからも、起こるであろう。

「あ……」

そこで、佐天が忘れ物に気づいたときのように声を漏らした。一同の視線が佐天に集まる。

「佐天さん、どうかしましたか？ まさか、パンツの見過ぎで意識混濁に！」

「黒いね飾利ちゃん……」

佐天は初春と俺の漫才に構う暇もなさそうに、一瞬だけ逡巡して意を決したように告白する。

「この前喫茶店で、あたしがみなさんに見せようとしたものがありますよね」

「ああ……。確か私達が^{レベルアップ}幻想御手について、いつぞやか木山と話していたときね」

「はい。そして、それが……」

佐天は自分の服に入れていた音楽プレイヤーを取り出す。そして電源を入れ、とあるファイルを表示した。

「^{レベルアップ}幻想御手……！？」

思わぬところで先ほど終了した事件の異物が出てきた。今回ばかりは俺も驚いた。まさか、佐天がわざわざ^{レベルアップ}幻想御手のことを告白してくるだなんて。

御坂は口が開いたまま何とか言葉を出す。

「一体、どこで、いつから持っていたの……」

「手に入れたのは木山先生に会う前で、偶然ファイルを音楽サイトで発見しちゃいました」

「どうして、ジャケット風紀委員やアンチスキル警備員に通告しませんでしたの……!？」
少しばかり責め立てるような調子になる黒子だが、すぐに自制したので俺は別段注意はしなかった。
佐天はうつむきながら、

「そのときに所有者を捕まえるって言われたから……。ううん、多分、チカラ能力が欲しかったんですよ」

自嘲気味な声で独白を続ける。

「ずっと能力者に憧れていたんですよ。自分でも頑張っ、て、できなくて。それでも憧れを捨てられなかったんですよ……」

その言葉に俺はわずかな居心地の悪さを覚えた。

佐天の心情は、ただの劣等感コンプレックスでおおよそ言い切れるものじゃない。だからこそ、どう反応したらよいか迷う。

「だけど……」

佐天の口からは、それまでの悲哀に満ちた語りから一転して、清々しさが溢れる。

「御坂さんが言ってくれたんですよ『レベルなんて、どうでもいいじゃない』って」

「あ……」

そこで御坂が申しわけなさそうに表情を暗くする。おそらくは俺が

木山先生と別れた後の会話のことだろう。

しかし、さもすれば小馬鹿にしているのではと取れる御坂の発言に（そんなわけではないが）佐天はこんな反応ができたか？

「……そりゃあ最初は納得できませんでしたし、御坂さんに対してモヤモヤしたりもしましたよ」

「うう……ごめんなさい」

「だけど……衣川さんを見てたら、ホントにレベルなんてどうでもいいんだな、あたしはあたしなんだなって思えました」

「えええっ!？」

予想外の名指しに思わずマスオさんバリの驚き方をしてしまった。何故に俺!？」

自分のこれまでの行動を振り返りながら、おずおずと佐天に問いかけてみた。

「それって、無能力者のわたしが妙な技を使うから？」

「いや……そうじゃなくて、なんて言ったら良いのかわからないけど、衣川さんが無能力者だとかはあんまり関係ないんですよ。そもそも無能力者には思えないし」

ずいぶん歯切れが悪いし、一部が失礼だな。でもどうして御坂じゃなくて、俺を見て能力について考えを改められるんだ。

「率直に言いますと、衣川さんはバカです」

「ぐふっ……！」

「だけど、衣川さんは自分らしく生きています。人生を一杯謳歌しているって感じですよ」

そりゃあ神様から折角与えられた、文字通りのセカンドライフだからな。原作介入や俺TUEEE以上に、楽しく一生を過ごしたいに決まっている。

そこで佐天の言いたいことに、ようやく気づいた。御坂達はとっくに分かったような顔をしてやがる。

「あたしには他にもあたしがやれることがあるのに、いつまでも下らないことに縛られていたら損ですよ。だから、それに気づけたのはみんなのおかげです」

最後に佐天はありがとうと笑っていた。

俺はよかったと思った。

だから、思わずにやついてしまう。それを見逃さず、御坂がしたり顔で冷やかしてきた。

「へえ〜。アンタもずいぶん可愛い反応するのね〜」

「べ、別に礼を言われたから、にやついているんじゃないんだからね！勘違いしないでよ！まあ、嬉しくないわけじゃないけど…」

…」

「はいはい、ツンデレ（笑）」

野郎、意趣返しのもりかよ……。 （笑）なんて使うキャラじゃないだろ御坂よ。

まさか俺の影響かつ！？

戦慄の事実には震える俺を御坂はガン無視して、佐天に頭を下げた。

「ごめんね、あの時無責任なこと言っちゃって。超能力者^{レベル5}なのに、そういうところは全然……。今回の事件の原因も、幻想御手^{レベルアップバー}を使った人たちの気持ちは分かってやれなかった、私たち能力者なのかも……」

少なくともその場にいる全員は御坂が謝る必要はないと言っただろうが、御坂は自分の非を認めしっかり謝った。

「まあ、その優しさが御坂美琴らしさだな」

「そうですね」

珍しく白井が俺の意見に同意してくれた。初春も首を振って頷いている。佐天と御坂は長年の親友のように笑いあっていた。

夕焼けがまぶしくて、まるで青春の一ページみたいだな。

まあこの時、俺の頭からインデックス禁書目録やら神裂火織やらのことは、すっかり抜け落ちていた。

ニセ、トシト。

第十四話：後日談は後付けとアフターケアなり（後書き）

次回はあの人が出てきます。まあ、触りだけですがね。

第十五話：神裂火織 見 参（前書き）

修学旅行で京都へ行っていました。金閣寺って本当に金ピカですね。
この経験が小説に生かせれば……ないない。

第十五話：神裂火織 見 参

レベルアップ
幻想御手事件も終わり、寮で優雅にFateゼロを試聴中だ。

ちなみに何故、禁書目録の世界にいる俺が元の世界のアニメを見ているのかというと、神様が俺の部屋に番組を流してくれるからである。

ヤケにタイムリーなネタが振れるのはそのためである。ホント気が利くよな。

禁書目録や超電磁砲は駄目らしいけど。

「さてさて次回予告も終わったし、風呂にでも入りましようかな」
窓を見ると外はすっかり夜だ。街灯が夜景をデコレートしている。帰ってから、アニメをまとめて視聴していたからな！。

アニメは文化だ。

クーラーがガンガン効いた部屋で服を脱ぎながら、早速覚えたOPを口ずさむ。

下着を洗濯カゴへ放り込み、全裸で浴槽へ向かう。

さて……。

「何か忘れてる気がするんだよな。しかも重大なことを……」

湯船に身体を沈めた俺は、お湯を指でチャプチャプと弾きながら、頭の中を探ってみた。

レベルアップ
幻想御手事件に関して、やるべきことはやったはずだ。

超電磁砲の事件は、ビッグスパイダーと乱雑解放ホルターガイストぐらいだろう。

特に心配する事態は今のところないはずだ。

「じゃあ『あいつ』のことか……」

あいつとは、レベルアップ幻想御手について嗅ぎ回っているときに遭遇した少女のことでスキルアウトのボスの、確か……とぐ、ええと、とぐる……。

「ああ、とぐるウンコさんか」

（ 兎黒未鉦です。オリキャラですよ ）

とぐるウンコ絡みで何かありそうだからか。超直感でも働いたのか
もしれないな。

しかし、メタな話だが作者にこのタイミングでオリ展開を絡める能
力があるのだろうか？ いや、ない。

「そして絶対に絡みたくない。したいのは原作介入であり、もめ事
では断じてあらず」

もしかして御坂かも、ああきつとそうだ。
多分、ハッキングして俺の住所を突き止めて勝負しなさい展開だろ
う。このストーリーカー紛いめ。

「にしては、不安のベクトルが違うな。もっとこう、重大な誰かの
一生を左右するような感じなんだよ」

濡れた髪を乾かすのがもどかしい！　いつそのことと、ものの弾みで髪を手から出した炎で焼いてみた。

うん。バカだね。

当然頭部は焼け焦げ、熱さによる痛みが襲いかかったが、毒どくの発動により皮膚や髪はすぐに再生した。

これで水気は飛んだけど。
濡れ場ならぬ焼き場だ。

そこから箆笥へスライド横移動をして、速攻で適当な服に着替えた。随分と焦っていたから服がメチャクチャになっている気がする。

玄関で靴を履きながら、扉を勢いよく手で押して開けた。夏とは思えぬ冷たい夜風が、風呂上がりの身体を震わせる。湯冷めしなきゃ良いけど。

「ウオオオオオオオオ！！」

寮から出た後、聖人並みの身体能力が出せるほぼ限界速度で街中を駆け回った。周りの視線が妙に集まっているが、今の俺には矮小な問題だ。

それより重要な問題は、

「神裂つて上条とドコで鬩ったんだっけ？」

今日の教訓。

備えあれば憂いなし。

備えなければ後悔だらけ。備えられたら嬉しいな。

実を言うと、俺って一応『とある』の話は大体は知っているんだけど、禁書目録の1〜6巻だけはアニメでしか見ていないんだよな。だから学区だの詳しい説明だのは知らない。あとはDVD特典や雑誌収録の話もだ。

こうなるんだつたら転生前に見ておけばよかつたな……。後の祭りだ。

「ちっ、またコレを使う羽目になるとはな……」

愚痴りながらスカウターを取り出し、スイッチをいれた。戦闘力の高そうな神裂なら、多分見つけられるはず。

ピピピツという機械音が鳴り、画面に周囲の戦闘力を表示させる。細々とした人混みの中で、強大な戦闘力が幾つか示されていた。その内の上位クラスの戦闘力反応と、一般人より少し高い程度の戦闘力が隣接している場所がある。

善は急げと、スカウターが提示した位置から微妙に離れた場所へ腑アリバイブロック罪証明を使い移動した。

すぐにビルの陰から周囲を見渡すと、向こうら辺で長身の女性が、学生服を着た少年に対し馬乗りになっていた。

ここだけ抜粋すれば、非常にえっちなシーンに見えるが、実際は神裂が七天七刀の峰で上条をフルボッコしているところだ。

アサシンの気配遮断で隠れながら二人の様子を窺う。

「何でデメエはそんなに力があんのに、そんなに無能なんだっ!!」

「私は……」

毎度お馴染み上条さんの説教が終わると同時に、上条の意識が途絶え、糸の切れたマリオネットのように地に倒れ伏した。

「当麻くんっ!!」

そこで声を張り上げながら俺は上条の元へ駆け寄った。白々しいのは自分でも自覚しているのだが、放っておく方が非常に心苦しい。元はといえば、俺のミスが原因だし。

本当にスマン。

ハンカチで血を拭いてあげようかと思ったが、焦って家に置いてきてしまった。仕方がないので、俺の服をハンカチ代わりにした。

服に血や泥が着いてしまったが、これくらい何の支障もない。後で包帯でも巻かないとな。

「随分と優しいですね」

そこで大気を斬るような神裂の声が俺の耳に届いた。その姿には先ほどまでの弱々しくうなだれた様子はない。感情の切り替えが上手いか、無理をしているかのどちらかだな。

「ステイルの話聞く限り、相当な魔術師であると予見していたので、少し意外です」

「何が相当なのか問いただしたいところだな、天草式の女教皇様よ

リエステス

お

「貴女は……！」

ステイルは炎で焼いて全裸にただけで、別段ひどい事はしていないだろ。これから闘うであろう連中の処遇を見ていけば、いかに奴が幸せだったのか解るはずさ、ククククククク。

「だーいーたーいー。お前の格好の方が『相当』だろうよ、このハレンチ女」

「だ、誰が破廉恥ですかっ！！ これは術式に必要な格好をしているだけで、決して趣味では……」

顔を真っ赤にして必死で否定する神裂だが、へそ丸出しおっぱい浮かべまくりのＴシャツに片足の太ももが露出しまくったズボン。どう見ても恥女です、本当にありがとうございます。

ウエスタンサムライガールじゃなくて、エロティックハレンチガールと呼んだ方がいいだろう。

「大体！！ 貴女の格好も見られたものではないでしょう！！！！」

「はあ？ 何言ってるんだ、神裂・ハレンチ・H・カオリ」

「神・裂・火・織です！！」

たあく……。

クラスで爽やか系神聖美少女と呼ばれている、この晶ちゃんがハレンチだと。

神裂さん、あんたって本当に聖人だな……。

あれ、おかしいな。どうして涙が止まらないんだろ……。アハハ。

「あーもういいよ。今回でチート転生はお終いだよ……。とぐるウニコの伏線とかどうでもいいよ。作者は大人しく他の作品でも書いてるよ。俺の人生はもうゴールなのさ……。」

「言っている内容は意味不明ですが、貴女の人生はまだまだスターラインじゃないですか。ほら、元気を出して。」

うう……。慰めてくれて、ありがとう。

そうだな、俺たちの戦いはまだまだ続くぜ、だよな。

神裂は、地に両手を付けた俺に手を差し伸べてくれた。そして、

俺と神裂の手を遮るように、炎の剣が飛んできた。正気を取り戻した俺と神裂は、互いに向き合ったまま後方へ飛び退く。

地に足が着くと同時に、ビルの影から赤髪の黒い親父が姿を現した。

「ヤツのペースに飲まれるな神裂っ！！ その女は必要悪ほくたちの教会の敵だ」

「出やがったな……。怪人ロリコンバーコード男。略してロリコン」

「だ、誰がロリコンだ！」

「貴方もですよスタイル……。」

激昂するロリコンを恥女が諫める姿は、今から戦り合いをするとは思えない。

しかし、ふとしたきっかけで戦いの火蓋はすぐにきられるのだ。

ロリコードことステイルが、俺を睨みつける。

「この前は僕に随分と恥をかかせてくれたね。今回は君が恥をかく番だ」

「はいはい死亡フラグ乙。聖人一人が加われば、このチートを倒せると思ったのか」

「ふうん。その割には、そっちの少年は無様だったけどねえ」

「言っじゃねえか、負け犬……」

上条の話題を出せれ、俺は少し苛ついた。殺気と狂気が衝突し、緊迫した空気が張り詰める。そんな中で、神裂は僅かに逡巡している様子だ。

そして、神裂が躊躇い気味に意見をしてきた。

「話し合いで解決、というわけにはいかないのでしょうか。こちらにも、インテックス禁書目録を保護しなければならない事情があるのです」

「……ふうん。その結果が当麻くんをフルボッコなんだあ」

「それは……」

俺の言葉に、七天七刀を持つ手が震える。明らかな動揺と隙だ。

それにしても、自分で言うのもあれだが、今の台詞は陰険過ぎやしないか。なんだろう、自己コントロールが出来ていない。

「説得は止めに行こう神裂。コイツは右手の少年がやられて、キレちゃってるみたいだよ。むしろ、いつものように敵は払った方がいい」

ステイルがハサミの手で挟んだルーンの札を、俺に向けて構える。渋々と、神裂も七天七刀を構える。

このままの格好で戦うと羞恥心がやばいことになりそうなので、黒いコート　夜笠を羽織る。
どうでもいいけど、ステイルとシヤナって結構共通点多いよな。本当にどうでもいいけど。

「来いよ、年齢詐称コンビ」

「誰が年齢詐称だ!!!」

ステイルさんじゅうよんさいと神裂さんじゅうはっさいが一齐に突っ込んだ。
こいつらが老け顔（笑）なのは、ハイムラさんの理由があるらしい。

雑談はこれくらいにして、戦闘開始だ。

「くたばれ恥女!!!」

早速、聖人並みの身体能力で神裂に飛びかかる。対する神裂も聖人

の力で、地面から跳躍し拳を構えた。

まあ、最初から本気を出すとつまらないから軽いジャブで

「七花八裂・改!!」

「はああ!!」

俺と神裂の身体がぶつかり合い、

神裂のパンチが顔面にめり込み、俺の身体は地面に叩きつけられた。

つて、え？

「えええええ!!」

第十五話：神裂火織 見 参（後書き）

今回晶ちゃんがお見苦しい姿を見せました、すみません。
次回、衣川晶の弱点が明らかになります！？

第十六話： ジャスト一日だ。 いい夢見てたら終わったよ……（前書き）

戦闘シーンって書きたいことが多くて困りますよね。 何回、書き直したことが……。

第十六話： ジャスト一日だ。いい夢見てたら終わったよ……

前回、神裂火織と戦火を交えた俺こと衣川晶だったが、ものの見事にぶっ飛ばされてしまった。何故!?

果たして、一体俺はどうなってしまっただのか。

あと、赤髪バーコードとも戦っています。

といった感じで、現実逃避の真っ最中な俺は、コンクリートに身体を叩きつけられたところだ。
神裂とステイルは間髪入れずに、追い討ちをかけようとこちらに迫ってきた。

そんな魔術師共へ、地面に寝転がったまま声をかける。

「ちょ、タンマを激しく希望」

「誰が待つと思いますか」

「このまま丸焼きにしてやるのか」

ちいっ!

さすがに、一時休戦をのんでくれるほど優しくはないよね。

まあ。

お前らの意見なんて聞いてないしい、俺がタンマと言ったらタンマ

なんだよね。

「はい、ザ・ワールド」

途端に、神裂とステイルは彫像のように動かなくなり、周囲の風もピタリと止んだ。それどころか、あらゆるものがあまねく停止している。

皆さんご存知の、『ザ・ワールド』で世界の時間を停止しました。

なので、俺以外誰も活動することはできない。

もしかすると上条は例外かもしれないが、現在気絶中なので大丈夫だろう。

それにしても、どうして俺は肉弾戦で神裂に負けたんだ？
身体能力もチートクラスにしたはずなんだけどな。

何はともあれ、アイツに聞いてみるか。

携帯電話を取り出し、番号を入力する。

プルルル。

プルルル。

『はい、みんなのアイド………』

「神様、その挨拶、いい加減、ウザイ」

『単語で遮られた!?!?』

スピーカーからは、相も変わらないスウィートな声が聞こえる。
毎度おなじみ神様だ。可愛いねえ。

『はいはい今日のクレームですね、めんどくさい……』

「挨拶を潰されたことがそんなに嫌か」

『どうせ、あれでしょう。「なんでチートな俺が、神裂如きに負けたんじゃあああ！」おっぱい揉みたい」とか言いたいの解つてますって』

「前半が大当たりだし、後半もあながち否定できないな……」

だった、思春期なんだもん。

『簡潔に話しますと、晶さんは「聖人並み」の身体能力、つまり「並みの聖人」程度の膂力しか出せないからです』

「な、ナンダッテー!？」

理由は簡単だった。

俺より神裂の方が強い。ただ、それだけだ。
畢竟、最初に俺が能力を希望したときの要求が『並みの聖人くらいの身体能力』にしたことが間違いだった。

妙なところでシビアにしゃがったな神様よ。

二次元の全能力を、あっさり渡してくれたから、あまり強いことは
言えないが……。

『そもそも、元は一般人のあなたと歴戦の猛者である神裂さんとは、戦闘経験からして違いますしね』

「そりゃあ、神様から貰った力がなきゃ、俺が神裂に勝てる点なんて一つもないしな」

「あるとすれば、空気の読めなささと、猫被りに、DSだけですか
らね（笑）」

「潰すよ」

その後つもる話もあり、俺主観で三十分ぐらい、神様と長電話をしていた。

そして携帯を切り、時間を元に戻すと、停止していた二人が再度動き出した。

「さて、^{イジメ}戦闘の始まりだ」

神裂は鞘に収まったままの刀を、ステイルは燃え盛る炎剣を振り回したが、何もない空気を斬るだけだった。

俺は既に、離れた位置で平然と立っている。

「幻覚……いや、転移魔術か!？」

「さ〜でどうでしょうかね〜。俺は普通に歩いただけだぜ」

ステイル視点から見れば、俺はテレポートしたように見えるが、実際は時間を止めたまま攻撃の当たらない位置に動いたのだ。

魔術師が呆然とする隙も与えずに、神裂のいる方向へ駆け出す。そして、再び俺は神裂に殴りかかった。

神裂も、今度は刀を構えて反撃の体勢をとる。

「先程の打ち合いで、解らないのですか。私は聖人です。つまり、肉弾戦は私に分がある」

「それは、どうかな？」

言いながら拳を握りしめた右手を振りかざし、

「ワールドに吼えるぜ！！」

そのままパンチで神裂をぶん殴った。神裂の身体は凄まじい速度で吹っ飛んでいき、近くのビルに激突した。

「なっ！？」

それを見て、ステイルが

マヌケな驚き方をする。こいつ何回俺に驚いたんだろうな。

一方神裂は神裂で驚愕の表情を隠せないまま、瓦礫の山から出てきた。

しつこいくらいの耐久力は、さすが聖人といったところだろう。

「動きがまるで別人に……。肉体強化の魔術ですか」

「今のは『ハンドレットパワー』と言ってな、五分間だけ身体能力を百倍にするNEXTなんだよ」

「ねく……すと？」

「ちなみに、五分たてば一時間は使えなくなるから、頑張ってね……
って危ねえ」

ステイルがイノケンティウス魔女狩りの王を召喚して襲いかかったので、真上にジャンプもといハンサムエスケープをして回避した。
随分と血の気の多いことだ。

「我が名が最強である理由をここに証明する（Fortiss931）
！！！」

「はっ！ それがお前の魔法名か」

「もう一つ教えてやる。魔女狩りの王　その意味は『必ず殺す』
だ！！！！！」

ステイルがびっくりマークを四つもつけて、俺に覚悟をぶつける。
でも、作中だとイノケンティウス魔女狩りの王で人を殺したことないよねコイツ。

「なら俺も礼儀として魔法名を、えーと……」

「七閃！」

何て魔法名を名乗ろうかと考えていたところで、邪魔が入った。神
裂がワイヤ鋼糸を利用した斬撃　七閃を撃ち込んできたのだ。

鬱陶しくなり、ワイヤ鋼糸を右手で掴んだ。

「うぜえ、ラフラフレミア 荒廃した腐花」

そして、ワイヤ 鋼糸が見る見るうちに腐っていく。

「今のは魔術じゃないな。どうした？ お前の魔法名と魔術を見せて見るよ」

俺の言葉に神裂の顔が曇った。理由は知っている。

「私は、あの名前を名乗りたくない！ 今の私には魔法名を名乗る資格なんてありません……」

「ふーん」

たかだか二つ名の魔法名なんて、どうでもいいと思うけどな。ステイルも、確かそんなこと言っていたし。

「じゃ、今度こそ俺の魔法名を名乗ってやるよ」

くっくっくっく。この名前を語ったときのコイツらの顔が楽しみだ。

「せーの、

救われぬ者に救いの手を (Salveree666) ! ! !」

途端に場の空気が、激震した。はい、ワザとです。ワザと、この魔法名を名乗りました。数字も悪意丸出しだね。

見ると、神裂さんとステイル君が面白い反応をしていた。神裂の顔

は青ざめ、ステイルは感情を赤く染める。

「その魔法名は……!!」

「あれえ？ 神裂さんたら、なに動揺してんだ。あ、もしかして魔法名が被った系？ 随分と気持ち悪い偶然もあるんだな」

「貴様アああああ!!」

激昂したステイルが俺に炎の魔術を放つ。それを軽くステップして避けた。魔術同様に、意外と熱い奴だな。

「そんなステイル君には、さっきのダメージをプレゼントー」

「ぐふっ！ がはっ！」

今の迫力は何だったのか、ステイルは、俺がさっき神裂から喰らった怪我を押し付けられて鼻血を垂れ流した。

不慮エンカウターの事故 自分のダメージを周囲に押し付ける過負荷マイナスだ。

ヨロヨロと立ち上がったステイルが「く、そ……」と呻く。なので、顔に石をぶつけてみた。

「貴様、何を……がはっ!!」

「あー、今からお前が一文字発言する度に小石を一発ずつ投げつけるから」

今、六文字喋ったので石を六個、ステイルにぶち込んだ。小石とは

いえ、俺が全力で投げたのだ。ベニヤ板ぐらいなら破けるんじゃないか。

さて、コイツは何発耐えられるかな？

「ふざけ……」

「はい、三ぱーつ」

「ぐふっ、こんなもので」

「促音とつめき声も含めて九発」

「じぱあっ……まだまだ」

「八発、ぬるぽ」

「ガッ……！！　ぼ、僕がこんな小石ごときに追いつめられるなんて……」

「大サビースで連続二十六弾幕」

有らん限りの小石を拾うと、宣言通りの数だけマシンガンのように、ステイルの全身へ万遍なく豪速球を放った。

「グアアアアア！！」

「お疲れ様ステイル」マグヌス。君のことは一生忘れないよ」

と、トドメの一発を顔面に放とつとじ、

「救われぬ者に救いの手を」Salverre000（！）……」

神裂が七天七刀を鞘から抜き出して、刃を叩きつけてきた。ステイ
ルは顔面を鼻血と泥で塗りたくった形で、地に倒れる。

当然、俺も日本刀 贄殿遮那にえとのしやなを手に持ち、刀を押しとどめる。そ
のまま、競り合いに入った。

「ようやく魔術ほうぎを見せる気になったか」

「衣川晶……貴女はどのような気持ちで、信念で、その魔法名を平
然とさらせるのですか！」

「さてね。実は、魔法名なんてどうでもよかったですりするんだぜ」

「くっ……外道が」

「高校生をギタギタにするような、自称十八歳に言われてもな。俺
も、発言がブーメランだけど」

俺の刀 贄殿遮那と、神裂の刀 七天七刀が激突する。

ぐっ……それにしても相当な力だ。魔術で強化してんのか。NEXT
Tでも間に合わん。
だったら更にパワーアップしてやる。

その瞬間、黒かった俺の瞳が灼熱に輝き、髪は炎のような色に染ま
った。

周囲からは雪のように紅蓮の炎が振りまかれる。
フケとか言っなよ。

「色が変わった……!? それに力が増している」

「キタキタア!!! 力がみなぎってキマシタワー!!」

無限大の存在の力を身体に注ぎ込み、炎を纏った刃で、七天七刀もろとも神裂を斬り裂いた。

「がああっ!!!」

致命傷を神裂は負わなかったものの、七天七刀はバラバラに砕け散っていた。

体勢を崩され尻餅をついた神裂に、俺はじわりじわりと歩み寄る。

「さあて、神裂火織。二度とインデックスにつきまてえないうような身体にしてやるうか」

「まだ……私は闘える……」

「おっと誰が動いて良いと言った 平伏せ」

言葉に従うように、神裂は俺に向かって頭を下げた形になった。露出度マックスの女が、地べたに頭をこすりつける様は、エロいといつか罪悪感を覚えてしまう。

「おい、朝だぞ」

俺はアスファルトで寝転がっているスタイルの腹を、蹴りつける。

「ガハッ」と声をあげながら、スタイルが覚醒した。

意識が復活したステイルが、睨みつけてきたので、ゼロ円スマイルを返してやった。

「さて、お前ら魔術師コンビが、イギリス清教の人間がインデックスを狙う理由を教えてもらおうじゃないか」

もちろん、こいつらの事情は知っている。だからといって、俺が全部知っているとは認識されると後々厄介なことになりそうなので、あくまで無知を装うのだ。

なんせ、彼らとは長い付き合いになるからねえ。

「……くっ」

「誰が教えると思うか……」

得体の知れない（自称）魔術師を警戒しているのか、俺にボコられたことを恨んでいるのか、反抗的な態度をとる二人。ちよっと揺さぶってみるか。

「よろしい。ならば、拷問だ」

「ふん。やりたいならやってみればいい。生憎僕たちは、君程度の低脳の拷問に屈するような、甘い訓練は受けていないんでね」

ほお、低脳とは言ってくれるじゃないか。あと、ステイルのどや顔はいつ見てもムカつくな。

「その低脳に負けるお前は、底辺を通り越してブラジルまで辿り着くレベルの、低さだな。やーいブラジル脳」

「意味不明なジョークは止める。それと、そのネタは日本限定だぞ。脳みその無駄遣いだ」

「脳みその無駄づかいね」

今宵の魔術師イジメはまだまだ続くぜ。

「ねえ知ってるー。人間の脳はいくらでも記憶できるんだよー」

「「なっ!?!」」

おっ、引つかかったな。

どごその豆のごとき語りで、記憶に関するネタをちらつかせたところ、魔術師二名は心臓が飛び出たかのような反応を見せた。

「どづいつことだ!?! これも畏なのか!?!」

「ぱーどうん? マジレスされても困るんだけど。え、なに、もしかして脳を使いすぎたら破裂するとか思っていた人?」

食いつくステイルをよそに、俺は困惑した風な演技を続ける。情報を焦らすのは、いつの時代でも楽しいものだ。

「勘違いしていて恥ずかしい気持ちは解るよ。ほら、ドンマイ(笑)

」

「本当に。本当に、何も知らないのかい……?」

「だから何の話だつてば。そもそも、大量の魔導書を記憶しているインデックス禁書目録がいるから不思議じゃ……ああ」

そこで、俺はなるべく自然に見えるように、真相にたどり着いたフリをする。

「つまりこういうことか。脳に魔導書の知識を詰め込んだ禁書目録彼女が、脳内を圧迫され、将来または恒常的に、崩壊してしまう。それを恐れて、イギリス清教はインデックスの記憶を一年前に消した、で合っているか？」

俺の言葉に、場の空気が重くなる。
そして、神裂がポツリと語り始めた。

「あの子は、インデックスは、私達の親友でした」

「ほお」

「貴女の言うように、あの子は魔導書に脳の八十五パーセントを犯され、そして残り十五パーセントしか動かせませんでした。そのため、完全記憶を持つ故に、あの子は一年分の記憶しか保てない」

うん、この時点で誰か怪しめよ。一見騙されそうだが、作中で上条が気づいたように、フルでも六年ちよいしか生きられない計算になつてしまう。

最大^{めいだい}主教^{しゆしやう}が相手だから、気づかなくても、仕方ないと思うけど。

後は神裂が上条に話した通りと同じ説明だった。

詳しくは原作かアニメで！

そして俺は、二人の魔術師に言い放ってやった。

「だったら俺がインデックスを救ってやるよ」
その言葉に異を唱えたのは、ステイルだった。

「今まで何人の魔術師があの子を救うなんて戯言をほざき、何人が挫折していったと思っっている！ 凶に乗るのも大概しろ、化物め！」

「化物じゃねーよ、ただのチート人間だ。それと、記憶のメカニズムについて疑問を持った奴がいたか？ え？ 魔術師様よ」

「そんな世迷い言、誰が信じるか……」

「別に信じなくていいぞ。そのうち、『事実』を目にできるんだからな」

「それじゃあ」と言って、沈黙するステイルに背を向け上条を担いで帰ろうとする。しかし、それを神裂のが許さなかった。

「待ちなさい」

「はい？」

神裂の言葉に俺は顔だけを振り向けた。

俺を睨む神裂の表情は、忽然とした憤りに満ちながらも、どこか救いを求めるような目をしていた。

「貴女は、私と同じ魔法名を名乗りましたね。ただの戯れだとは解っています。ですが、あの子を本当に救うと言った……」

そして、神裂はとある日付を口にした。

「七月二十七日」

「はい？」

「あの子の記憶消去までのタイムリミットです。その日までに、貴女は足掻いて私に見せてください。貴女が誇大妄想狂でないと……」

てつきり飛びかかられるものかと思っていたが、意外なことに、一時的とはいえインデックスを『俺に』託したのだ。言われなくても助けるつもりだったが、改めて言われると、自分がやろうとしていふことの重大さを実感する。

「いいぜ。泥船に乗ったつもりで待っているよ」

「泥は沈みますよ……」

何かキメゼリフをミスった気がしたが、気のせいだろう。また、黒歴史を作ってしまった……。

こうして、^{AEMパースト}幻想猛獣から始まった俺の長い一日は終わりを告げた。

第十七話：Dr・衣川の事件簿（前書き）

テンションが高いときに執筆するとスラスラ書けるものですね。
早く、一巻を終わらせたい……。

第十七話：Dr・衣川の事件簿

俺は倒れる二人の魔術師を放置して、上条を背中に担いだ。青春だねー。

上条の右手 イマジンプレイカー 幻想殺しが俺に触れたので、髪の色が元に戻り、ハ

ンドレットパワーも解除された。

大丈夫だ、問題（以下略）

ステイルと神裂は、そのままにしたが、念のため人が寄らないように結界を張っておく。あと、七天七刀は大嘘憑きで元に戻した。オールライクシオン 神裂は目を丸くしていたが、治癒魔術の応用だと説明。

帰り際に捨て犬……ステイルの額にマジック（眉毛が佐天に使った強力なヤツ）で『肉』と書いておいた。

すると、青筋を立てながらブルブルと震えだしたステイル。そんなに嬉しいのだろうか。「覚えていろよ……」とか呟いていた気がするけど、多分空耳だろう。

しばらく辺りをうろついていると、シスター服の少女が見えた。インデックスがせわしなく上条を捜しているようである。なので、彼女に声をかける。

「おい、インデックスちゃんやーい」

「あ。あきらー！ それに、とうまー!？」

せかせかと足早に駆け寄る、インデックス。上条がようやく見つけて安堵したのか、ふうと息を吐いた。可愛い。

「一体なにがあったのか説明欲しいかも。って!？ あきらは服がボロボロだし、とうまは怪我してる……」

「ああ……わたしは大丈夫だけど、とうまくんを早く手当てしないと」

俺は猫被り口調で、インデックスを促した。小萌先生のアパートへ向かいながら、インデックスにことの顛末を説明する。もちろん、記憶の下りは隠してな。

「バーコードと露出狂皇が、とうまくんをボコボコにしていたんで、逆にわたしが心身ともにボコボコにしたの。そして、インデックスちゃんを狙わないようにOHANASIIといたから」

「本当に、あきらはスゴいかも……。聖人もいたはずじゃなかったかな」

「わたしの前では聖人すらも、ただの性人に成り下がるんだよ」

「あきらは世界中の聖人に謝った方がいいかも!？」

インデックスが羨望とも憧憬ともつかぬ目で、俺を見ていたところ、マナーモード中の携帯電話が振動した。

上条をおぶっている最中なのでロクに画面を見ずに、ボタンを押して携帯を耳に当てる。

「はい、みんなのアイドル衣川晶ちゃんですよ」

『あなたも使ってるじゃないですか!?!』

「その呼吸具合は神様。何のようだ?」

『声で判断してくださいよ……』

今回はツツコミにまわる神様。いつもと立場が逆だ。どうやら、携帯をかけた方がツツコミ役をする風習があるらしい。

『どうせ晶さんのことだから、重要なことを忘れていると思って連絡したんですよ』

「上条の記憶のことか?」

『ええ!?!』

「なにマスオさんばりに驚いてんだよ。転生する前に、そんなことくらいは考えていたぞ」

『晶さんが物を考えた……だと……!?!』

「俺的失礼ランキング三位に匹敵する失礼さだな……」

『蟻が微分関数を理解するくらい、ありえないことだと思っていたもので』

「神にも言っても良いことと悪いことがあるぞ!?!」

でもキメラアント辺りなら高校数学を楽々解きそうだな。

「上条には悪いと思うが、記憶を破壊してもらわないと後の進行に差し支える……かもしれない」

『記憶喪失と幻想殺しの因果性について、作中でほのめかされていますからね。正しい判断ですよ』

「正しい判断ねえ……」

結末を認知していながら、その人に降りかかる悲劇を見過ごすことに罪悪感を覚える。

結局、俺の愉悦のためだと言えば、そこまでだが。所詮は物語だと割り切るしかない。

『まあ、物語を進めたいから不幸を許容するのは、転生者に課せられた義務のようなものですからね。だったら、せめて物語と関係のない日常は大切にすべきでしょうね』

「所詮はフィクション。されど、自分の人生はものがたりノンフィクションか」

『うわっ寒い。晶さんって、シリアスなると黒歴史発言を繰り返しますよね……』

「それを言うなよっ！　たださえ、猫かぶりと狂化の連発でキャラが崩れてんのに！」

『俺が守ってやるから（笑）』

「やめて！　虚空爆破の件を掘り返すな」

夜中で尚かつインデックスが隣にいるのに、俺は叫んだ。恥も外聞もなく声を張り上げた。

それにしても介旅は元気になっているかな。

『そんなわけで、ぜひぜひ黒歴史を量産してくださいね。それじゃあ』

「二度とかけるもんか！」

怒鳴り散らしつつ、携帯の解除ボタンを押した。

横を向くと、インデックスが少々怯えた様子で俺を見つめている。

あ、マズい。

「あきらって、時々別人みたいやしやべり方になるんだね……」

「えーナンノコトカナー」

「初めてあったときも、口調が違っていたんだよ。少しは安定してほしいかも」

はい。俺の豆腐のごとく脆いハートが砕けました。

やっぱり端から見れば、情緒不安定に見えるのかな。

最低限、土御門以外のクラスメイトにはキャラがバレないようにしよう。

バレてるかも、しれないけど。

アパートに書いて、まず始めに見たのは小萌先生の驚いた顔だった。俺は適当に説明をし、治療と称して一旦、小萌先生とインデックスを部屋から追い出す。治療方法についてアレコレ聞かれると面倒だし、二人を混乱させたくないからな。

「さて、Dr. 衣川の治療を始めますか」^{オヘ}

満身創痍の上条は煎餅布団で横になっている。彼の右腕が膝の前にある形で、正座している俺は能力を発動した。

「^{ドクターブライス}玩具修理者」

すると俺の肩から、一体の巨大な人形が出現した。

ハンターハンターに出てくるキメラアント、ネフェルピトーの念能力だ。

どんな怪我でも重傷でも、この人形の手に掛ければ、死人以外なら治療可能なんだ、うわすごーい。

ただ正直、デザインが何とというか個性的というかキモいんだよな……。

あまりにも表現のしようがないので、気になる人はググるといい。

「強力だし、全身にかかる訳じゃないから、上条の治療も可能だから選んだんだけど……」

見た感じ、^{ドクターブライス}玩具修理者なら右手に触れずにイけるハズ……。確証はないよ。

百聞は一見にしかずということとで、やってみますか。

「さあ、ドクターブライス玩具修理者よ。上条の傷を修理するがよい！」

ドクターブライス玩具修理者の細い指が、上条の身体をいじくり始めた。さて、上手く操ってそげぶされないように慎重に慎重に……。

「あ、右手触っちゃった……」

うっかり幻想殺しに当たってしまい、異能の力である玩具修理者は消えてしまった。失敗、失敗。

「もう一度、ドクターブライス玩具修理者」

再び人形を出して、修理を続行する。

あ！ 手がすべった……。

「……こんなこともあるよね」

念量は無限にあるので、時間の許す限り作業ができる。ちょっとイライラしてきたけど、ガマンガマン。

「治療続こ……消えた」

今度は上条が寝ぼけて、手をずらしやがった。

切れてないっすよ。

俺は温厚（自称）なことが自慢だからな。

しかし、こつもミスを連発してしまうとは。少し、気分転換が必要だ。

「ふう……」

立ち上がると、部屋の隅まで行き窓を開いた。外には夜の闇中にビル街が立ち並んでいる。

この日、第七学区の廃墟が突然消滅した。ちなみに、俺は関与していない。

気晴らしを済ませ、窓を閉めると、元の位置に戻った。

今度こそ成功しろよ！

祈るようにキモい人形を発動し、

また、そげぶされた。

……。

「やれやれ……」

定不能の正座をした。

「衣川ちゃん。夜中に大声を出すのは、ご近所さんに迷惑ですよ」

「ねえこもえ。今、空が光ってたんだよ！」

扉越しに小萌先生から注意されてしまった。

おっと、いけない。

イラつく的叫んでしまうのは、俺の悪い癖だ。自制自制。

二人の眠気を考慮して、俺は扉を開いて二人を中に入れた。ちなみに、これ以上の治療作業は何かがヤバいことになりそうなので、上条に包帯を巻くだけに留める。

「ささつ。散らかってますけど、どうぞ中に入ってください」

「ここは先生の部屋ですよー！」

俺のボケに小萌先生が、大音量でツツコミを入れてきた。近所迷惑ですよ、先生。

大人な俺は口に出さず、二人を布団まで運んだ。

「じゃあ、わたしは寮に戻りますので、当麻くんのことお願いしますます」

「わかりましたー。シスターちゃんも、ちゃんと見ておきますね」

部屋の灯りを消し、小萌先生とインデックスは眠りについた。二人は上条の様態を非常に心配していたが、数日安静にしてれば大丈夫だと聞いてホッとしたようだ。

ここで何も質問してこない、小萌先生の配慮に感謝する。

ちゃんと窓を閉めたことを確認して、ふと気まぐれを起こした。

「泣きの一回で、玩具修理者ドクターブライスをやってみるか」

とにかく失敗して元々だから、別段腹を立てる必要性腹ない。広い心で挑もうじゃないか。

奮闘虚しく、予想通り玩具修理者ドクターブライスは幻想殺しイマジンプレイカーで打ち消された。

次の日、上条の見舞いにと小萌先生の家をまたまた訪れた。

それで、相変わらず意識の戻らない上条へ、ヤケクソ気味に孤天斬……じゃなくて双天帰盾を、身体の一部にやったら見事成功した。

昨日の苦勞は何だったのやら……。

やれやれと頭をかいて、何気なくテレビをつけると、朝のニュースが流れていた。

『航空宇宙工学研究所付属 衛星管制センターからの報告によりまずと、昨夜未明、木星火星間に位置する小惑星が突如として謎の爆発を起こし、消滅したとのことです。依然として原因は不明で、天文学的混乱が予想されております。それでは次のニュース 』

リモコンのボタンを押して電源を消すと、俺はとあることを思い出した。

「いっけね。帰るとき窓を閉め忘れてた……」

第十七話：Dr・衣川の事件簿（後書き）

さてさて、一夜にして色々なものが消し飛びましたね。誰が原因でしょうか（確信犯）。

それにしても、最近寒くなってきましたね。朝布団から出るより風呂から出る方が辛いです……。

第十八話：馬鹿な！？連邦の介旅は化け物か！（前書き）

原作はさておき、例のあの人が出演します。

さらには特別ゲストも！？

か
」

「挨拶したらいきなりモブ呼ばわり!？」

眼鏡をかけた学生服の男子が目を見開いて、ツツコミをいれてきた。
あ、いつぞやの介旅君じゃないか。

「冗談よ冗談。わたしが、メル友の初……介旅くんのことを忘れるわけ無いじゃん」

「今、名前を言いかけて名字に変えましたよね!? 絶対下の名前忘れてるでしょ!」

「忘れてないから、介旅ワールドワイド君」

「壮大だ! 僕の名前が壮大すぎる!」

どごその志村のごとく、ツツコミに余念がない介旅。こやつ、意外とできるな。

「ところでKW2は何か用でもあるの」

「さらに略した!？」

まずはと、近場の喫茶店のテーブルを陣取って話を聞くことにした。介旅の言によると、昨日幻想御手レベルアップによる昏睡から目覚めた後、医者に無理を言っ退院をし、俺を捜していたそうだ。

携帯にかけようとしたところで、俺の後ろ姿を見つけたらしい。よく覚えていたな。

「当たり前ですよ。あの日、衣川さんの言葉が僕の生き方を変えてくれたんですから」

「何か照れくさいな……」

「ぶっちゃけ、おしりデカいな〜って印象がありましたけど」

「二度と眼鏡をかけられない身体にしてやろうか」

ドスの聞いた声に介旅の顔が青ざめた。

それにしても、思ったよりも喋り上手なやつだな。原作を見る限り、ダークサイドに堕ちたのび太的印象を抱いていたからな。

「さて、衣川晶さん。僕は頼みがあつて、あなたに会いたかったんです」

「うん、できる範囲のことなら何でも聞くよ」

俺は柔らかな笑顔で介旅を見つめる。

こいつが困っているのなら、遠慮せず力を貸してやりたい。名前を教え合ったら友達だと、どこぞの魔王も仰ったではないか。

介旅は息を軽く吸うと、何を血迷ったのかテーブルに頭をつけて叫んだのだ。

そして冒頭へ至る。

困惑した俺は、うわずりながらも柔らかかな声色で質問した。

「え……と。師匠とは一体どういうジャンルの師匠なのかな」

「全てです！ 厚かましいですが、僕は衣川さんのような清く正しく強く美しく勇ましく格好いい人間に、近づきたいんです」

「……………」

「超能力の範疇を超越した強さに、強靱な戦闘力。そして聖女のごとき慈愛に感服してしまいました。僕のような腐った外道も、変わりたいんです！」

「……………」

「だからこそ、図々しいのは百も承知でお願いします、衣川師匠！」

「……………」

ダメだ……。

脳の処理が追いつかない。さすがの俺でも、ここまで褒められると逆に引いてしまう。SEKKYOU（笑）でも発動したのかな。だけど、こいつは真剣なんだよな……。

「取りあえず頭を上げる。周りの迷惑だ」

口調が変わっていることにも気づかず、介旅をうながす。

「あの時の言葉は、一時のテンションに身を任せていた節がある。だけど、自分の発言には責任を持つつもりだ」

「……………はい」

「だから、俺はお前の師匠になってやる。望むなら恋人と夫婦以外、なんにでもなる勢いだ。」

「……………ありがとうございます師匠！」

「だから大声出すなど、何回言えば」

突如、俺の頭に稲妻が走り豆電球に漏電した。

俺は感極まった様子の介旅を見つめる。

彼には、心の底から己を高める意志があるのだろう。ならば、それに協力しなくては元男が廃る。

「（つまり、こいつをトコトン魔改造してやろうというわけさクッククック）」

「あー。師匠から凄まじい邪悪なオーラが出てきていますけど」

巧くいけば、チートクラスの戦闘能力が手に入るかもしれない。

さあて、早速こいつをどう魔改造してやろうかな。

「お……………あいつらは」

店の隅で四人の少女がたむろしていた。何者かは、以下の会話を見れば一目瞭然だろう。

「うーん。今日もシャケ弁は私を癒してくれるわね」

「いや麦野。結局、サバ缶も十分対抗馬になりうるって訳よ」

「二人とも超魚類が好きですからね。まあ、インスタントでも味が落ちないのは強みですけど」

「ZZZZZ……」

はい、学園都市の暗部組織『アイテム』の皆さんです。

ヤンデレターミネータこと麦野沈利。

真つ二つサバ缶姫ことフレンダ「セイヴェルン」。

見えそうで見えない絹旗最愛。

小動物系スリープガールこと滝壺理后。

見事にキャラのたった色物四人組が同じ喫茶店にいたのだ。いや、偶然だよ。

「おい介旅。早速、修行だ」

「はい、なんなりとお申し付けください」

「あそこにいる美少女達と今から追いかけてこた」

「はい？ イマイチ意味が分からないんですけど……」

「見てなって。ついて来い」

席から立ち上がると、アイテム勢が座っているテーブルへ向かった。俺に指示され介旅は、ひとまず後ろを追う。

少女達の近くで止まると、俺は麦野に話しかけた。

「すみません。ちょっと、お時間よろしいでしょうか」

「うん？ なにかしら」

「今、隣にいる眼鏡が『あのオバサン足太えな、どれ　　したろ』
って呟いてました」

「おおおおおい！！　　とんでもジョークかましてんじゃねえよ師匠
オオオオオ！！！！」

「ほお………」

先ほどまでの気さくな雰囲気を取り捨て、生存本能を震え上がらせる殺気が麦野からにじみ出る。明らかに無理矢理な言いかけだが、気にしていることを直に抉れば誰だって切れるだろう。

「まあまあ、超落ち着いてください麦野。いかにも映画のエキストラ
みたいなの、苦学生の妄言にいちいち腹を立てないでくださいよ」

「あ、ちなみにあなたのこと『あのチビ、色気もねえくせに生意
気な露出^{パンモロ}しやがって。おっと、いけねえいけねえ。ガキはすぐキレ
るから、聞こえないようにしないと又へへへ』と称しております」

「いえいえ私は超大人ですから、これくらいのことではキレません

よ。ああ、ついでだから糞山に埋まっちゃってください」

「ヒィィィィ！ この子の喋り方が怖い！」

「あとその金髪は『お前なんだか、上半身と下半身が分かれそうな顔だよな（笑）』」

「キィー！ 何か時空を超越した感じでムカつくって訳よ！」

「ジャージちゃんは『可愛いね』だってさ」

「うん。ありがとう」

怒りのオーラ全開の三人と、睡眠を続行する滝壺さん。滝壺さんで、妄想をしてはいけません。

尋常でない覇気に、介旅の両足はガクガクと震えていた。眼も既に三途の川を映している。

「しししししし死ししし師匠ウ！ もはや地球が消し飛ぶレベルの魔神が生み出されてますよ」

「さてと……。チ・マ・ツ・リ・カ・ク・テ・イ・ネ」

「うっかり死んぢまわねエように、超オお気をつけください」

「麦野と絹旗が怖すぎて、結局怒る気も失せたって訳よ……」

「……むにゃむにゃ」

介旅は、この世の終焉を見たような顔をした。予知能力などなくとも、己の運命は既に見えているのだろう。真理を悟ったように軽く息を吐き、やれやれと頭を抱えて微笑む。そして、靴ひもを結ぶと。

「すみませんでしたあああああ！」

全力で、店から逃亡した。その速度たるや、光がなんちゃらのライトニングさんでさえ息を飲みそうなほどの勢いだ。

呆然とするアイテム勢だが、こんな程度で激情が収まる思春期ではない。

「待てやゴラアア！！ テメエは全身をレンコンみてえにしてやんよおー！」

「超ステキ惨殺死体になりたいンですね、そオですか。だつたら望みどおり超キレエなスクラップにしてやりますよオおおお！」

「滝壺は領収書お願い！」

「わかった」

不幸にもアイテムに命を狙われることになった介旅少年。果たして彼は、衣川晶の魔改造を乗り越えることができるのか！？

次回に続く！

第十八話：馬鹿な！？連邦の介旅は化け物か！（後書き）

介旅君ならぬ改旅君として、ワープ進化する予定です。

第十九話： 介旅は筋肉が少ない（前書き）

介旅の修行編第二談です。

第十九話： 介旅は筋肉が少ない

日差しが照り輝く正午。

鼻水と汗を垂らしながら、とある少年は走り続けていた。現在、介旅は麦野と絹旗、あとフレンドから決死の逃走劇を繰り広げている。

実況は俺こと、衣川晶どえーす。

「ひい……ムリムリムリムリ殺されるウ！」

絶叫しながら走りつづける介旅。俺はちょうど横を、余裕のスキップでついに行った。

「今から原子崩し百連発しまーす 覚悟しろやゴラアア!!」

「いつまでも逃げきれるとか、思わないでください糞眼鏡」

「ちよ!? 絹旗、廃車はマズいって!」

後ろからは、白いレーザーやら粗大ゴミやらがホイホイ飛んできている。

それらを介旅は、全力で回避していた。

そんな彼へ気楽に声をかける。

「それにしても、あの連中から逃げ続けられるなんて、はぐれスライムさん並みの素質あるんじゃないの？」

「どうして師匠は、そこまで余裕なんですか!? 絶対僕の命日ですよね今日!」

「大丈夫。この試練を乗り越えれば、介旅から『スカル介旅』に進化出来るぞ」

「白骨死体確定!？」

疾走中に大きな声を出すと、すぐ体力が尽きるぞ。

しかし、さつきから周囲の障害物を利用したり、路地裏に回り込んでアイテムを巻こうとするなど、想像以上の立ち回りをしている。普通に走っていたら、即追いつかれていたはずだ。

そこんところ評価してやらないとな。

こいつは、特訓しただけでは化けるだろう。

「……はあ……はあ。早く、巻かないとスタミナが……」

「後ろのお嬢さん方々、この眼鏡くんが『運動不足の更年期オバサン共から逃げるなんてお茶の子さいさいだZ E』と漏らしております」

「師匠やっちゃったアアアアア!」

「テメエは百万回ブチ殺してやんよオオオオオおお!!」

「上等オじゃないですか。気がついたら、お陀仏って感じに死ンじやってくださいね」

「結局、麦野も絹旗も挑発を真に受けすぎって訳よ……」

はい、介旅君に死刑宣告が来ましたね、おめでとさん。
背後を向けば、メルトダウン原子崩しが雨のように降りそいでいる。
多分、威嚇だとは思いますが実は俺も怖い。どこぞのビリビリだったら、
普通に当てていると思うが。

「き、衣川師匠……。助けてくださいあい……」

どこぞの猫型ロボットにすがりつく、のび太のごとく腕を掴んできた。正直、うっとうしい。

「しょうがないなあ初矢くんは」

猫型ロボットのだみ声を出しながら、おれの三次元ポケットから小さなピンを手にした。中には不気味な色ステキの液体が入っている。

「ドーピングコンソメスープ（ドラ もん風に）」

「ドーピング!?」

説明しよう!

ドーピングコンソメスープ（略称・DCS）とは、某推理ものの皮を被った痛快ネウロ娯楽漫画に出てくる、究極の料理である。ドラッグや筋肉増強剤を精密なバランスで七日七晩煮込むことにより完成するのだ。

「早速コレを注入たぐるんだ」

「いやいやいやいやいや!」

DCSを詰めた注射器を差し向けるが、介旅は全力で拒否している。

「はあはあ……。麦野も絹旗も足が速すぎるって訳よ……」

息を切らすフレンドに眼をくれず、麦野と絹旗は驚いたというより、
啞然としていた。

「て、目の前のムキムキ怪人は何者お!？」

フレンドの視界に入ったのは、筋骨隆々の肉体を手にした介旅初矢
だった。ただし、マツチヨなのは上半身だけだ。下はちゃんとズボ
ンを履いている。

どう見ても気持ち悪いですね。

介旅は口が開いたままの、アイテム勢に対しクワツと笑いかけた。

「さあ諸君……僕が逃げるのを止められるかな……」

「結局、キモ過ぎるって訳よ」

フレンドの非常に的を得た指摘は馬の耳に念仏で、構わず介旅はア
イテムに向かって突進する。その勢いたるや、ゴシカアンと押し倒
しそうな勢いだ。

果たして、逃走する介旅をアイテムは止められるのか!!

しばらくすると介旅が目を覚ました。

ちなみに、ここは人気のない河原で介旅の姿は元に戻っている。上半身裸ですけど、何か。

「ううん……師匠、今までキレイな川が見えていたような……」

「それはきつと、お前がこれから何度か見るであろう川だ」

介旅が起きあがったので、Yシャツを渡しておく。俺のやつだが問題はないだろう。

着替えを終えたところで、介旅に向かって突然、真剣を振り抜いた。

頭蓋骨ぐらいなら豆腐のようになボロボロと砕きそうな勢いで。

「ちえいや」

「うわっ ああああ!!」

半ば反射的に頭を下げたので、すんでのところで刃が介旅の真上を切り裂いた。当の本人は、顔面蒼白で全身から冷や汗を流している。身体をガクガク震わせながら怒鳴りつけられた。

「ちょっと何すんですか師匠!! さすがに今のは悪ふざけじゃ済まされませんってば!!」

「まあまあ。弟子の成長を見たかったから、つい。俺の不意打ちを避けるなんて、成長したな」

「あ、ありがとうございます。テへへ」

嬉々として自分の頭をなでる介旅の姿は、微笑ましくもあり気持ち悪くもあった。さっきの修行？で危機察知能力が鍛えられたのだから。

「そんな介旅くんには、衣川師匠の特別修行セットを贈呈します」
そう言って、俺はポケットをまさぐる。

取り出したのは何枚かのDVDとギブス、それに丸薬の入ったビンだ。ビンにはドクロマークがしっかりと描かれている。

それら（特に薬）を見て介旅がおずおずと質問してきた。

「まさか、さっきの謎液体みたいなものは、混じっていないですよ
ね……」

「一応安心しろ。ドーピングコンソメスープと違って真つ当な効能だ。例えるならサプリメント的なものかな」

力の種やらタウリンやらを超圧縮して作ったステータスアップ剤だ。ちなみに『調合師』やら『道具作成』などのスキルに、豊富すぎる素材のせいで、一粒飲めば次元を一つ超えちゃう、バグチートドラッグと化してしまった。

なので介旅に渡したのは、五万分の一に薄めたバージョンだ。いきなり強くなっても困惑するだけだからな。

試しに原液を飲んでみたら、うん凄いよ……。

身体強化とかチャチなもんじゃねえ。恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

DVDの方は介旅が気絶している間に時間停止をして作ったやつで、『衣川ズ・ブートキャンプ』という。

著作権だと？ はっ！

『初級プログラム』『中級プログラム』『脱臼プログラム』の三段階に別れていて、毎日続ければ君も理想のボディーに的なやつだ。

介旅の感想は、「初級と中級だけを毎日頑張ることにします」だそうだ。

「それじゃあ、今日の修行はこれまでということ帰りますね。また修行があるときはメールお願いします」

「おい、待てコラ」

一方的に帰宅し始めた介旅の首根っこをつかんだ。息が出来ず苦しそうだが、構うものか。

テメエ様は、なに勝手にお帰りなさろうとしてやがんじゃ。ちよつと美少女達と爽やかにランニングしただけが修行とは、いいご身分じゃないか。

「お前には今から一年分の修行をさせてやる」

「へ………？」

「明日には介旅から『オメガ介旅』に進化しているだろう。とつと

と行くぞ」

「いずこへ!？」

「精神と時の部屋だ!」

介旅の修行はまだまだ続くぜ!

第十九話： 介旅は筋肉が少ない（後書き）

介旅さんの修行は次回で終わります。改旅の姿を見られることを祈って。

第二十話：介旅の修行後に起こる悲劇をステイルは知らない（前書き）

はい！

タイトル通り、介旅の修行は一段落付きます。成果は数話語ですが。

そしてステイルに起こる悲劇とは！？

第二十話：介旅の修行後に起こる悲劇をステイルは知らない

「キヤッホー！！ 女の子の自室だぁイッエエイ！」

「やっば帰れ」

介旅を無理やり俺の部屋に連れて行ったところ、ヒドいテンションで大喜びしだした。目から涙があふれているところが見るに堪えない。

「よし、修行を始めるからこっち来い」

「え、恋？」

「カ・モ・ン！！」

こいつの歯を全て叩き折りたい衝動をこらえつつ、扉の中へ蹴り飛ばした。

あ、顔を床にぶつけてら。ざまあ！

「何ですか……」

部屋の中は異空間同然だった。外を見渡せば白一色の空間しかなく、あるのは最低限生活出来るだけの部屋を持つ、小さな宮殿のみだ。

そう、ここぞドラゴンボールに出てきた修行場、『精神と時の部屋』だ。さつき神様をお願いして、取り付けてもらったのだ。

「さあ介旅。お前は一年間ここで……ってどうした？」

「く、苦しい……」

見ると、床に倒れ伏せながら喉をかきむしる介旅の姿があった。何やってんだ、お前。

……あ。

精神と時の部屋は常人にはキツすぎる環境だった。

失敗、失敗

重力と気温をマトモな状態に戻すと、幾分か楽になったみたいだ。普通に立って話すくらいは大丈夫か。

「身体が破裂しそうだった……。こんなところで修行ですか」

「そーだよ。一年くらいぶっ続けでな」

「一年！？ 学校はどうするんですか！」

「大丈夫だ問題無いだ。ここでの一年イコール外での一日に過ぎない。夏休みの宿題には差し支えないだろ」

「はあ……」

訝しげに部屋中を見渡す介旅だが、信じてくれるだろう。何と云ったって、片鱗でも俺のチートを見ていたからな。

「まあ……。実際は一日らしいし、衣川師匠と一緒になら……。エへへ」

「ちなみに俺は付き合わんぞ」

「え！？」

え、じゃねーよ。

俺は禁書目録事件の対応があるから修行する気はゼロだ。原作より早く上条が目覚める可能性もあるから、待機をしている。

「お前の修行相手をしてくれるのは、コイツだ。おい出てきていいぞ『クロ』」

「承知致しました」

すると向こうから、どこともなく黒い鎧が現れた。三メートルに達する身長からどす黒いオーラを放ち、目の部分からは赤い光が煌めいている。

そいつが低く野太い声で、介旅に話しかける。

「うぬが我が主の弟子か。ふん、枯れ枝のような餓鬼だな」

「ひいひい……。怖いです、衣川さんの三倍怖いですよ、この人(？)……………」

クロは俺が生み出した使い魔だ。最初は俺のパシリ兼修行相手にするつもりだったが、急遽介旅の指導を担当してもらったことになった。

ところで人数制限は本来二人までだが、神様のサービスで無制限に

なった。二日しか入れないというルールもわかりだ。

「では主よ。この小僧に一年間、教鞭を振るい続けていければ良いのですな」

「うん、頼むぞ。たつぷり可愛がってやれ」

「ハツハツハツハ。我輩は主ほど鬼ではありませんので、ご容赦を」
俺とクロの微笑ましい談笑を横で聞いていた介旅は、完全にチビつたようだ。

「い、嫌だ！ 僕はこんな鎧男と一年間過ごすなんて真つ平だ！！
き、衣川さんがいいー！」

「喧しいわぁアアアアアアアアアアアア！！」

駄々をこねる介旅に向かって、クロが怒鳴り声と一緒にどす黒い破壊光線を放った。介旅の背後で、凄まじい爆発が起きる。

「……………はい」

怖エエエエ！

クロさんマジ恐ろしいわ……。

一応、クロは俺ほどではないが、かなりのチート性能の持ち主だ。多分、太陽系すら余裕で抹消できるだろう。

呆然とすり介旅に構わず、俺は部屋の隅にあったボタンをポチリと押す。すると、真つ白だった外が、青空いっぱい草原へと変貌し

た。

それを見て、クロが感心したようにつぶやく。

「ふむ。流石、神様といったところだな。スイッチ一つで世界がー変しおったわい」

「ずっと遠くに行けば、火山とかジャングルとがcaあるぞ。修行場だけなら一万はある」

「それはそれは。腕が鳴りますな」

同じ風景ばかりは発狂してしまうからと、神様が考えたのだ。ナイ
スゴッド。

各スポットには珍獣やら住民がいるから、寂しくないね。レストラ
ンや服屋もあるらしい。

もはや、一つの世界が創られたと言っても過言ではない。神様パネ
エ……。

「じゃあというわけで、明日……お前からすれば一年後に見に来
るから、何かあったら連絡しろよ」

ドアノブに手をかけ部屋を出ようとした。そこで、芋虫のように転
がる介旅に足をつかまれた。ゾンビかお前は。

「……ここから出してください」

「おいおい。修行をつけて欲しいと言ったのはお前だろ。それに、

力を振りかざす連中に負けたくないんじゃないのか」

「……………それでもムチャクチャです。弱い僕には不可能です」

「いい加減にしる。いつまで俺YOEEEとかほざいているつもりだ」

「……………」

「俺はさ、自分に自信が持てないお前の姿を見たくないんだよ。少なくとも、自分を慕って来たやつは幸せにしたいし、望みくらいは叶えてやりたい」

「……………」

「だからムチャクチャでもさ、お前が強くなれるようにしてやりたいんだ」

「……………」

「だからさ、頑張ろうぜ。努力は無駄だなんて、俺が一切認めないからさ」

「……………」

「修行が終わったら、胸もんでいいよ」

神様は、突然つながった携帯から一方的に話しかけてきた。

覚えてるよ、クソゴッド！

「キタアアアアア！ ドンドン強くなっても必ず揃えてやる、ドラゴンパンツ！」

「又ハハハハハ！ 気に入ったぞ小僧！ 二人で主の胸を手にしようではないか。まずは、ここから北北西十三キロメートル離れた『化けギツネの森』へ向かうぞ、後に続けい！！」

いきなり意気投合し出した二人は草原の中を駆けだしてしまった。あと、クロはなに一緒におっぱい揉もうとしとるんじゃ。

集まらないといいな。ドラゴンパンツ（涙）。

精神と時の部屋に、もろもろの特製強化剤と時限爆弾を置いて自室に戻った。

あのバカ二人は、さぞ充実した一年を過ごすだろうよ。

ふと、ポケットの携帯電話が鳴りだした。そうだそうだ、あの神野郎への怒りではちきれそうだったな。

電話に出ると、相手の話しを一切合切無視して、全身全霊の罵詈雑言を浴びせた。

「おら！ このミスクソゴッド野郎、勝手に変な設定つけんなや！

！ いくらオメーに世話になつてる身分でも、この扱いはねえだろ。もう墮ちろ！ 地獄を突っ切つてコキュートスの果てまで墜落してしまえ！！ そんでサタンに尻振つてろや！！」

「……先生は衣川ちゃんに電話したら、間違い電話をしちゃいました。すみませんです」

「やっべー。小萌先生だったわー。神公かと思つたわー。ごめんなさい。」

俺は猫被りモードに入つて、小萌先生に全力で弁解を始めた。

「だ、大丈夫です！ わたしは衣川晶ですから、間違い電話じゃないよ」

「先生は衣川ちゃんのブラックというかレッドな一面を見た気がします……」

「違いますー。わたしは清楚な大和撫子ですから、いまのは白昼夢か何かじゃないでしょうか」

しばらく小萌先生をごまかす作業に専念するはめになり、やっと本題に入ることが出来る。

「上条ちゃんが目を覚ましたから、先生は衣川ちゃんにすぐ会いに来てほしいのです」

「本当ですか！ よかつた〜。今向かいます」

「全くー、衣川ちゃんは上条ちゃんにラブラブですからねー。羨ま

しいです」

「なっ!?!」

「いやいやいやいやいやいやいや。べ、別にそんなんじゃないわー! 俺はただ原作介入がしたいわけで、上条のことは親友くらいにしか……。」

「そりゃあ麻くんは優しいですし、わたしも大好きですけど、それはただの友達としてであって、ね、恋愛感情はな……いです」

「おやおやー。いつも上条ちゃんにデレデレの衣川ちゃんらしくないですねー。先生は生徒さんが、隠れツンデレさんで驚きなのです」

「だ〜か〜ら〜!」

俺が何を言っても、小萌先生は解っていますよ的に受け流すだけだ。ちなみに、いつぞやのデパートの件は御坂をからかうためであって、別に地じゃないからな! ほ、本当だぞ!

なぜかは知らないが、小萌先生の家へ向かうまでの間ずっと上条のことが頭から離れなかった。先生の言うとおり、上条にホの字みたいでイラついた。

いざ家の前に着くと、見知った顔を見かける。

「神裂とステイルじゃん」

第二十話：介旅の修行後に起こる悲劇をステイルは知らない（後書き）

介旅さんとクロがドラゴンパンツを全て揃えるのは回避不可能の決定事項として、収束します。

みなさんに質問ですが、衣川ちゃんに叶えてもらいたい願いを募集しています。感想にジャンジャン書いちゃってください。

第二十一話：盛り盛りもりもりもり（前書き）

テストが終わり、結果に身悶えし、zeroの原作を読んで、新約三巻を堪能し。一ヶ月ぶりの更新です。予想外に遅れましたアアアアアア！

第二十一話：盛り盛りも〜りも〜りもり

スタイルⅡマグヌス。

若干十四歳にしてルーン魔術を極め、なおかつ新たなルーン文字を完成させた少年。オカルトに関わる者は一人の例外もなく、彼を天才と称するだろう。

必要悪の教会に所属し、敬遠なる子羊を蹂躪する魔術師へ神罰を下す魔術師。その天賦の才を、弛まぬ労苦で研鑽された魔術は、絶対の一言に相違ない。

基礎的な術式は当然として、彼が得意とする炎は他の異能にも比し難い性能を有している。学園都市の高位能力者、ともすれば最強の七人 超能力者^{レベル5}に匹敵しかねない戦闘能力だ。

かの聖人 神裂火織と使命を共に受諾する立場であることから、彼への評価は並大抵の物ではない。

さて、そんな彼は極東の島国に点在する学園都市にいる。目的は、スタイルⅡマグヌスがその全てを賭しても護りたいと 護り続けると決めた少女、禁書目録^{インデックス}を追ってココまで来たのだ。

昨夜、魔術師と自称する一人の少女から手痛い逆襲を受け、奮闘むなしく、冷たいアスファルトを枕とする羽目になった。だが、そこは戦闘の、殺し合いのプロ。すぐに態勢を整え直すと、然るべき準備をして、彼女から受けた忌まわしい傷をバネに、もう一人の敵の居場所へ向かったのである。

しかし相手は奇妙な右腕を持っているとはいえ、ただの一般人。それに彼を観察する限り、この件には関係のない人物を巻き込みたく

みたいな感じのモノローグが流れているんだろうな。ステイルの脳内で。全部俺の妄想だが。

「おい！ 僕の髪が……どう始末をつけてくれる！！」

「お気を確かに、ステイル！」

さつきストレス発散として、ステイルの髪を引っこ抜いたら、後頭部の毛が一切合切なくなってしまった。辛うじて前髪が残っているくらいだ。

自分の頭を掻きむしりながらステイルが半狂乱で俺の胸倉を掴んできた。

「貴様という奴は！ 僕から髪の毛までも奪い去るのか！！」

「いや〜ん。ハゲバーコードにセクハラされちゃったあ」

「この……屑野郎！」

激昂したステイルの手から炎が迸る。そして、俺のプリティフェイスに手を押し付けて、至近距離からの炎剣をぶちかました。

なので、身体を透化して炎を身体から素通りさせた。同時にステイルの腕は空気を抱きしめる形になり、俺は解放される。

「チツ……」

心底悔しそうに舌打ちをするステイル。俺に向けられた瞳には、殺意と憎悪で満ちあふれていた。もしも俺がヴェントちゃんだったら、壮大な天罰が降り注いでいただろう。

「ん？」

そこで、一つの異変に気づいた。後頭部がハゲ散らかって、たいへん愉快なことになったステイルのヘアスタイルだが、それとは別に何か。

「あ！ 前髪でデコ隠してるし、イメチェン？」

そうだそうだ。

こいつは前髪を大きく左右に分けていて、額が丸出しなのがノーマルスタイルのはずだ。なのに今は、ぱつんとまではいかないが、前髪の先がキレイに並んでいるではないか。

「おいおい。まだ一日も経っていないのに、髪型を変えるとかさ、オシヤレ魔術師ステイルだね」

「ば、馬鹿！ 触れるなやめろ！」

俺が頭に手を伸ばそうとすると、ステイルは必死の抵抗を始めた。実に怪しいなあ。

まるで変質者のようにステイルに迫りくっついていく俺。

「オープンザヘア。オープンザヘア！ レッツ、オープンザヘア！」

「こら、勝手に髪に手をつけるな！ ストップストップ！！」

「おでこ様の、おな〜り〜い〜」

身体能力でステイルが勝てるはずがなく、無様にもデコを俺の視界に晒される羽目となる。

そして、そこには黒マジックで太く「肉」と掛かっていた。

……………はい。

「ぶっぎやはっはっは！ いーひっひっひー！！ ぶっ、プププププ
あはっ！！ に、肉とか！ ちよっ、ら、らめえ……………ぷーくすくす
！ お腹破裂するから止めて！！ 小学生のイタズラかよー！！
ひゃはは！ あゝ笑えねえ〜！！」

「やったのは君だろうが！」

腹の底から大爆笑してしまった。そういや、昨日ステイルの額にマジックで落書きしていたんだよな。しかも超強力なインクで。

否が応でも、嫌がらせをしないと気が済まなかったから。ひーふっふっふ！

「驚嘆に値する無神経だな……………。多少は謝罪の言葉をかけられないのかい……………」

「ざまあ（笑）」

「それが人間のする反応か!？」

「俺って人間なの!!!????」

「人間以下だな……。主に頭が」

全力で叫んだので、互いに息を切らしてしまった……。自尊心を汚された魔術師は、屈辱に歯を噛み締め、拳を握りしめる。神裂は神裂で、おぞましいものを見たかのような視線を、俺に注いでいた。

間の抜けた井戸端会議は、そこまでにして用件を訊ねると、案の定、上条とインデックスの様子をうかがいに来たそうだ。そこで、

「きよ、今日は親がいないから上がっても大丈夫だよ……」

「もじもじするな気色悪い」

「あと、貴女の家じゃありませんよね」

上目遣いで誘う俺に、ステイルと神裂が辛口なツッコミをふっかける。こいつらも上達してきたな。主に漫才テクが。

「This way(ついて来い)」

何故か簡単英語で、ステイル達を促し、錆びがこびり付いた鉄製の階段を上った。ステイルはハゲ頭(前髪のみ生存)でインデックスに会うことを渋ったものの、神裂に諭され、仕方なく同伴すること

にしたのだ。

ちなみに、ステイルの説得中に神裂が、

『あの人がインデックスに手を出していないとは限らないでしょう』

『もしかすると、二つ以上の意味でご飯が食べられなくなっているかもしれない……』

『まず片腕は諦めましょう……』

人権侵害も甚だしい悪口を、無意識のうちに垂れ流していた。もしも神裂の頭から情報をアウトプットして辞書を作ってみたら、千ページも渡る罵詈雑言（対俺）が綴られているだろう。

「うーっす。WAWAWA忘れ物」

気持ち良く鼻歌を歌いながら、小萌先生の家に入ると、怒り顔のインデックスとお粥を頭から浴びせられたらウニ頭がいた。さすが不幸少年上条当麻。

「当麻くん、一夜明かそ。あと、おじゃまします」

「こんなにも嬉しくない告白は初めてだ！！　あと、くつろいだよ。俺の家じゃないけどな」

「未知のトークスキルですね……」

出会い頭の夫婦漫才は、俺と上条にとって半ば習慣になっている。一応言っておくが、俺と上条に夫婦関係などないので、『早くデレ

るや』とかほざいた奴には、ナイフ千本を背中にお届けしよう。

目と口が三角形になっていたインデックスは、神裂のツツコミで魔術師の存在に気付く。一気に顔が警戒カラーに染まり、守るように上条と魔術師の間に立つ。

「と、当麻に手を出さないで！！ あきらは大丈夫そうだけど」

「インデックス……。彼女に手を出したら死にますね、私達が」

無知というものは罪なもので、インデックスの言葉が図らずも、神裂の顔を悲痛に彩られる。あと、ステイルを見たとき一瞬吹き出しそうになったので、ステイルの顔が違う意味の悲痛に彩られた。

「まあまあインデックスちゃん。警戒しなくてもいいよ。そもそも呼んだのは、わたしだし」

あまり重い空気は好きじゃないので、愛想笑いでこの場を取りまとめ。

「もしもインデックスちゃんに手を出したら、二度と物理的に手を出せない身体にしてあげるって忠告しておいたから」

「そんな約束は……いや何でもなし」

「少なくとも私達が貴方を襲うことなど、この言葉を貴方が覚えていいる間にはないでしょうね」

三人の禁書問答の結果を聞き、警戒は緩めないものの、インデックスは神裂とステイルを無碍に追い払ったりはしないようだ。

「インデックスちゃん、ご飯食べる？」

「わあ〜い あきらの料理なんだよ！」

速攻で警戒を解きおつた。その反応が実に微笑ましい。

料理を一から作るヒマもないので、王の財宝から、ゲイト・オブ・パレロンあらかじめ作っておいたカレーを出して、レンジでチンしておく。空間からいきなり皿とスプーンが出て来たので、上条は目を丸くした。対してステイルと神裂は、もう何でもありだなコイツと言わんばかりに、首を振っている。

数分後、五人はちゃぶ台を囲んで円卓会議を始めた。緊張した面もちでアグラをかく上条に、凜として正座をする神裂、インデックスはカレーライスをご賞嘆中だ。俺は小萌先生の冷蔵庫から缶ビールを拝借し、ステイルはニコチンをバラまいて空気を汚染している。全く、礼儀というものを知らないのかね〜。

「えーと、神裂だっけ？」

「いえ、今後のためにも互いに名前は知らないままの方がいいですよ〜……」

「露出狂の方が神裂・H・火織で、ハゲがステイル〓マグヌスね」

「神裂火織です！ ちゃんと覚えてください！」

「名乗ってんじゃねえか……。あ、初めまして上条当麻です、ステイルさん」

「我ながら別人だとは思っているよ……」

「あきらー、福神漬けが欲しいかも！」

実にカオスな会議が始まりそうだ。シリアスも鬱もありやしない。全部俺のせいだけだ。

インデックス以外の四人 通称・インデックスを守り隊（俺命名）としては、インデックスの記憶について、腹も胸も口も割って論議したいところだがインデックスの前では迂闊に話せない。

「う……………」

突然インデックスが自重を保てずに、タタミへ倒れ伏せた。

「インデックス!？」

駆け寄る上条だが、返事がない、ただの屍のようだ。

「眠っているだけだけどね」

「何だよビビらせやがって……。て、ちょっと待てコラ衣川。まさかカレーに……」

はい、そうです。

答弁を円滑するため、カレーに睡眠薬を。

「盛っておきました」

「おい……」

第二十一話：盛り盛りも〜りも〜りもり（後書き）

冬休み中なので早めの更新ができればなと思います。できればなあと、新作を書いてみました。

第二十二話：折角だから端折るうぜ（前書き）

諸事情で一週間程度の音信不通になっていました！
もうすぐで禁書目録編が終わる……。

第二十二話：折角だから端折るっぜ

「ええ、第一回、ロリシスターを犯……困む、じゃなくて、やっぱ犯す会を始めたいと思います」

「表に出る！」

座布団から立ち上がって怒るつるつるスタイルと、大人しくシットダウン中の上条と神裂が、一斉に俺の方を向いた。インデックスは布団で幸せそうに眠っており、寝込みを襲い放題な状況だ。

「とにもかくにも」

俺はビールを一口飲んでから息をつくと、

「タイムリミットが来る前に問題解決ができれば、それは僥倖だなってことだよ」

宿題を締め切り前に終わらせたらダメだというルールは無い。むしろ、夏休み前に課題を達成するヤツもいるくらいだ（そいつこそリアルチートだろ）。ならば、話を円滑に進められれば上々である。

「はっ」

そこで、部屋中を絶賛ニコチン汚染していたスタイルが皮肉気に鼻を鳴らした。

「まさかこの期に及んで、あの子を何とかできるなんて寝言を喋る口があったとはね。いやはや、とんだお笑いショーじゃないか。救

えないものは、どう足掻こうが救えない。これこそ真理さ」

「デメエ……」

嘲りに満ちた暴言を吐くステイルに、上条は苛立ちと義憤を滲み出していた。神裂も神裂で、困ったように沈黙する。

「諦めるのはまだ早いよ。きっとまた生えるからさ。信じようよ、毛髪を」

「もう頭のごとは、蒸し返さないでくれ!!」

「夢も希望もア ランスにある!」

「神裂……この件が終わったら、僕は鬘を買うんだ」

俺の素晴らしい励ましに、ステイルは涙目になってまで喜んでくれたようだ。

そういえば、ステイルの地毛って金髪なんだよね。

「衣川……お前ってSなんだな。上条さんは、こういうの、ちょっと苦手ですね……」

上条が若干というか心底怯えたように、俺を見つめてきた。やべっ!
調子に乗りすぎた。

「つーか髪を抜くとか鬼かお前は」

「いや、赤い海藻だと思って、つい……」

「つい、って……。髪が命なのは女だけじゃないからな」

おおっと上条さんよ。

俺も元男だからハゲへの恐怖は理解できるぞ。ただし、ステイルの痛みは一ミリも理解できないけどね。

「まあ、とにかくだ。ステイルの髪は心底どうでもいいとして、衣川が記憶の容量だの云々言ってたけど、詳しく説明してくれ」

「心底は余計だウ二頭」

横で拗ねたステイル　略してスネイルが喚くが全員無視した。

「バカな当麻くんにも理解できるように、『猿でも分かる、あきらめのぱーふえくと脳髄教室』を始めます。はい拍手」

「直接的にも間接的にも馬鹿にされてるような……。まあ、パチパチー」

「ほら、火織ちゃんも拍手拍手」

「ええ、と……わ、ワー！パチパチー！」

「何やってんのお前」

俺の上げて落とすツッコミに、ガクツと顔面をちゃぶ台に打ちつける神裂。ほんと、いじりやすいよなコイツ。

「だから掻い摘んで解説すると、記憶の容量がオーバーして死ぬなんてありえましょーん。ソースは小萌先生と某お堅い百科事典」

「見事に端折つたなオイ」

嘆息する上条。だが、真相とは時たまにして短絡的なものだ。既に内容を聞いたスタイルと神裂は、複雑な表情を浮かべている。

ちよつと気遣いが足りなかったかな……。

「……ちよつと待て。じゃあインデックスは脳が圧迫されてんだよ？」

「それを解明するのが、わたし達だよワトソン君」

「誰が助手だ」

さてさて。

インデックスは最大主教に『アーク・ビショップ首輪』の呪縛をかけられている。それを解除すれば、インデックスの記憶を消さずにすむ。

原稿用紙約二行分で終わる説明だ。しかし不用意に言えば、相手も不信感を抱くだろう。

「火織ちゃんは何か思い当たる？」

「……いえ。未だに理解がついて行かなくて。すみません」

ちつ。まだ追い込まれている訳じゃないからな。そう都合よく解は出ないか。

「……まさか！」

そこでステイルが何か気づいたようで、口を開いた。ついでに、煙草が落ちて凄^ひい迷惑だが。

いや、そんなことを気にする余裕はないか。

「あの女狐め……！ いけしゃあしゃあと猿芝居をしやがって……！」

憤怒に震えた拳で、手近な壁を叩きつける。ステイルの双眸は遙か遠く、イギリスの最大主教アーク・ビショップへと憎悪を向けていた。どうやら、気づいたね。

「そういうことだったのですね……！」

神裂も言葉の意味を理解し、驚愕と消沈にうなだれる。

二人の魔術師の急激な変容に、上条は目を白黒させていた。

「どづいうことだ、ステイル！ 神裂！」

「僕達は騙されていたんだ……！」

上条の問いに返ってきたのは、ステイルの絶望に満ちた声であった。俺は続くように言葉を紡ぐ。

「恐らく禁書目録インデックスという猛獣を縛るための鎖　つまり脳を圧迫する措置をかけられた」

「……その飼い主、イギリス清教そのものがインデックスに枷を付けたって言うのかよ……！」

上条が隣室のインデックスを指差す。

「まあ、組織論としては花丸だけど、人道なんてクソ食らえな悪魔の仕掛けだよな。これって」

「こんなの、許されるわけねえだろ……」

「許さないから、助けるんでしょ？」

「ああ!!」

俺の問いに上条は強く強く応えてくれた。これほど信頼できる言葉は、そうそうない。

目の前で不当に苛まれる人間がいて、それを不幸から手を差し伸べるのが上条当麻だ。今まで彼を見てきたヤツなら、誰もが知っている。そして、そいつに出会えた幸運を神に感謝したい。

上条は自らの右手を掲げ、そして呟く。

「そうさ、右手でインデックスの呪いを打ち消せば……」

「駄目だ!!」

それを割ったのは、ステイルの叫びだ。その顔は憤怒というよりも、一種の躊躇いを見せたものだが。

「曖昧な可能性なんていらなんだ！ もしも、万が一、あの子に異変があったらどうする……。いつものように記憶を消せば、とり

あえず命だけは救われるんだ……」

言葉尻は弱々しいものの、芯は固く頑なで揺るぎなかった。

彼が歩んだ道程を知るのなら、真意は推してはかるべきなのだろう。だが、

「お前はそれでいいのか」

「なっ……」

「お前はそれでいいのかって聞いてんだよ！」

知っていてなお上条は、魔術師に異を唱えた。断罪ではなく最後通牒として。

「ココでインデックスを諦めるなら、テメエは二度と『あいつを守る』なんて口に出来ない！ 断言するぞ。テメエは一生、インデックスに負い目を抱えて生きる羽目になる！ 自分の意志じゃなく、責任感でなあ……」

「だがあの子が死ぬよりは、遥かにマシだ！」

吼える上条に負けじと、ステイルも噛みつく。果たして、どちらに非があると言えるのか。俺には解らない。

「それに、禁書目録がイギリス清教に命を狙われるかもしれない。僕じゃ手に負えなくなるかもしれない！そこまで考えて口にしてるのか、偽善者……」

「ああ、フォックスワード偽善者で結構だよ！ だけど、苦しんでるのが誰よりもイ

ンデックス自身だつてことを忘れんじゃねえ！！ テメエが救いたいの、テメエ自身じゃなくてインデックスだろぅが！！、例え偽善でも、誰だつて、テメエだろぅとも、あいつのヒーローになれるんだよ！」

「っ……………！？」

「当麻くん……………」

上条の長く重く激しい確認に、ステイルは押し黙った。

そこからは長い沈黙だけだ。皆が状況を見守る中、上条の眼だけがステイルを射抜いていた。流石に、俺や神裂も一切の発言をする勇氣はない。

ステイルはインデックスを見つめた。柔らかな布団の中で、幸せそうに寝息をたてる少女。まるで、この世の全部の幸福を身に受けたかのような微笑みが、そこにはある。

そしてまた、目を瞑り、静止した。気の遠くなるほど長い時間。もしかすると一分も経っていないかもしれない。

「勘違いするなよ……………」

ようやく口を開き、薄く呟いた。

「僕は僕の意志であの子をインデックスを救うんだ。上条当麻君にほだされたわけじゃないからな」

ふん、このツンデレ野郎め。格好いいじゃねえか。髪が抜けてるけど。

「それに……その女が味方するなら、これほど安全な手段はないさ」
「へ……？」

思わず自分を指差し、声を上げてしまった。勘違いかと思っただが、ステイルの視線は明らかにこちらを向いている。
あと、ドヤ顔すんなハゲ。

「ははっ。そりゃあ確かにな。衣川ほど頼れるやつは、そうそっさいねえしな」

いやね上条。そんな、褒められると照れるから！

ちよ、やめてよね。俺、こっぴつムードはこそばゆくて苦手なんだよ……。

「てか、ニヤニヤしながら見てんじゃねえ露出侍。風穴あけてやるうか」

「ふふっ、顔が紅潮してますよ」

「呪っぞー！」

なんだか俺がアウエーな空気だ。パロディ発言もしてしまった。どう責任を取ってもらおうか、ステイルくウウウウウウウン！

「何はともあれ」

そう言いながら、俺に近づいた上条が肩を叩いてきた。

「色々巻き込みしまったけど、またチカラ、貸してくれるか衣川」

「巻き込まれに来たと訂正しろ、当麻くん」

猫被りも中途半端になってきたが、今なら猫を被らなくても、同じように接してくれるだろうよ。こいつなら。

話もこれくらいにして、俺、上条、ステイル、神裂は、インデックスを囲むように立った。そして、上条は腕を捲って右手を掲げる。

これからの闘い、これ以降の闘い。彼は右腕のみを頼りにしていかなければならない。それだったら俺が、もう一本の右腕になるまでだ。

最後に俺は上条へ語りかけた。

「当麻くん……」

「何だ。かなり深刻そうだな……」

「おトイレ行きたい」

「ほんつと、この子は空気読めねえなああああああああああああああ
あああー！」

ポロアパートの中心で頭を抱えて絶叫する上条少年。実はまだ夕方の頃だった。

あと、ステイルと神裂はずっこけてた。それはもう、頭からキレイに。

そもそもインデックスの何処に魔術が仕組まれているのか解らないので、調べることにした。その間に俺は便座に跨ることにしよう。美少女のトイレシーンですよ皆さん。

描写する前に携帯が鳴ったから、出にゃならんけど。

「はい、衣川です」

『シリアス乙』

やっぱ来やがったな、神様め！

周囲に聞こえないように、音バリアを張って会話する。

『愛しの上条さんに褒められた気持ちはいかがですか？ねえねえ』

「愛しのとかそういう恋愛感情はさておき嬉しかったと聞かれれば
そうでもなくもないような上条との関係はラブじゃなくてライクだ
からね、はい」

『顔真っ赤で、汗がたらたらですけど、晶さーん』

「どんどん性格が悪くなってるな、お前」

『どどん乙女になっていくあなたに言われたくないですね、キャハッ』

UZEEEEEE!

神様がこんなにウザイ子ちゃんでがっかりしたよ。

『まあまあ。あなたが元気そうでなによりですよ』

「そりゃあ、あんだけチートを貰えばな」

『私が心配しているのは、そこじゃないんですけどね……』

「はい？」

『あなたが、とあるの世界で幸せに暮らせているかどうか。私はあなたを転生させてから、それがずっと気がかりでした』

上京した娘を気遣う母親みたいだな。一応は合致しているだろうけど。
しかし、いつになく真剣なので口にしない。

『元と言えば、私のミスが元凶ですし……』

まだ気にしてんのか……。

俺には神様を恨む気持ちなんてないし、神様と出逢えたんだから感謝したいくらいだ。だけど、俺が何と言おうと神様自身が神様を許せないのだろう。

こういつ時にかける言葉が出ない自分がイヤになる。チートのクセにな。

『だけどもあ、信頼できる愛し……友人もできたみたいで、今の晶さん凄く幸せそうです！』

「今訂正したよね。すんごく良い台詞言ってたけど、ごまかされないからね」

『ちっ、ホント空気読めねーですね』

「H A H A H A H A H A ! 爆ぜろ」

やっぱり湿臭い空気は苦手だ。だからつつい、話のコシを追ってしまっ。

神様とは、ゆる〜い付き合いが出来るような関係でいたい。

そっだそうしようじゃないか。それが神様の救いになるのならな。神を救う人間とか、笑い話にもならないけど。

『……最後に一つ。やっぱり上条さんの記憶を消すんですね』

「何度も確認してくれてありがとうな。けど、こうでもしないと色々都合が悪いんだろ」

『必要悪かと言えばそこまですが、記憶消去をしなかったら、まず確実に原作は正常に進行しませんね』

……それは十分にも、十二分にも分かりきったことだ。今更、グチ

グチしていてもしょうがない。

「別に後悔はしないと思うぜ。……実質はたった一カ月くらいの仲間だからな」

『……分かりました。衛星はきちんと上空にありますから、治療は今でも大丈夫ですよ』

神様は何を理解してくれたのだろう。多分、俺以上に俺の心理を知っているのかもしれない。

さて、現実逃避のような会話は仕舞いにして、試練に挑むとしようか。

「じゃあ、そろそろ切るぞ。あと、ありがとうな」

『……………』

「神様？」

『罰ゲームの件、忘れないでくださいね』

そう告げて、ものの見事に携帯をブッチされたのだった。

……上手いこと羽根が命中して、記憶喪失にならないかな。俺が。

いずれ訪れるであろう災禍よりも、今為すべき試練を乗り越える方が先決だ。

トイレから出たあと、もうインデックスの喉元に『首輪』があると判明していた。

いざという時に備えて、定位置で構える二人の魔術師。上条は包帯を外した右手をインデックスの口に突っ込もうとする。

「インデックス禁書目録を縛るための魔術。そんなものにイギリスのお偉いさんが、何の処置も施していないとは思えない。だから　　気をつける」

「ああ」

俺の忠告は既知のものだとばかりに、返答する上条。そして、最後にこちらを向いて口を開いた。

「衣川。この戦いが終わったら、適当にウマイもんでも食べようぜ。もちろん、お前の奢りでな」

……そりゃあ死亡フラグですよ上条さん。本当に洒落にならないし。

沈黙を諾と受け取ったのか、何も言わずに右手をインデックスの喉元へ押し込んだ。

「……がつ！」

直後、膨大な力に上条の身体が吹き飛ばされた。そして衝撃とともに、部屋中へ戦慄がほとばしる。

「警告」

無機質な声が響いた。
いや、機械音と言うべきかも知れない。あらゆる情操が廃絶された、
信号。

そこに立っていたのは、先ほどまで眠りについていたインデックス
だ。象すら永眠させる、特性あきら様エキスを意に介さず、自動書
記ヨハネのが起動した。

どこまでも機械的な無表情で、禁書目録は防衛プログラムを起動す
る。

「『首輪』への不正侵入を確認。一〇万三〇〇〇冊の保護のため、
不正進入者『上条当麻』の敵対を最優先します」

第二十二話：折角だから端折るうぜ（後書き）

はい、シリアスな回でした。シリアスはきつい……。

上条さんの説教を書いて思ったのですが、あそこまで心に響く台詞を書ける鎌池先生ってスゲーよ！

第二十三話： つ・か・も・う・ぜ・ドラゴンプレス！（前書き）

タイトルはふざけていますが、今回はガチバトルです。

第二十三話： つ・か・も・う・ぜ・ドラゴンプレス！

ヨハネのペン
自動書記が展開した魔法陣から、白い光線が放たれた。

ドラゴンプレス
竜王の殺息。歩く教会すらも塵芥にする、絶対なる破壊。

当然、軌道は上条へと向かっている。しかし、臆すことなく、むしろ正面から突っ込んでいた。

「当麻くん危ない！」

「うおおおおお！！！」

雄叫びを上げながら、右手をかざす上条。だが、あまりにも強大すぎる力は幻想殺しですら相殺しきれない。

「援護します！ 救われぬ者に救いの手を（Silver000）

」

叫びと共に、七天七刀から幾多の鋼系ワイヤが展開された。そのまま、インデックスの足場の畳が払われる。

だが、

「警告、第三五章第一八節。『硫黄の雨は大地を焼く』 発動」

灼熱するオレンジの矢が、容赦なく降り注いだ。その数、五十。

結果、それらは鋼系ワイヤを焼き尽くし、禁書目録の攻撃の妨害に失敗した。

さらに、残った矢が俺達を目掛け飛来する。

「全弾叩き落とす！」

言葉と共に、視界には蜘蛛の巣のようなひび割れが出現した。これは、空間のひびを視認し破壊する能力　フォルテツシモによるものだ。

その内、光弾に付いているひびを全て遠隔的に破壊し、この場にいる全員への被弾を防いだ。

だが、ドラゴンゴブレスの殺息は出力を曖昧にしながら、上条を押し潰そうとしたままだ。早くしないと、右手の方が弾け飛んでしまう。それを見かねた、ステイルが的確に指示を出してきた。

「神裂、衣川晶。僕を含めた三人で上条当麻を援護しろ。右手が禁イ書ンテックス目録に触れれば、自動書記も機能停止するはずだ」

「ええ判っています！　しかし……」

「攻撃の方は俺と上条で阻止するから、ステイルと神裂は何とか光線の軌道をそらしてくれ！　一瞬でもいい！！」

返答の代わりとして、神裂は僅かな動作で術式を組み、ステイルはルーンのカードを部屋中に展開した。

「時間を稼げ、イノケンティウス魔女狩りの王！」

術陣から召還された炎の巨人が、上条のいる位置へ向かって直進する。ただし、上条と衝突しないギリギリのルートを通過して。

「曲がりなりにも法王級の魔術だ。何とか注意を向けてくれよ……」
依然として上条を標的に定めていた自動書記。ヨハネのペン 魔女狩りの王が発動してから、三秒後、ハイライトの無い瞳が巨人の方を向いた。

「警告、第三七章九節。更なる敵性を察知。一時的に優先順位を『上条当麻』から、術名『インケンティウス魔女狩りの王』へ変更します」

瞬間、禁書目録は方向転換し、ドラゴンコンプレクス 竜王の殺息がインケンティウス 魔女狩りの王へと放たれた。

「いまだ！ 突っ込め上条当麻！！」

「サンキュー魔術師！！」

一瞬、上条はバランスを崩したものの、ステイルの叫びに押されて砲弾のように駆け出したのだ。

更なる時間を稼ぐため、俺は右手にプレートを、左手に念のこもった針を構える。ところが、いざ行動をしようとした矢先に、禁書目録の無情な宣告が放たれた。

「警告、第二九章第三三節。『ペクスチャルヴァの深紅石』 発動」

「な……ッ！」

動揺する俺を無視して、『何か』が地面を這ってきた。すかさず上条はその場に踏み込んだが、

「ぐああああああああああああああああ！！」

突如として悲鳴をあげた。まるで未知の痛苦が這い上がるかのように、上条は苦しみながら膝をついてしまった。

「足だ！ 足元から魔術が来ている！」

俺の叫びに応じ、上条は太ももへ右手を叩きつけた。そこで、苦痛から解放されたかのように息をつく上条。幸いにも、神裂が構築した結界により、俺達にまでは被害は及ばなかった。

だが、ヨハネのペン自動書記は微かな隙すら見逃さなかった。

「第二〇章第九節。曲解した十字教のモチーフを確認。上記の術式に対し最も有効な術式の構築を開始します」

言葉が続く中、インケンティウス魔女狩りの王と拮抗していたドラゴンブレス竜王の殺息が、赤黒く変色を始めた。

「命名、『神よ、何故私を見捨てたのですか（エリ・エリ・レマ・サバクタニ）』発動準備完了。即時実行します」

そして軽々とインケンティウス魔女狩りの王を引きちぎり、光線は進行を続ける。次いで、カードの方にも負荷が逆流し、消し炭となってしまった。

「僕がこの一大事に、何の用意もしていなかったと思うなよ」

それでも、スピアとして予め仕込んでいたルーンを稼働させ、再度、インケンティウス魔女狩りの王が召還された。

しかしながら、同じ手は何とやら。禁書目録の背後から生えた、三対の翼が風払われ、瞬く間に魔女狩りの王をかき消した。

インケンティウス

「じはっ!？」

最悪なことに、残りの翼が上条の胸へと命中し、扉に命中するまで飛ばされてしまった。

これで降り出しに戻ってしまったのだ。

「くそっ……右手さえ、右手さえインデックスに当たれば正気に戻せるのに」

悔しさを隠さずに呻く上条。無論、気持ちは皆一樣に同じだ。

かく言う俺も、インデックスを傷つけず、かつ幻想殺しイマジンプレイカーを持つ上条を送り込むための手段に四苦八苦していた。

「衣川晶。私に考えがあります」

すると、神裂が口早に作戦を提案してきた。

「貴女の術式に、あの子の体勢を崩す方法がありますか？ 可能ならインデックス自身に被害の及ばない範囲で」

「人間が思いつくことなら大抵出来るつもりだが」

「なるほど。なら、私の合図と共に術式を発動してください。少しなら、あの子の隙を付くことができます」

淡々と策をあげる神裂の顔には、これまで見たことのないような自

信と確信が表れていた。
いいだろう。のったぞ、お前の策に！

「オーキードーキー。アフターケアまで任しとけ！　だが、その前に……」

その前にインデックスが再びブン回してきた翼を何とかする方が先決だ。

「ここは俺の右腕の出番だな！」

獯猛に笑いながら、上条は翼に備えて幻想殺しイマジンブレイカーを構えた。そして予想通り、ピンポイントで翼と衝突し、見事霧散していく。

すかさず赤黒い光線を放とうと、インデックスは術式を組む。
そこに勝機があった。

「今です！！」

「どっせい！　転こげやがれ！」

合図が聞こえてすぐに、俺はグラグラの実の力を発動させた。それにより部屋中で地震が発生し、足場がアンバランスに揺れ出した。インデックスは不安定に動きながら、見当違いの方向へ竜王ドラゴンブレスの殺息を撃ち出している。

「ちょ、衣川！？　やり過ぎだつて！」

うっかり味方のバランスまで崩してしまったが、神裂だけは聖人の力で踏ん張り、七天七刀を掲げた。

「今度こそ成功させます！」

「またも、鋼糸ワイヤーが部屋中を駆け回り、足元の畳が引き上げられた。よって、インデックスは今度こそ空中を向き、竜王ドラゴンブレスの殺息が屋根をぶち抜いた。

「神眼で宇宙を見たところ、ちゃんと『ツリーダイアグラム樹形図の設計者』は破壊されたようだ。

「上条当麻！ 貴方の力で、あの子を、インデックスを救ってくださいー！！」

「ああ！」

勝利を掴み取るため、上条は、また床を踏み出す。

負けじと、インデックスも竜王ドラゴンブレスの殺息を向けようとするが、

「させませんよー！」

まるで鎖で雁字搦がんじめにされたように、インデックスは動きを束縛された。

「どうやら拘束系の術式をついでに組んだようだ。ナイス、神裂！」

「なら、オマケにプレゼントを贈ろうか」

手にしていたプレートと針をインデックスの頭部へと命中させた。

「片や、支配者を支配するスキル『エラーメッサーシプレート操作令状』。もう片方は、針の刺さった相手に暗示をかける念能力。どちらも、インデックスの自由

意思を奪うには十分なものだ。

それにより、インデックスの動きはより歪いびつに不自然なものとなった。

「警告、第四七章第八〇節。心理的效果による心身の拘束を確認。拘束効果をダミー領域へ誘導し、術式の逆算行動能力の確保を優先します」

よし、イケるぞ！

あとは、上条がインデックスに右手で触れれば……。

「あ、あれは！」

神裂の叫びが、新たな危機を警告した。見ると、上空から天使の羽のような光が空から墜落している。

「気をつけて！ あれは聖セントジョージの一撃と同義です。一枚でも触れれば大変なことに……！」

「くっ……」

上条は、羽の猛威を防ぐために右手でガード体勢をとる。それが仇となり、インデックスに拘束から解放される猶予を与えてしまった。

今度こそ最後の最後で、無慈悲なる滅びの一閃が上条へ向けられた。

「させるかあ……！」

俺は、アリバイプロック腑罪証明で、上条とインデックスの間にワープして割り込ん

だ。

そして光線が命中する寸前に、

「アヴァロン全て遠き理想郷！」

暗器として仕込んであった聖剣の鞘が展開し、真名開放に呼応され無敵の結界が稼働した。

アヴァロン全て遠き理想郷　天と地を分かつ一撃すら防ぐ絶対の宝具だ。

ドラゴンコンプレクス竜王の殺息は、結界で押さえ込んだ。既に上条を阻むものはどこにもない。インデックスは目と鼻の先だ。

「いっけえええええええ上条！」

「衣川……ありがとな！」

感謝の言葉と共に、上条は右手を伸ばした。
そして。

「まずは、その幻想をぶち殺す！」

決め台詞が響いたときには、インデックスをしっかりと掴んでいた。
ヨハネのペン自動書記が破壊されたのだ。

「警……告……」

虚ろな機械音が鳴り響いたかと思うと、それは機能停止を告げ、

「インデックス！」

インデックスを魔導書図書館から一人の少女へと解放した。

灯りの消えた部屋。既に暗くなった空から、星の光が煌めく中、上条はインデックスを抱きかかえた。それはまるで、捕らわれの姫を助けた王子のように。

神裂が叫んでいた。

上条の頭上では、ドラゴンプレス竜王の殺息の残滓である、羽根が舞い降りている。

駆け出そうとする足を無理矢理、どうにかしてでも押さえ込み、傍観に徹底しようとする。

気がつけば、上条の頭には羽根が突き刺さっていた。

「バイバイ、上条当麻」

誰にも聞こえない声で、俺は呟く。

こうして、これまでの上条当麻は今死んだ。『ただの』じゃない友達は、記憶と共に消えていった。

第二十三話：つ・か・も・う・ぜ・ドラゴンブレス！（後書き）

ようやくと禁書目録編が終わりそうです。

罰ゲーム回まで、あと二、三話くらいかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4456t/>

とある世界にチート転生してしまった件について

2011年12月30日00時50分発行